高知県埋蔵文化調査報告書 第32集

土佐国衙跡発掘調査報告書
第11集

――金屋地区の調査――

平成３年３月

高知県教育委員会

土佐国衙跡発掘調査報告書
第11集

―― 金 屋 地 区 の 調 査 ――

平成３年３月

高 知 県 教 育 委 員 会

序

高知県教育委員会では重要遺跡確認緊急調査として国庫補助を受け、昭和54年度から土佐国衙跡の発掘調査を実施してまいり、本年度で11年目を数えます。

これまでの発掘調査によって、奈良時代から平安時代にかけての国衙関連と考えられる掘立柱建物跡や塀跡及び溝跡等が確認され、国衙域の様相解明に多くの進展をみてまいりました。

本年度は、昨年度の調査で多数の官衙関連の掘立柱建物跡が確認された金屋地区を再度調査対象地とし、調査を実施しました。その結果、数多くの官衙関連の掘立柱建物跡や何らかの区画をなす塀跡や溝跡を確認することができ、政庁跡確認への大きな手掛りになるものと期待されます。

本書は、平成２年度の調査概要をまとめたものであり、各方面で活用され、文化財保護と研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査に際し御指導いただいた文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめとし御教示をいただいた先生方、終始御配慮下さった南国市教育委員会ならびに地権者の方々、そして調査に御協力下さった地元比江地区及び「国府史跡保存会」の皆様方に深く感謝の意を表し御礼申し上げます。

平成３年３月30日

高知県教育委員会

教育長　西森　久米太郎

例　　言

1　本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて、平成２年度に実施した土佐国衙跡発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）の概要報告である。

2　発掘調査は、南国市教育委員会の協力と、須田勉氏（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）の指導を受けて実施した。

3　発掘調査体制は次のとおりである。

調査顧問　岡本健児（高松短期大学教授、高知県文化財保護審議会々長）

調 査 員　廣田佳久（高知県教育委員会文化振興課主幹）

庶　　務　堀川郁夫（　　〃　　埋蔵文化財班長）

4　本書の執筆、写真撮影等は廣田が行った。

5　遺構については、ＳＢ（掘立柱建物跡）、ＳＡ（塀跡）、ＳＫ（土坑）、ＳＤ（溝跡）、Ｐ（ピット）で標示し、遺構番号は『土佐国衙跡発掘調査報告書』第１～10集からの通し番号である。

6　出土遺物の図版番号については、実測図の番号と一致している。

7　発掘区の設定、拡張及び遺構の測量にあたっては、昭和58年度に設定した公共座標第Ⅳ系による基準点を使用し実施した。なお、標高は海抜高である。

8　報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。方位のＮは真北を指す。

9　調査にあたっては、地権者の方々をはじめとする地元比江地区及び南国市教育委員会の御協力をいただいた。また、現地作業員並びに整理作業の皆様の御援助に対し、記して感謝する次第である。

10　出土遺物、その他の資料は、高知県教育委員会において保管している。

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過……1

Ⅱ　調査概要……5
　1　調査方法と経過……5
　2　層序……6
　　(1)　基本層序……6
　　(2)　包含層出土遺物……6
　3　遺構と遺物……7
　　(1)　掘立柱建物跡……7
　　(2)　塀跡……13
　　(3)　土坑……17
　　(4)　溝跡……22
　　(5)　その他の遺構と遺物……25

Ⅲ　総括……29

挿　図　目　次

第１図　土佐国府跡位置図
第２図　土佐国府跡地名図
第３図　土佐国府跡第1～25次発掘区設定図
第４図　発掘区設定図
第５図　発掘区セクション図
第６図　遺構全体図
第７図　ＳＢ－68
第８図　ＳＢ－69
第９図　ＳＢ－70～72
第10図　ＳＢ－73
第11図　ＳＢ－68・69・73、ＳＡ－22セクション
第12図　ＳＢ－74
第13図　ＳＢ－75
第14図　ＳＡ－20
第15図　ＳＡ－20・21・23セクション
第16図　ＳＡ－21～24
第17図　ＳＫ－113・114
第18図　ＳＫ－117～119
第19図　ＳＤ－58セクション
第20図　ＳＤ－60セクション
第21図　金屋地区遺構配置図
第22図　遺物実測図１
第23図　遺物実測図２
第24図　遺物実測図３
第25図　遺物実測図４
第26図　遺物実測図５
第27図　遺物実測図６

表　目　次

第１表　土佐国衙跡発掘調査一覧表（第１～25次調査）
第２表　掘立柱建物跡計測表
第３表　塀跡計測表
第４表　土坑計測表
第５表　溝跡計測表
第６表　遺物観察表１～８

図　版　目　次

図版１　調査前全景（東より）
　　調査前全景（西より）
図版２　Ａトレンチ遺構検出状態（西より）
　　Ａトレンチ遺構検出状態（東より）
図版３　Ｂトレンチ遺構検出状態（北より）
　　Ｂトレンチ遺構検出状態（南より）
図版４　遺構検出状態（北より）
　　遺構検出状態（北より）
図版５　遺構完掘状態（北より）
　　遺構完掘状態（東より）
図版６　遺構検出状態（西より）
　　遺構検出状態（西より）
図版７　遺構完掘状態（北より）
　　遺構完掘状態（西より）
図版８　ＳＢ－68（北より）
　　ＳＢ－69（西より）
図版９　ＳＢ－70～72（東より）
　　ＳＢ－73（東より）
図版10　ＳＢ－74（北より）
　　ＳＢ－75（西より）
図版11　ＳＡ－20（東より）
　　ＳＡ－20（西より）
図版12　ＳＡ－21（北より）
　　ＳＡ－21のＰ－１（北より）
図版13　ＳＡ－22（北より）
　　ＳＡ－22のＰ－３（西より）
図版14　ＳＡ－23・24（西より）
　　ＳＡ－23のＰ－１（西より）
図版15　ＳＫ－113・114（北より）
　　ＳＫ－113・114（北より）
図版16　ＳＫ－115（北より）
　　ＳＫ－121・122（南より）
図版17　ＳＫ－117～119（東より）
　　ＳＫ－117（西より）
図版18　ＳＫ－118（西より）
　　ＳＫ－119（東より）
図版19　ＳＫ－119（北より）
　　ＳＫ－119（北より）
図版20　ＳＤ－58（西より）
　　ＳＤ－58（西より）
図版21　ＳＤ－58（西より）
　　ＳＤ－58（西より）
図版22　ＳＤ－58（西より）
　　ＳＤ－58（北より）
図版23　第Ⅲ層、ＳＢ－70、ＳＫ－113・114
　　遺物出土状態
図版24　ＳＫ－114・115・118遺物出土状態
図版25　ＳＫ－118・119遺物出土状態
図版26　ＳＫ－119、ＳＤ－58、Ｐ－３遺物出
　　土状態
図版27　ＳＤ－58出土遺物
図版28　ＳＤ－70、ＳＫ－113出土遺物
図版29　ＳＫ－113・115出土遺物
図版30　ＳＫ－119出土遺物
図版31　ＳＫ－119出土遺物
図版32　出土遺物１
図版33　出土遺物２
図版34　出土遺物３
図版35　出土遺物４
図版36　出土遺物５
図版37　出土遺物６
図版38　出土遺物７
図版39　出土遺物８
図版40　出土遺物９

Ⅰ　発掘調査に至る経過

土佐国衙跡の発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）は本年度で11年目を数える。本年度も事業費は500万円であった。

本年度の調査も昨年度同様南国市教育委員会の協力を得て高知県教育委員会が事業主体となり実施した。調査対象地の選定に際しては、昨年度までの調査結果をもとに官衙関連の遺構が数多く確認されている地区及び政庁の想定される規模が収まる地区に重点をおいた。その結果本年度調査可能となった金屋地区を調査対象地とした。調査対象地は、昨年度の金屋地区での調査区と隣接した1,999㎡の水田で、標高16.9ｍを測る。

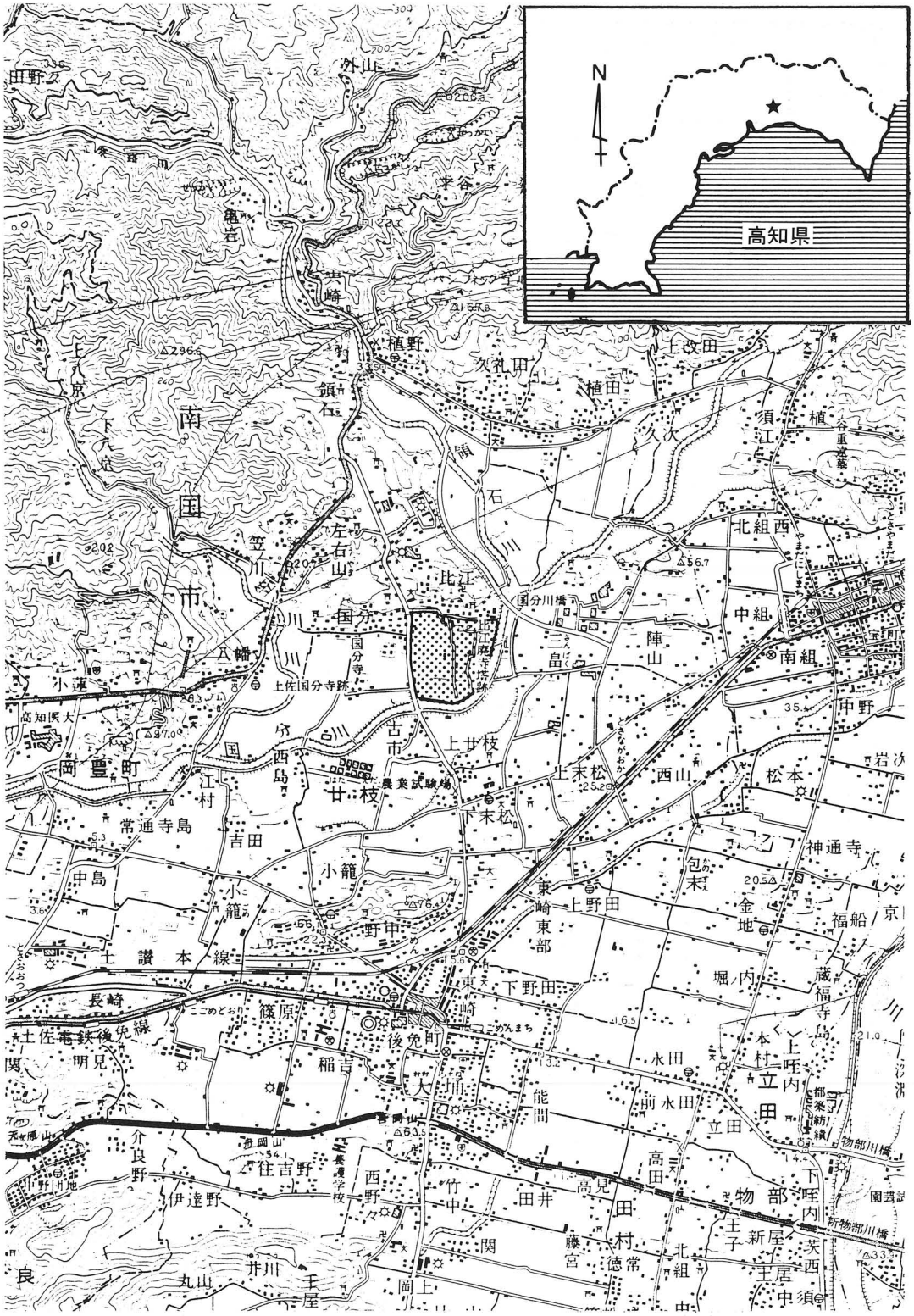
調査は平成２年10月８日から開始し、測量そして埋戻し作業が完了したのは平成２年12月７日であった。最終的な発掘調査は743㎡であった。

調査にあたっては、南国市教育委員会の斡旋で土地所有者である竹内直城氏に調査の承諾をいただくことができた。また、調査地区周辺の土地所有者及び比江地区の方々、「国府史跡保存会」にも多大な御協力をいただき、ここに記して謝意を表したい。

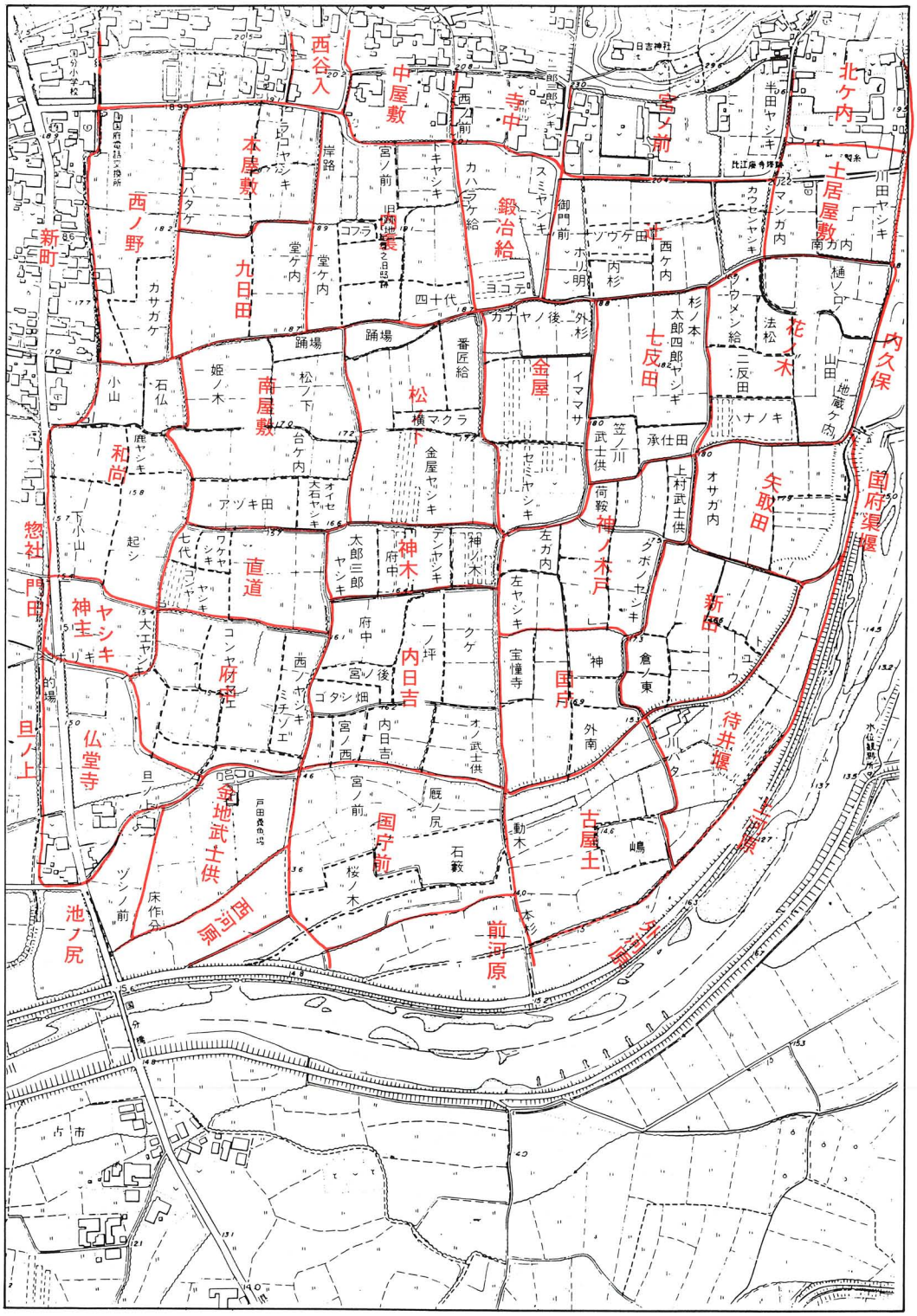
第１表　土佐国衙跡発掘調査一覧表（第１～25次調査）

調査次数	期間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				掘立柱建物跡	溝跡	その他	
1	52. 2. 1 ～ 52. 2. 3	新ラ田	緊急発掘調査 （市道改良工事）			柱穴	緑釉陶器
2	54. 1.27 ～ 54. 2. 1	松ノ下	同上	2 （中世）		柱穴	
3	54. 2.13 ～ 54. 3. 1	太郎三郎屋敷	同上	3 （平安２）	2	土器溜　1	黒色土器・瓦器 土師器・鉄釘
4	54. 4.20 ～ 54. 5. 2	神ノ木戸	重要遺跡 確認調査		3 （奈良末1・ 平安中２）	土坑　3	円面硯・黒色土器 須恵器・土師器
5	54. 8.20 ～ 54. 9.12	宮ノ西	緊急発掘調査 （市道改良工事）	2 （平安末 ～鎌倉）	4	土坑　2 （奈良末）	円面硯・転用硯 墨書土器 風字硯・緑釉陶器
6	54.11. 6 ～ 54.12.11	クゲ 国庁	重要遺跡 確認調査	1 （奈良末）	2 （平安前１）	柱穴 （中世）	円面硯・青磁 白磁
7	55. 9.28 ～ 55.10. 4	クボノヤシキ 荷鞍 左が内	緊急発掘調査 （市道改良工事）		1	土坑　1	須恵器・青磁 常滑
8	55.11.17 ～ 55.12.15	ダイリ	重要遺跡 確認調査	5 （平安３）	1	竪穴住居３ 貯蔵穴２	須恵器（横瓮） 緑釉陶器

調査次数	期間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				掘立柱建物跡	溝跡	その他	
9	56. 9.10 ～ 56.11. 4	内日吉のうち 府中	重要遺跡 確認調査	7	5	竪穴住居 2 土坑 7	円面硯 緑釉陶器
10	56.10. 8 ～ 56.10.19	神ノ木 内日吉	緊急発掘調査 （市道改良工事）		1	柱穴	
11	57. 9.17 ～ 57.11. 6	内日吉 太郎三郎屋敷	重要遺跡 確認調査	11 （奈良６・ 平安２）	13 （奈良５）	竪穴住居 2 土坑 16	円面硯・瓦器 青磁・白磁
12	58.10. 5 ～ 58.11. 7	内裏 堂ヶ内	同上	6 （奈良～平安）	1 （６Ｃ末～ ７Ｃ初）	竪穴住居 5 土坑 5	須恵器・土師器
13	58.11.22 ～ 58.12.10	内日吉 クゲ	同上	2 （奈良）	2 （中世）	井戸 1 土坑 8	須恵器・瓦器
14	59.10. 1 ～ 59.11. 1	一ノ坪	重要遺跡 確認調査	5 （奈良～平安）	3	竪穴住居 1 柵列 5 （奈良～平安）	須恵器・土師器
15	59.11.16 ～ 59.11.22	鍛冶給	同上	1 （奈良～平安）		土坑 1	〃
16	59.11.30 ～ 60. 1.10	松ノ下	同上	6 （奈良～平安）		竪穴住居 1 土坑 4 柵列 1	〃
17	61.10.16 ～ 61.11.29	松ノ下	同上	4 （奈良～平安）	4	竪穴住居 1 土坑 10 （平安３）	刻書土器（須恵器）
18	61.11.12 ～ 61.12.19	南屋敷	同上		1 （奈良）	土坑 15	須恵器・土師器
19	61.11.20 ～ 61.12.15	内日吉	緊急発掘調査 （排水路 改修工事）		1 （平安～中世）		〃
20	62.11.16 ～ 62.12.18	松ノ下 （横マクラ）	重要遺跡 確認調査	2 （奈良～平安）	3 （奈良～平安）	竪穴住居 3 土坑 3	〃
21	62.12. 1 ～ 63. 1. 8	金屋	同上	5 （奈良～平安）	3 （奈良～平安）	竪穴住居 3 土坑 7 柵列 6	〃 緑釉陶器
22	63.10.12 ～ 63.12.10	同上	同上	3 （平安）		竪穴住居 3 土坑 22 塀跡 1	須恵器・土師器 円面硯・緑釉陶器
23	1.11. 1 ～ 1.12.27	同上	同上	9 （奈良～平安）	5 （平安）	竪穴住居 3 土坑 7 塀跡 3	〃
24	1.11.29 ～ 1.12.27	神ノ木戸	同上	1 （平安）	1 （平安）	土坑 5	〃
25	2.10. 8 ～ 2.12. 7	金屋	同上	8 （奈良～平安）	7 （平安～中世）	塀跡 5 土坑 12	須恵器・土師器 鉄刀子・常滑



第1図　土佐国府跡位置図（S＝1／50,000）



第2図　土佐国府跡地名図

番号	調査年月	調　査　地　区
1	S52. 2	新ラ田
2	S54. 1	松ノ下
3	S54. 2	太郎三郎ヤシキ
4	S54. 4	神ノ木戸
5	S54. 8	宮ノ西
6	S54. 11	クゲ・国庁
7	S55. 9	クボノヤシキ・荷鞍・左が内
8	S55. 11	内　裏
9	S56. 9	府　中
10	S56. 10	神ノ木・内日吉
11	S57. 9	府中・太郎三郎ヤシキ
12	S58. 10	堂ヶ内
13	S58. 11	ク　ゲ
14	S59. 10	一ノ坪
15	S59. 11	鍛冶給
16	S59. 11	松ノ下
17	S61. 10	松ノ下
18	S61. 11	南屋敷
19	S61. 11	宮ノ西
20	S62. 11	松ノ下(横マクラ)
21	S62. 12	金　屋
22	S63. 11	金　屋
23	H1. 11	金　屋
24	H1. 12	神ノ木戸
25	H2. 11	金　屋

第3図　土佐国府跡第1～25次発掘区設定図（S＝1／4,000）

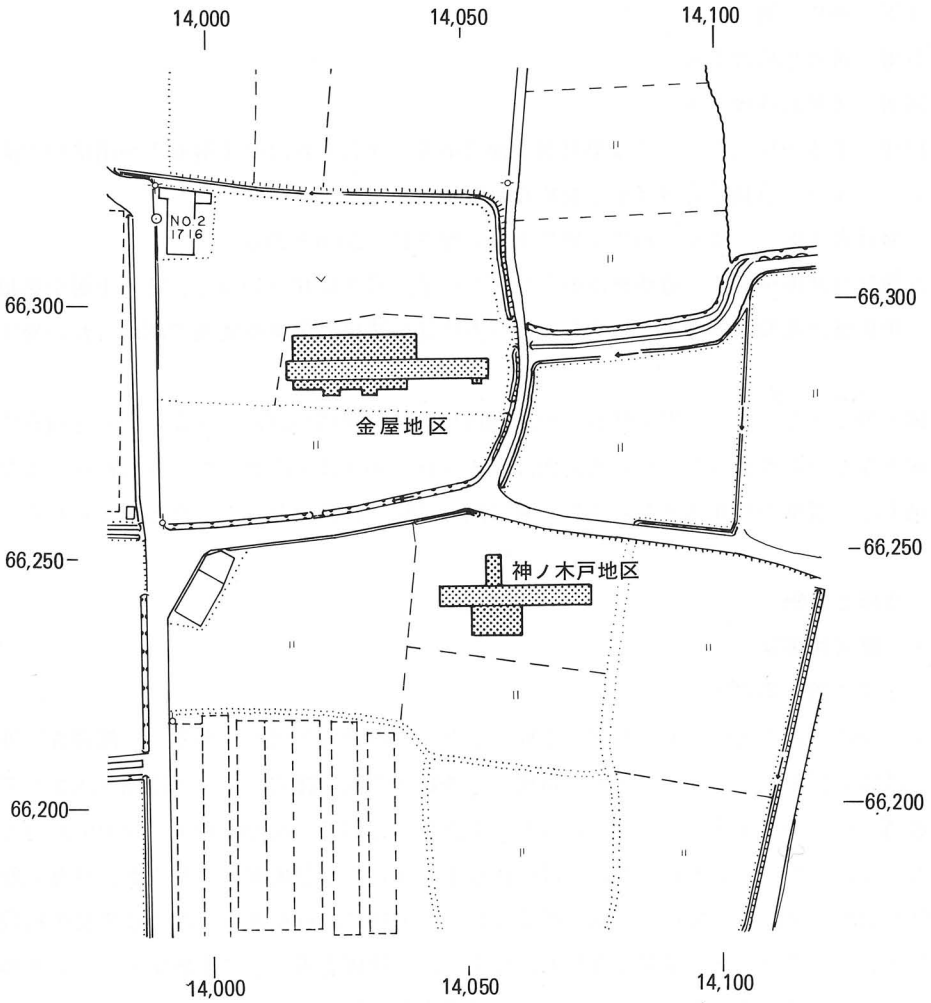
II 調 査 概 要

1 金屋地区

(1) 調査方法と経過

今次の発掘調査対象地は南国市比江字金屋 495番地であり、標高約16.9mを測る水田である。小字は金屋で、ホノギをセミヤシキと称す。この金屋地区は、南北約180m、東西約80mと南北に長い地区で、昭和62年度から3ヵ年をかけて調査して来た。今次の調査区は金屋地区の南3分の1にあたり、市道を隔てて西側が松ノ下地区、南と東側が神ノ木戸地区である。

調査は、まず調査区中央に東西トレンチ(4×40m)を設定して行った。その結果、西部と中央部を中心に建物跡等の遺構が検出されたため、その部分を中心に可能な限り発掘区を拡張し、



第4図 発掘区設定図(S=1/1,500)

遺構の確認に努めた。

今次の調査によって確認された遺構は、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡８棟、土坑７基、溝跡５条、塀跡３条、性格不明遺構２基及び柱穴とみられるピット群等であった。出土遺物は、遺物包含層が残存していなかったため少なく、総数約3,000点であった。遺物の大半は須恵器と土師器であるが、ほとんど細片で摩耗しており、復元可能なものは極めて少なかった。

これらの遺構、遺物は、調査区中央部から西部にかけて多くみられ、その時期は弥生時代から中世初頭にかけてのものである。ただし、遺構として確認できたのは古墳時代以降のものであり、この中には古代官衙に関連するとみられる掘立柱建物跡８棟、塀跡３条が含まれる。

(2) 層序

今次の調査において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土層

第Ⅱ層　黄褐色粘質土層

第Ⅲ層　黄褐色砂礫土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅱ層上面であり、換言すれば第Ⅰ層直下が遺構検出面となっていた。また、遺物包含層は全く認められなかった。

第Ⅰ層は表土層で、現在の耕作土層である。厚さ15～20cmを測る。

第Ⅱ層は自然堆積層で、遺構検出面となっている。厚さは40～50cmで、その下層が第Ⅲ層となる。第Ⅲ層は基盤の砂礫土層であり、掘り方の深い遺構の側壁や底面で認められた層序である。

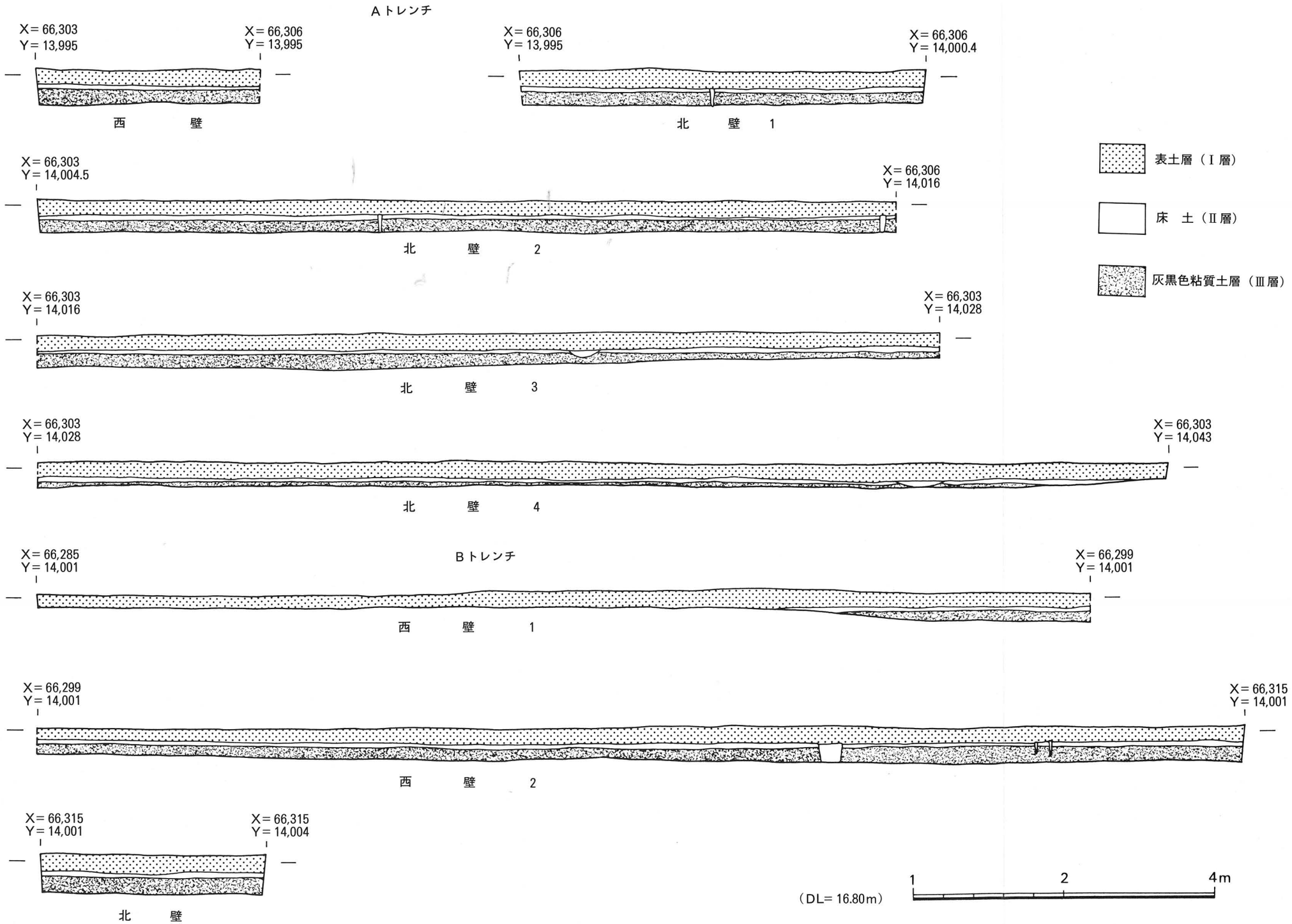
遺構の埋土となっていた黒色粘質土や黒褐色粘質土の堆積が認められないことと残存する遺構の深さなどから考えると古代の生活面は今より40～50cmほど高かったとみられる。また、当時の地形は、遺構の残存状態からみて、東に向って徐々に高くなっていたと考えられる。

(3) 遺構と遺物

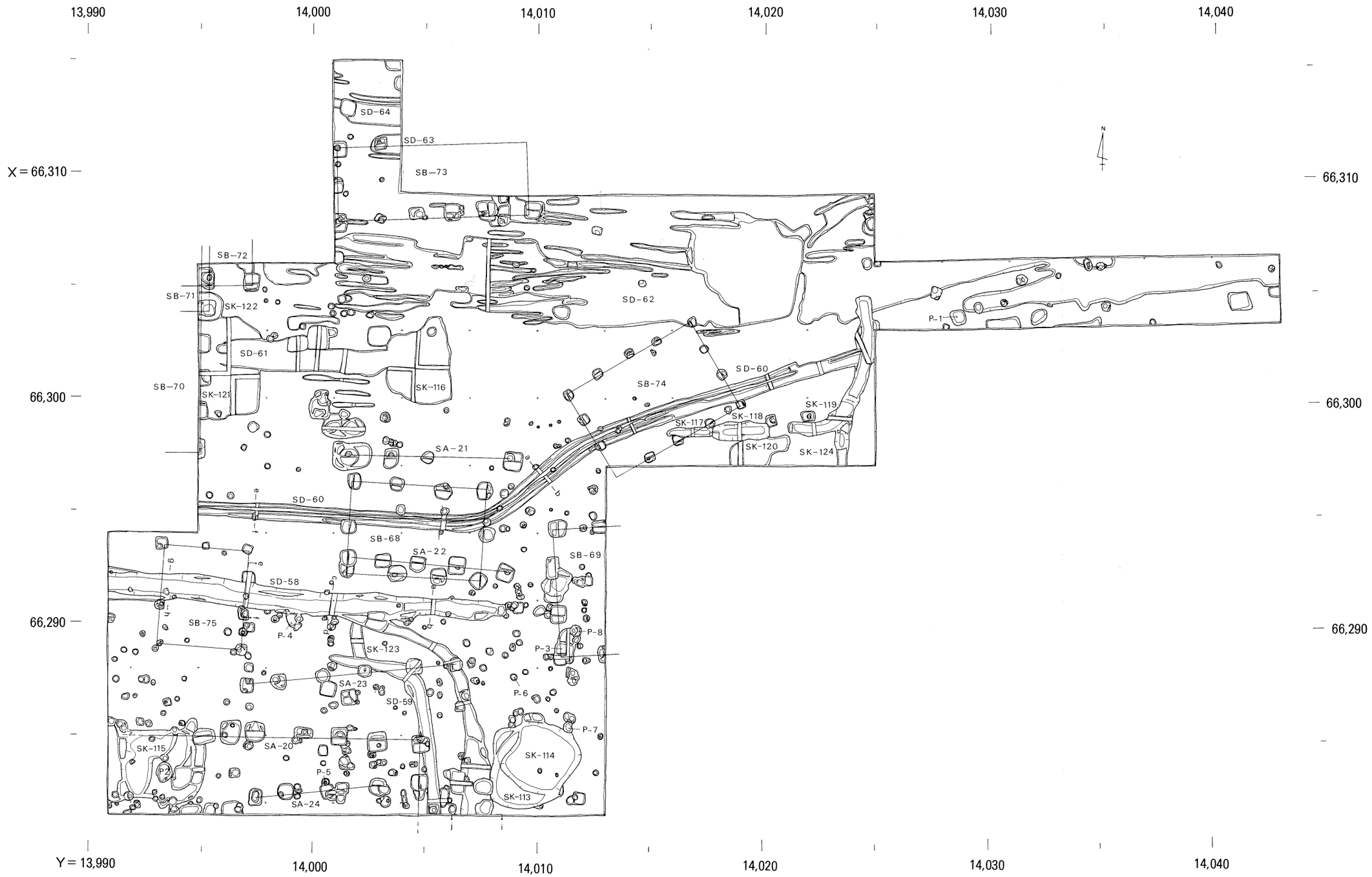
① 竪穴住居跡

ＳＴ－28（第６図）

ＳＴ－28は、調査区中央部北西寄りで検出した大型の竪穴住居跡である。一部調査区外にあるが、ほぼ全容を知ることができる。遺構は、多数の古代の柱穴やピットに掘り込まれており、付属遺構のいくつかは壊されたとみられる。平面形は方形で、長辺6.50ｍ、短辺6.35ｍを測る。長軸方向はＮ－36°－Ｗである。壁はほぼ平担な床面からやや急角度で上がるが、残存状態は不良で壁高は約10cm程度である。床面の標高は16.701～16.747ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土に黄褐色粘質土のブロックを多量に含むものであった。付属遺構として十数個のピットを検出した。この内主柱穴と考えられるのはＰ－１・２であり、他の主柱穴はＳＢ－62の西の妻柱と北



第5図　発掘区セクション図



第6図　遺　構　全　体　図（S＝1／200）

第Ⅲ層出土遺物

須恵器（第22図４～６）

４は杯蓋で、口縁部は緩やかに下り、端部で下方へ屈曲する。天井部は平らでつまみは欠損する。５と６は高台の付く杯身で、５の口縁部は外反気味に上がるのに対し、６のそれは内湾気味に上がる。端部は双方とも丸く仕上げられる。

土師器（第22図７）

器面にヘラ磨きを施す杯で、口縁部は体部から内湾気味に上がる。口縁端部の内側への折り返しは認められない。

３　遺構と遺物

(1)　掘立柱建物跡

今次の調査では８棟の建物跡を確認した。これら建物跡の柱穴の掘り方はすべて基本的には方形であるが、柱穴の規模が異なるものも存在する。

ＳＢ－68（第７図）

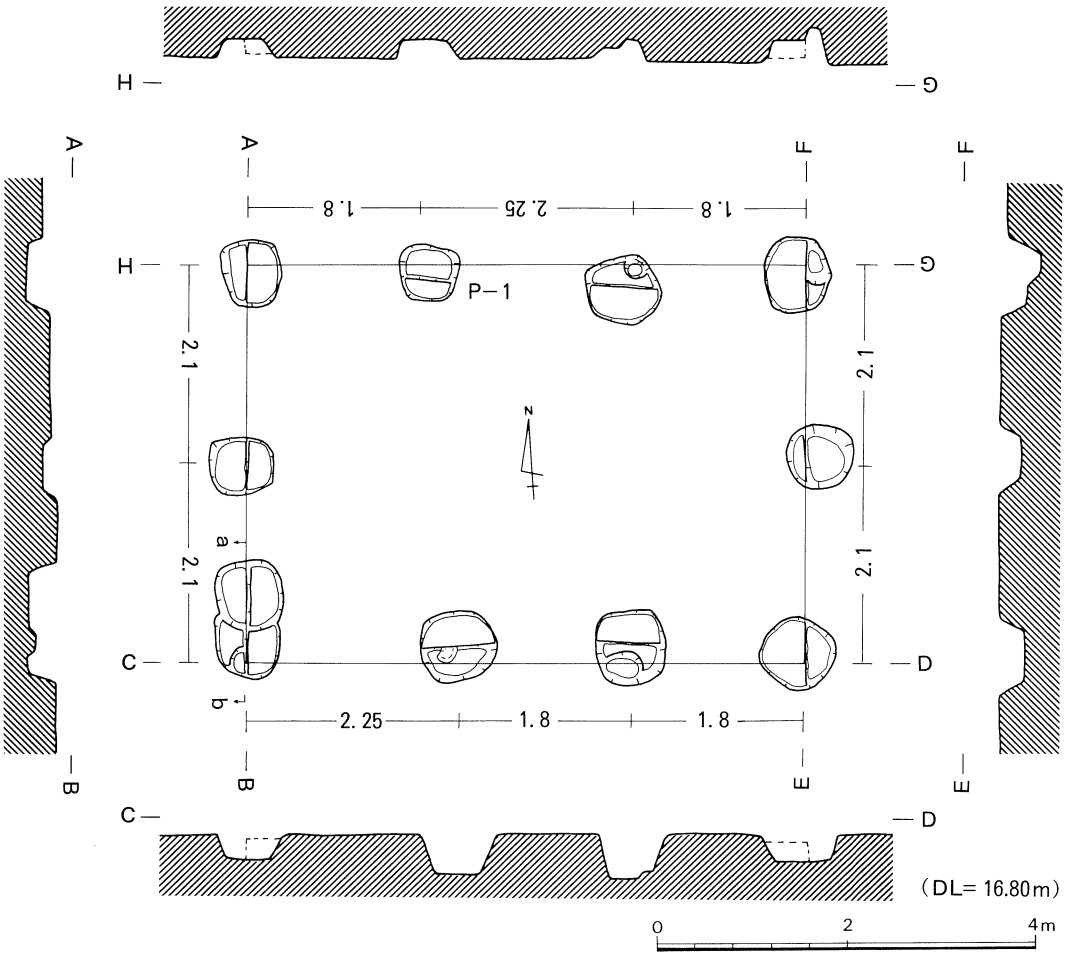
ＳＢ－68は、調査区ほぼ中央部で検出した桁行３間（総長約5.85ｍ、19.5尺）、梁間２間（総長約4.20ｍ、14尺）の東西棟掘立柱建物跡である。建物はＳＡ－22に切られていた。棟方向はＮ－86°4′－Ｗで、真北に対し若干東に振っている。柱間寸法は、桁行が1.8ｍ(6尺)と2.25ｍ(7.5尺)、梁間が2.1ｍ（７尺）等間隔である。柱穴の掘り方は方形で、一辺60～82cm、柱径は20～25cmと推測される。柱穴の大きさはほぼ揃っている。これら柱穴の深さは検出面から13.9～44.0cmで、底面の標高は16.199～16.478ｍを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物は、北側柱のＰ－１から弥生土器片が１点、土師器片が２点出土しているのみで、復元できるものはなかった。なお、土師器片２点は８～９世紀頃のものとみられる。

ＳＢ－69（第８図）

ＳＢ－69は、調査区南東部で検出した桁行３間（総長5.7ｍ、19尺）、梁間１間（2.1ｍ、７尺）以上の南北棟掘立柱建物跡である。実際は、桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物跡であると推測される。第23次調査の際確認したＳＡ－17の西側の柱が、本建物の南妻柱東端の柱穴になる可能性もある。また、Ｐ－３は本建物を切って掘り込まれていた。棟方向はＮ－3°50′－Ｗで、真北に対し若干西に振ってる。柱間寸法は、桁行が1.8ｍ（６尺）と2.1ｍ（７尺）で、両端間が1.8ｍ（６尺）となり、梁間も1.8ｍ（６尺）と2.1ｍ（７尺）である。柱穴の掘り方は方形で、一辺53～80cm、柱径は20cm前後と推測される。これら柱穴の深さは検出面から26～45cmで、底面の標高は16.183～16.363ｍを測る。埋土は黒色粘質土に褐色と暗黒色粘質土のブロック及び土粒を多く含むものであった。遺物には、土師器片と須恵器片が10点程度出土しているが、復元可能なものはなかった。なお、これら遺物は８世紀末から９世紀にかけてのものとみられる。

ＳＢ－70（第９図）

ＳＢ－70は、調査区北西部で検出した桁行５間（7.8ｍ、26尺）以上、梁間不明の南北棟掘立柱建物跡である。実際は、桁行６間、梁間２間程度の南北棟掘立柱建物跡ではなかったかと推測される。建物は、ＳＢ－71・72に切られていた。棟方向はＮ－0°29′－Ｅで、ほぼ真北を向く。柱間寸法は、桁行が1.5ｍ（５尺）と1.8ｍ（６尺）で、両端間が1.8ｍ（６尺）、中３間が1.5ｍ（５尺）等間隔という寸法をとるとみられる。柱穴の掘り方は方形で、一辺68～86cm、柱径は25cm程度と考えられる。これら柱穴の深さは検出面から22～46cmで、底面の標高は15.941～16.186ｍを測り、柱穴の深さを交互に変えた形となっている。埋土は黒色粘質土に暗黒色と褐色粘質土のブロックと土粒を含むものであった。遺物には、須恵器片３点、ヘラ磨きを施したものを含む土師器片５点、及び図示できた須恵器があった。この須恵器はＰ－１から出土したものである。



第７図　ＳＢ－68

出土遺物

須恵器（第22図８）

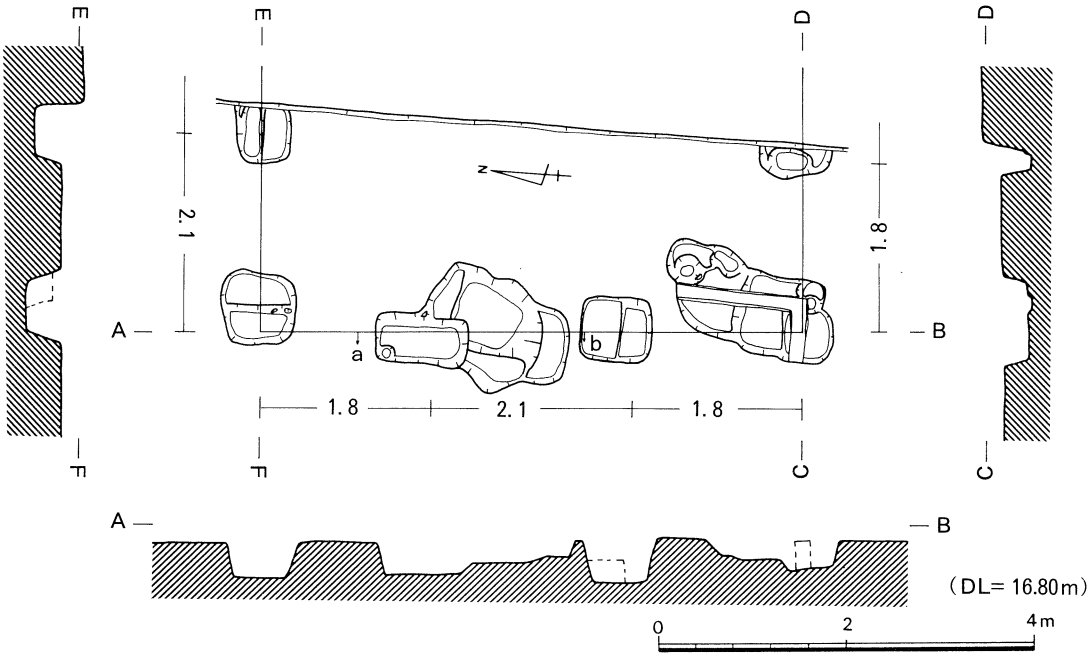
甕で、中胴部以下が欠損する。肩部外面には平行タタキ目が施される。

ＳＢ－71（第９図）

ＳＢ－71は、調査区北西部で検出した桁行１間（1.5ｍ、５尺）以上、梁間不明の建物で、桁行４～５間、梁間２間程度の南北棟掘立柱建物跡ではなかったかと推測される。その場合、棟方向はＮ－1°26′－Ｅで、ほぼ真北を向く。柱間寸法は、桁行が1.5ｍ（５尺）で、梁間は不明である。柱穴の掘り方は方形で、一辺60～68cm、柱径は約20cmとみられる。柱穴は、ＳＢ－70・72の柱穴をそれぞれ切って掘り込まれていた。これら柱穴の深さは検出面から37～66cmで、底面の標高は15.739～16.030ｍを測る。埋土は黒色粘質土に暗黒色と褐色粘質土粒を含むものであった。遺物には、須恵器片１、土師器片１があったのみで、復元可能なものはなかった。

ＳＢ－72（第９図）

ＳＢ－72は、調査区北西部で検出した桁行不明、梁間１間（1.8ｍ、６尺）以上の建物で、ＳＢ－71同様桁行４～５間、梁間２間程度の南北棟掘立柱建物跡ではなかったかと推測される。その場合、棟方向はＮ－1°９′－Ｅで、ほぼ真北を向く。柱間寸法は、桁行は不明で、梁間が1.8ｍ（６尺）である。柱穴の掘り方は方形で、一辺70～80cm、柱径は20cm前後と推測される。柱穴はＳＢ－70の柱穴を切って掘り込まれていた。これら柱穴の深さは検出面から11～36cmで、底面の標高は16.043～16.288ｍを測る。埋土は黒色粘質土に暗黒色と褐色粘質土粒及び小ブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。



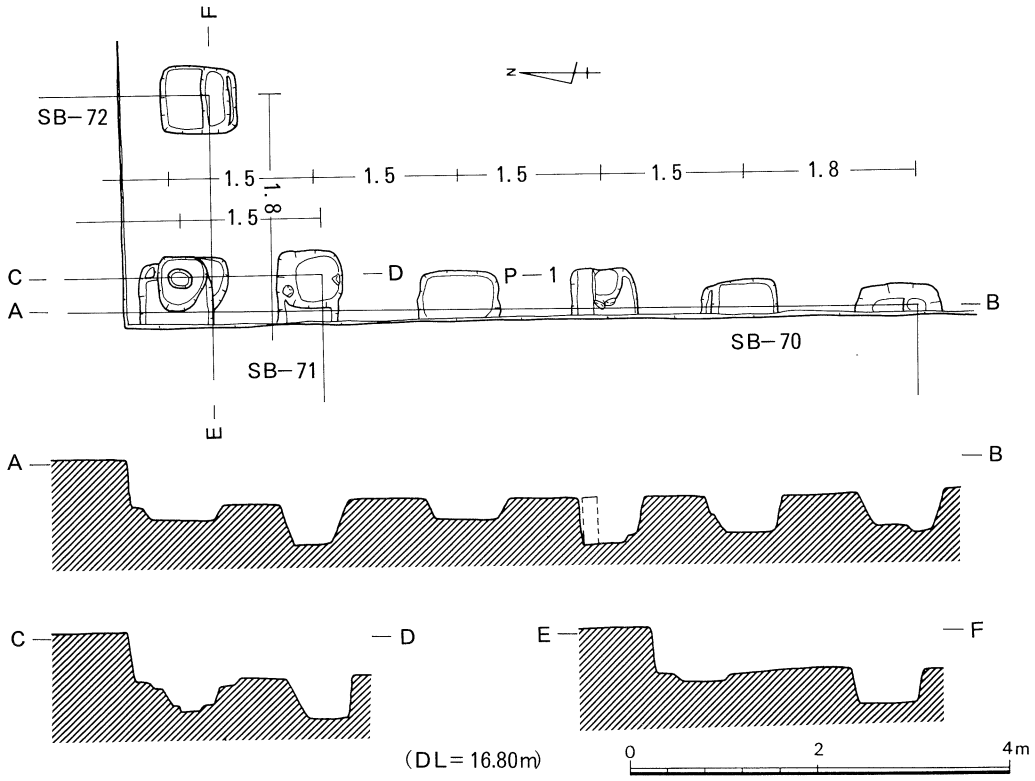
第８図　ＳＢ－69

ＳＢ－73（第10図）

ＳＢ－73は、調査区北部で検出した桁行５間（総長8.4ｍ、28尺）、梁間２間（総長3.3ｍ、11尺）の東西棟掘立柱建物跡である。棟方向はＮ－88°2′－Ｅで、真北に対して若干西に振っている。柱間寸法は、桁行が1.35～2.1ｍ（4.5～７尺）で、梁間が1.5～1.8ｍ（５～６尺）とまちまちである。柱穴の掘り方は方形で、一辺37～90㎝、柱径は20㎝前後とみられる。南側柱の西から２番目の柱穴は他の柱穴に比べ極端に小さいが、柱穴の配置からして、本建物の柱穴であると考えられる。これら柱穴の深さは検出面から９～32㎝で、底面の標高は16.061～16.303ｍを測る。埋土は暗黒色粘質土と褐色粘質土のブロックの大きさや量によりいくつかに分層されるが、基本的には黒色粘質土に暗黒色と褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物には須恵器片４点、土師器片３点があるが復元できるものはなかった。

ＳＢ－74（第12図）

ＳＢ－74は、調査区北東部で検出した桁行４間（総長6.3ｍ、21尺）、梁間３間（総長4.35ｍ、14.5尺）の東西棟掘立柱建物跡である。建物は、ＳＫ－118、ＳＤ－62にそれぞれ切られていた。なお、南西隅の柱穴は確認していない。棟方向はＮ－59°38′－Ｅで、他の建物跡のそれとは全く異なる方向を示している。柱間寸法は、桁行、梁間とも1.35ｍ（4.5尺）と1.65ｍ（5.5尺）である。柱穴の掘り方は方形で、一辺40～48㎝、柱径は15㎝前後である。これら柱穴の深さは

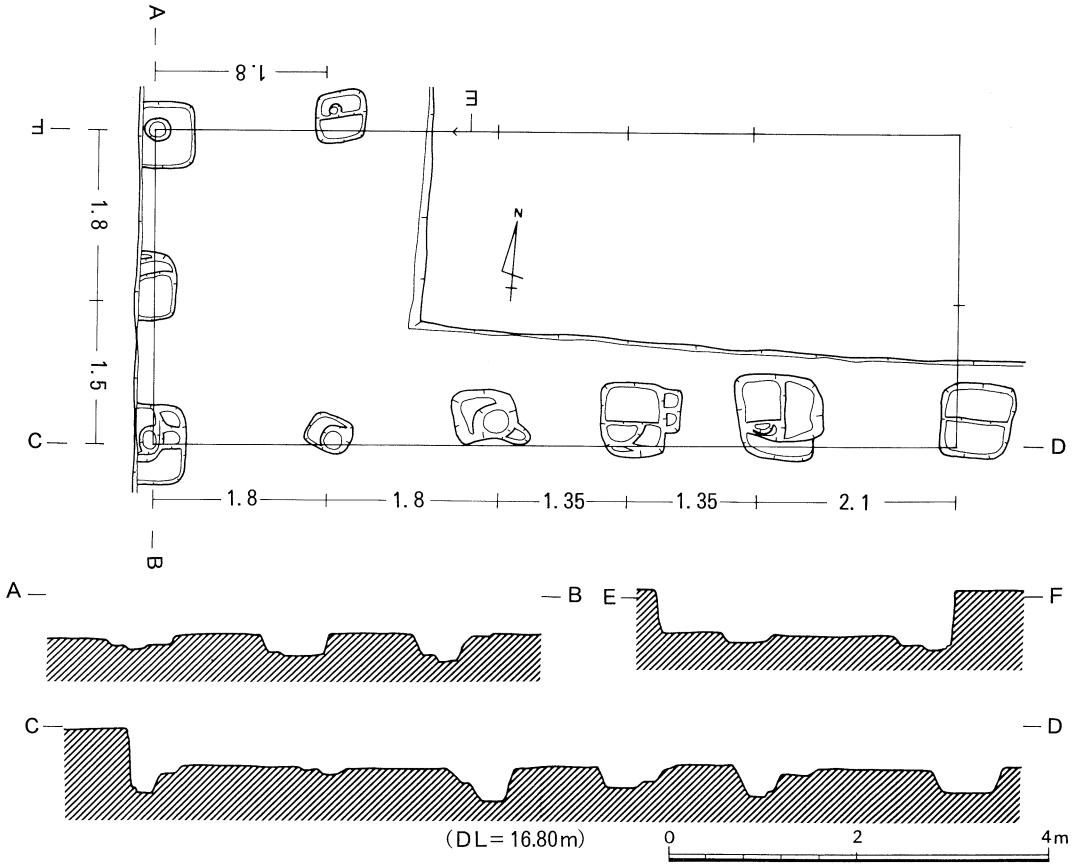


第９図　ＳＢ－70～72

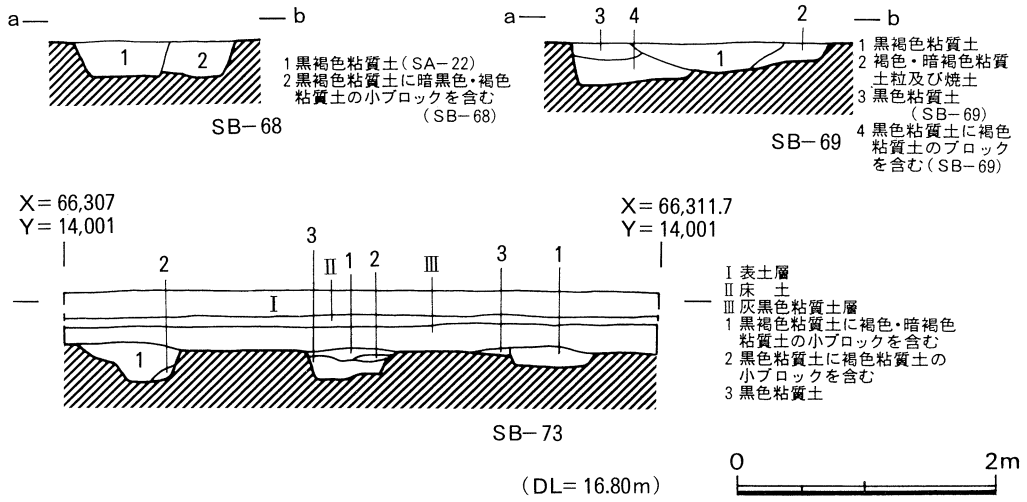
検出面から26～42cmで、底面の標高は16.218～16.379mを測る。埋土は黒ボクを含む黒色粘質土であった。遺物には、弥生土器片９点、須恵器片１点、土師器片４点があるが、復元できるものはなかった。なお、この弥生土器片は後期末のもので、混入したものと考えられる。

ＳＢ－75（第13図）

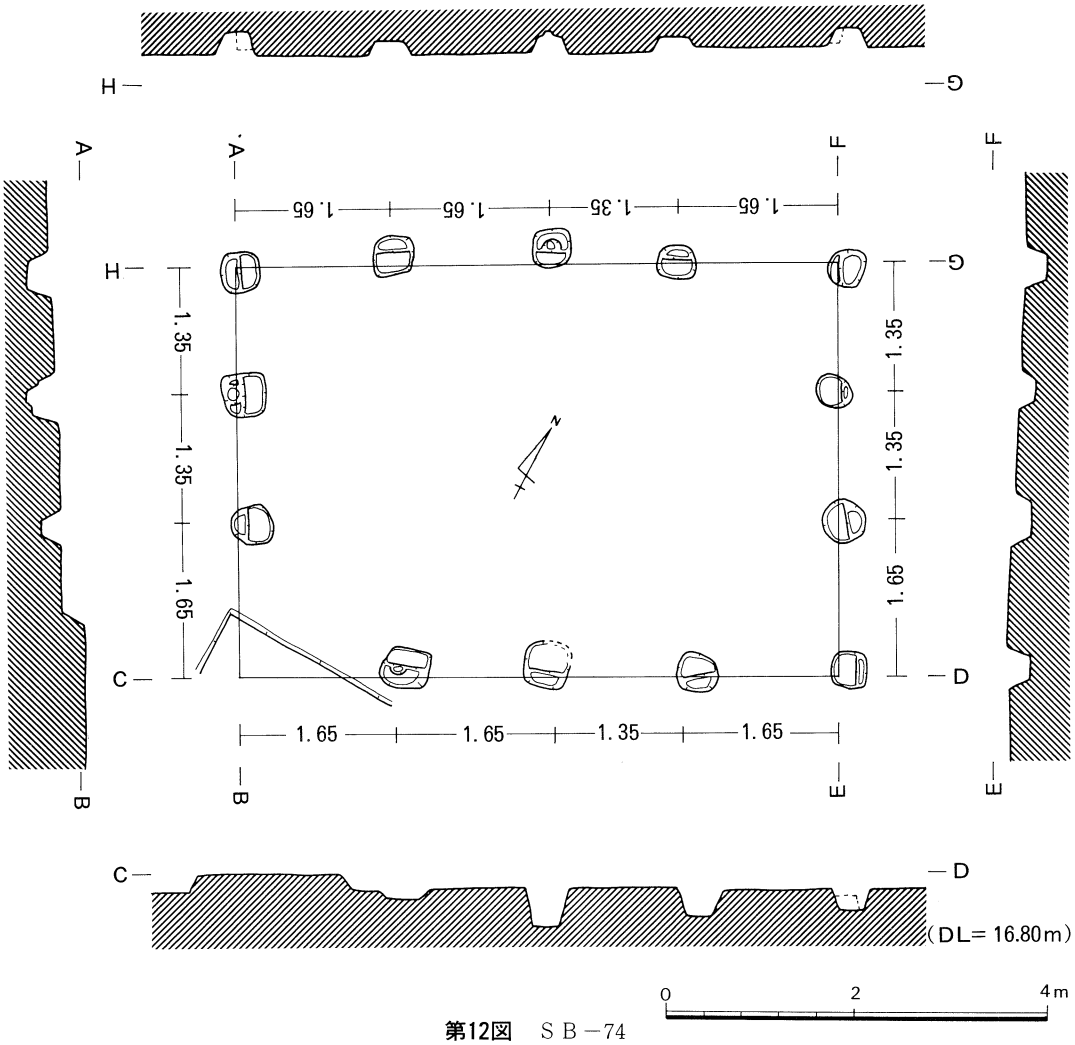
ＳＢ－75は、調査区西部で検出した桁行３間（総長4.35m、14.5尺）、梁間２間（総長3.75m、12.5尺）の南北棟掘立柱建物跡である。建物は、ＳＤ－58に切られていた。なお、南西隅の柱穴、西側柱の北から２番目の柱穴、南妻柱の真中の柱穴は確認できなかったが、確認した柱穴の配置からして１つの建物跡であると判断した。棟方向はＮ－3°40′－Ｅで、真北に対し若干東に振っている。柱間寸法は、桁行が1.2～1.65m（４～5.5尺）、梁間が1.8～1.95m（６～6.5尺）である。柱穴の掘り方は方形で、一辺30～55cm、柱径は15～20cmである。これら柱穴の深さは検出面から４～36cmで、底面の標高は16.213～16.525mを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土粒を含むものであった。遺物には、土師器片が７点あるのみで、復元できるものはなかった。



第10図　ＳＢ－73



第11図　ＳＢ－68・69・73、ＳＡ－22　セクション



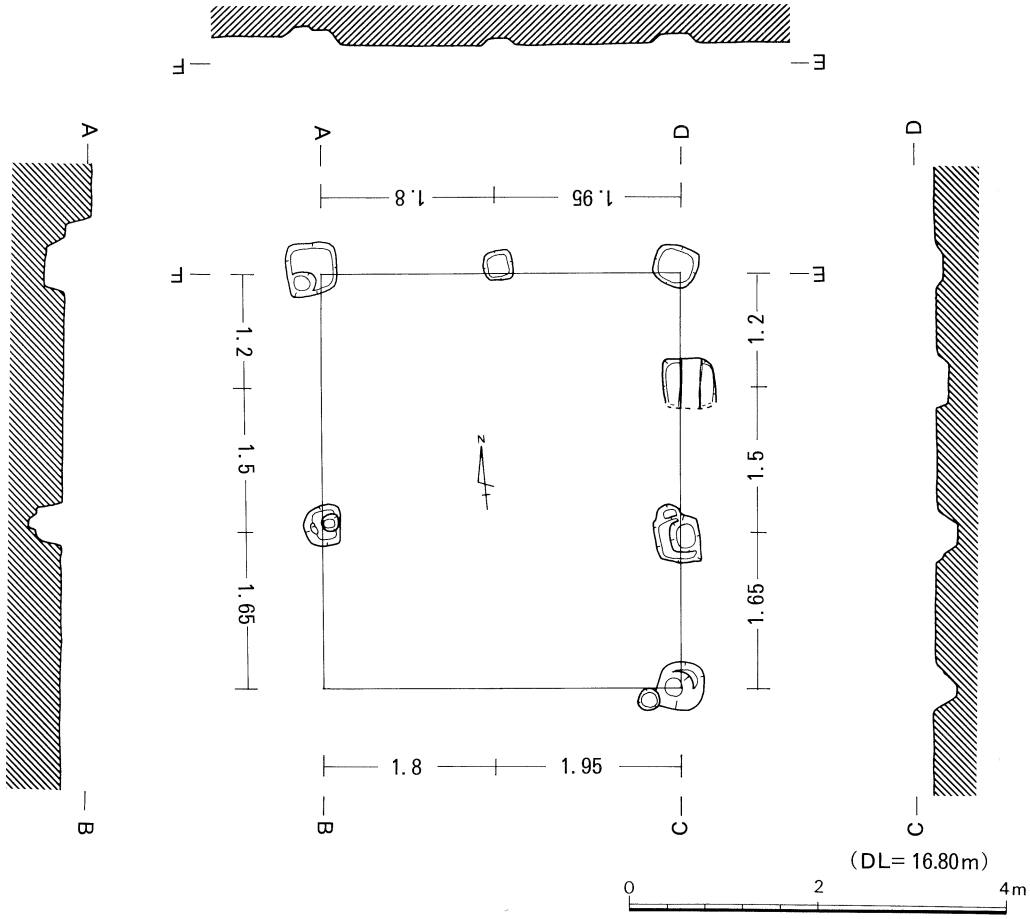
第12図　ＳＢ－74

(2) 塀跡

今次の調査では５条の塀跡を確認した。この内、ＳＡ－20以外は小規模なもので目隠し塀等ではなかったかとみられる。これら塀跡の柱穴も、すべて方形であった。

ＳＡ－20（第14図）

ＳＡ－20は、調査区南部で検出した東西と南北に延びる塀跡である。東西の柱穴はさらに西へ、南北の柱穴はさらに南へ延びるものと推測される。なお、東西列の西へ７番目の柱穴はＳＫ－115と重複しており確認できなかった。また、塀はＳＤ－59に切られていた。方向はＮ－89°18′－Ｗで、ほぼ真北を向いている。規模は７間（11.7ｍ、39尺）以上で、柱間寸法は1.5～2.25ｍ（５～7.5尺）とまちまちである。柱穴の掘り方は方形で、一辺50～99cm、柱径は20～25cmである。これら柱穴の深さは検出面から15～66cmで、底面の標高は15.965～16.475ｍを測る。埋土は黒色粘質土に褐色と暗黒色粘質土粒及び小ブロックを含むものであった。遺物には、須恵器片１点、暗文やヘラ磨きの施されたものを含む土師器片12点があったが、復元できるものはなかった。



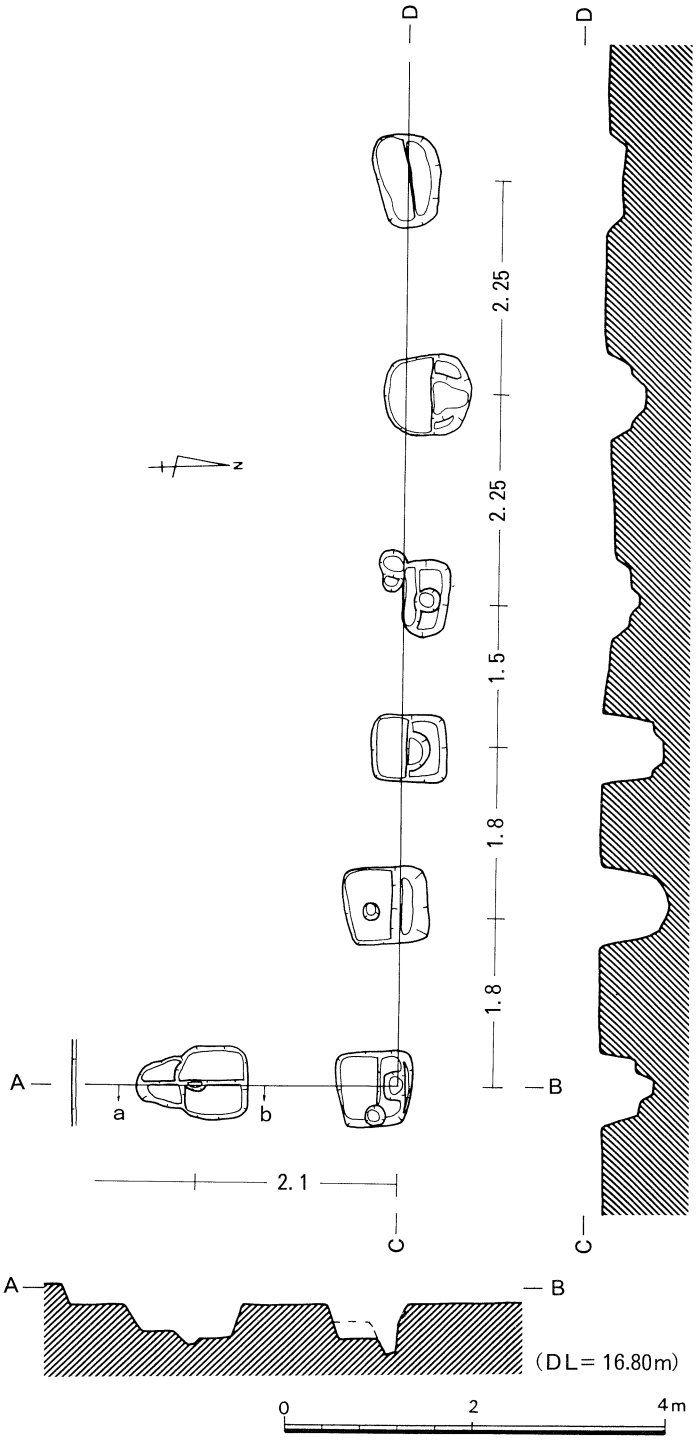
第13図　ＳＢ－75

ＳＡ－21（第16図）

ＳＡ－21は、調査区ほぼ中央部、ＳＢ－68の北側に隣接して検出した東西の塀跡である。方向はＮ－88°19′－Ｗである。規模は４間（総長7.2ｍ、24尺）で、柱間寸法は、両端間が1.95ｍ（8.5尺）、中２間が1.65ｍ（5.5尺）であるとみられる。なお、東から２番目の柱穴は確認できなかった。柱穴の掘り方は方形で、一辺55～88㎝、柱径は約20㎝である。西端の柱穴は、方形のピット（長辺1.70ｍ、短辺1.17ｍ）に上部を削平されていた。これら柱穴の深さは検出面から８～27㎝で、底面の標高は16.171～16.361ｍを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物には弥生土器片１点、須恵器片５点、土師器片15点があり、須恵器片の中には擬宝珠形のつまみが欠損した杯蓋片があった。これらはすべて細片で図示できたものはなかった。

ＳＡ－22（第16図）

ＳＡ－22は、調査区中央部で検出した東西の塀跡である。塀はＳＢ－68を切って掘り込まれていた。また、ＳＡ－21とは平行して延びていることから当初建物跡ではないかとみられたが、梁間に当たる部分に該当する柱穴が全く確認されなかったことから、２条の塀跡として扱った。方向はＮ－85°23′－Ｗである。規模は４間（総長6.9ｍ、



第14図　ＳＡ－20

23尺）で、柱間寸法は1.5～2.1m（５～７尺）とまちまちである。柱穴の掘り方は方形で、一辺62～82cm、柱径は15～20cmである。これら柱穴の深さは検出面から10～26cmで、底面の標高は16.359～16.524mを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。遺物には、須恵器片４点、土師器片17点があり、２点が図示できた。９はＰ－１、10はＰ－２からそれぞれ出土した。また、図示できなかったが土師器片の中にはヘラ磨きを施したものがあった。

出土遺物

須恵器（第22図９）

皿で、約¼が残存していた。口縁部は平らな底部から上外方へ短く上がり、端部を内側へ僅かに折り返す。器面には火だすきが部分的にかかる。

土錘（第22図10）

土師質の土錘で、両端が欠損するが紡錘形を呈す。

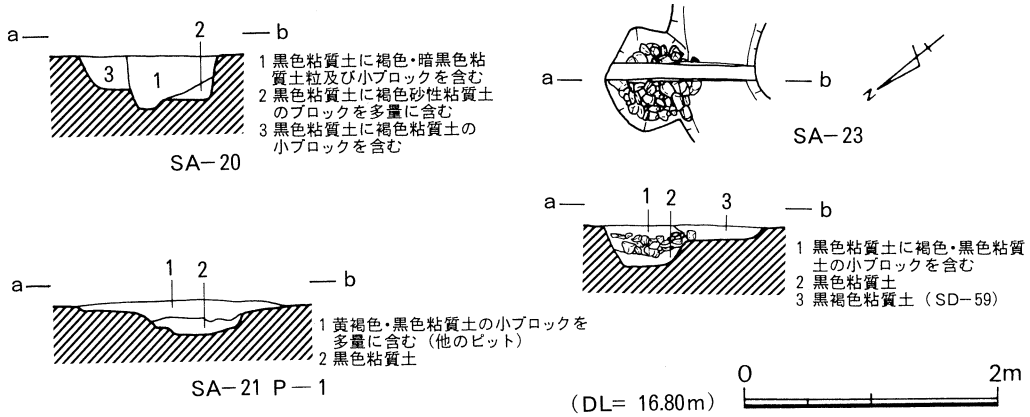
ＳＡ－23（第16図）

ＳＡ－23は、調査区南部で検出した東西の塀跡である。塀はＳＤ－58・59にそれぞれ切られていた。方向はＮ－83°45′－Ｅである。規模は５間（総長5.4m、18尺）で、柱間寸法は1.35～2.25m（4.5～7.5尺）とまちまちであった。柱穴の掘り方は方形で、一辺58～75cm、柱径は約20cmである。Ｐ－１には拳大の石が投棄されていた。これら柱穴の深さは検出面から10～52cmで、底面の標高は16.082～16.498mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土に褐色と暗褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物には、弥生土器片１点、土師器片20点、瓦片１点、及び11の砥石があった。土師器片の中にはヘラ磨きが施されたものも含まれていたが、すべて細片で11以外に図示できるものはなかった。11はＰ－１から出土したもので、投棄された石の中に混入していた。

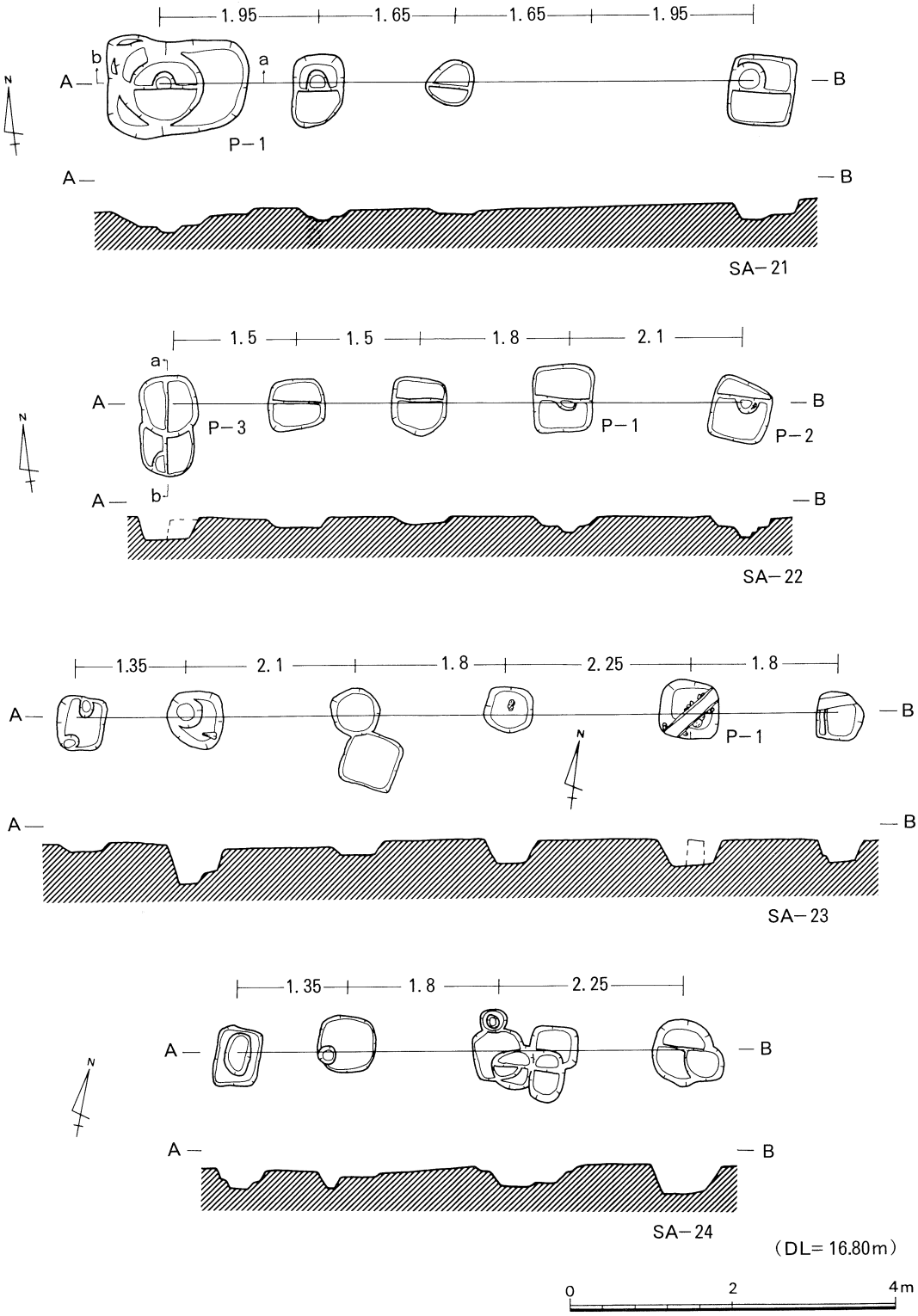
出土遺物

砥石（第22図11）

細粒砂岩の砥石で、一部折損するが４面に使用痕が残っている。



第15図　ＳＡ－20・21・23　セクション


1.95
1.65
1.65
1.95
b
a
A
B
N
P−1
SA−21
1.5
1.5
1.8
2.1
a
b
P−3
P−1
P−2
SA−22
1.35
2.1
1.8
2.25
1.8
P−1
SA−23
1.35
1.8
2.25
SA−24
(DL= 16.80m)
0
2
4m

第16図　ＳＡ－21～24

ＳＡ－24（第16図）

ＳＡ－24は、調査区南端部で検出した東西の塀跡である。ただし、南側が調査区外であり、対となる柱穴が存在する可能性もあり、場合によっては建物跡となるかもしれない。一応、方向はＮ－84°54′－Ｅで、ＳＡ－23とほぼ同じ方向を示す。規模は３間（総長5.4ｍ、18尺）で、柱間寸法は1.35～2.25ｍ（4.5～7.5尺）とまちまちである。柱穴の掘り方は方形で、一辺55～80cm、柱径15～20cmである。これら柱穴の深さは検出面から14～37cm、底面の標高は16.245～16.476ｍを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土粒を含むものであった。遺物には、須恵器片７点、土師器片２点があるが、復元できるものはなかった。

(3) 土坑

今次の調査では12基の土坑を確認した。時期的には、８～９世紀前半のものと12～13世紀頃のものに大別される。

ＳＫ－113（第17図）

ＳＫ－113は調査区南東部で検出した。遺構はＳＫ－114及びＳＤ－58に掘り込まれていた。平面形は方形とみられ、長辺3.60ｍ、短辺3.16ｍ、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ－5°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がっている。埋土は黒色粘質土単一層であった。遺物には、須恵器、土師器があり、出土量は比較的多かった。

出土遺物

須恵器（第22図12～15）

12は杯蓋で、天井部外面には擬宝珠形のつまみが付く。13は鉢で、口縁部は内湾気味に上がる体部から内傾して延び、端部は外傾する凹面をなす。14は壺で、口頸部が欠損する。体部最大径は上胴部にある。15は甕で、肩部以下が欠損する。口縁部は肩部から屈曲し、短く外傾する。端部は上方を向く平面をなす。肩部外面には回転カキ目調整を施す。

土師器（第22・23図16～20）

16・17は杯蓋で、須恵器の手法を真似ている。18は双耳壺の把手である。19・20は甕で、口縁部は上胴部からくの字形をなして上がる。20の器面にはハケ調整を施している。

ＳＫ－114（第17図）

ＳＫ－114は調査区南東部で検出した。遺構はＳＫ－113を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺3.23ｍ、短辺2.93ｍ、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ－34°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がっている。埋土は基本的に黒色粘質土で暗黒色及び褐色粘質土のブロック、土粒の量により３層に分層できる。また、土層中には焼土が認められた。遺物には、須恵器、土師器等があり、出土量はＳＫ－ 113同様比較的多かった。

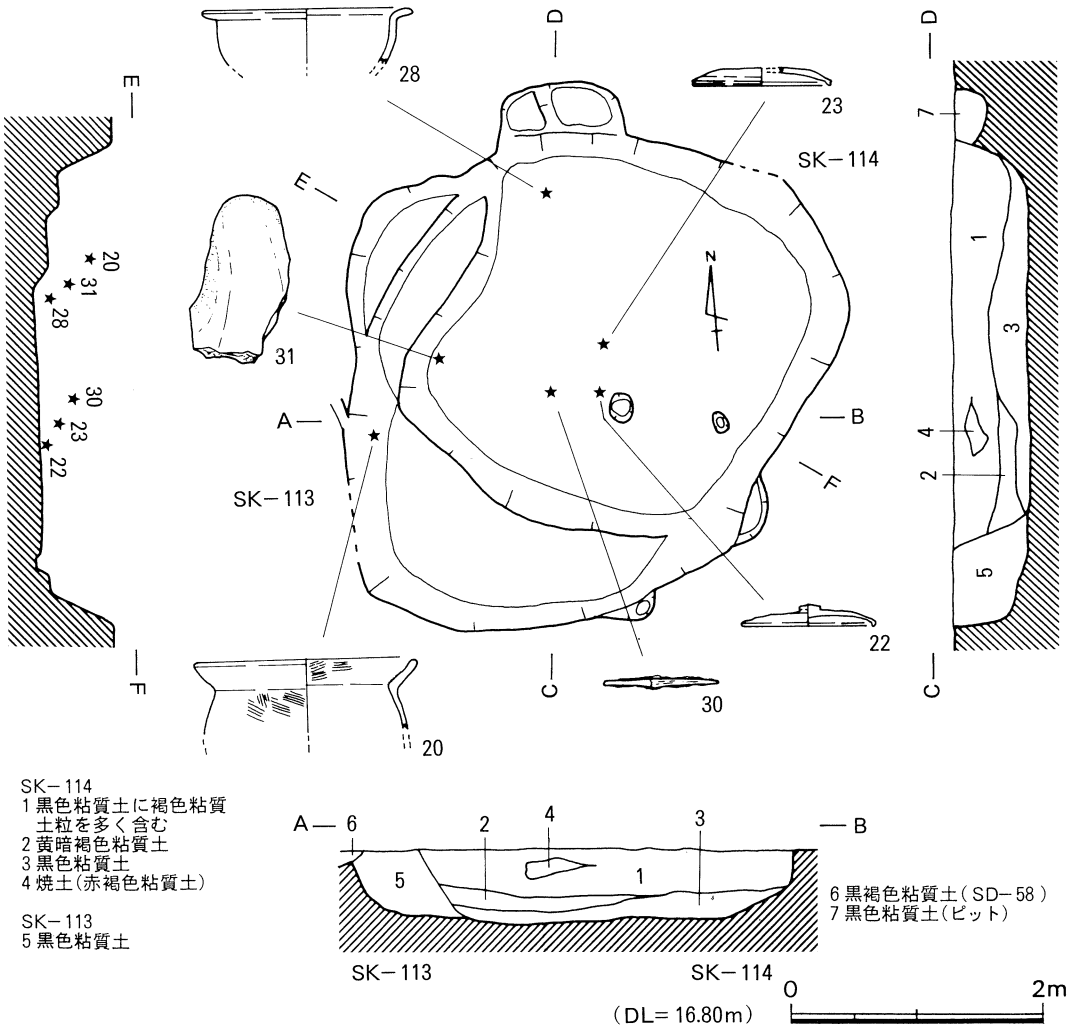
出土遺物

須恵器（第23図21～25）

21～23は杯蓋で、22のみ擬宝珠形のつまみが残っていた。天井部は平らで、口縁部は斜め下方へ緩やかに下り、端部を下方へ短く屈曲さす。23の口縁部外面には凹線が回っている。24・25は杯で、底部外面は回転ヘラ切りとなっている。24の口縁部は上外方へほぼ真直ぐ上がるのに対し、25のそれは内湾気味に上がる。端部はそれぞれ丸く仕上げられる。

土師器（第23図26～28）

26は杯で、27は皿である。それぞれ底部外面は回転ヘラ切りとなっており、口縁部は上外方へ上がり、端部を内側に折り返す。28は鉢で、口縁部は内湾気味に上がる胴部から屈曲し、斜め上方へ短く延びる。器面は摩耗しており、調整は不明である。



第17図　ＳＫ－113・114

鉄製品（第23図29・30）

刀子で、双方とも鋒先端を欠く。それぞれ棟は平棟で、茎部には木質部が残存している。

砥石（第23図31）

中粒砂岩の砥石で、側面と端部が折損する。２面に使用痕が残る。

ＳＫ－115

ＳＫ－115 は調査区南西部で検出した。遺構は数多くのピットに掘り込まれており、原形を留める部分が少なくなっている。平面形は基本的に方形で、長辺3.70ｍ、短辺3.15ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－1°－Ｅで、真北にほぼ直交した形となっている。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く立ち上がる。埋土は黒色粘質土単一層であった。遺物量は比較的多く、須恵器と土師器がほぼ同数出土した。しかし、大半が細片で図示できたのは５点であった。

出土遺物

須恵器（第23図32～35）

32は杯蓋で、平らな天井部にはボタン状のつまみが付く。口縁部は内湾気味に下り、端部を下方に屈曲さす。33は小型の杯で、口縁部は上外方にたち上がる。34は輪高台が付く杯で、口縁部は斜め上方へ上がる。双方とも底部は回転ヘラ切りである。35は甕で、口縁部は肩部からＬ字形をなして上外方へ上がる。端部は上方を向く平面をなす。

土師器（第24図36）

甕で、口縁部は上胴部からくの字形をなして上がり、端部は丸く仕上げる。

ＳＫ－116

ＳＫ－116 は調査区中央部北寄りで検出した。遺構はＳＤ－61を切っているが明確な掘り方を持たない。平面形は不整方形で、長辺3.90ｍ、短辺2.85ｍ、深さ0.06ｍを測る。長軸方向はＮ－2°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面から短くたち上がる。底面北端で、直径40㎝、深さ５㎝のピットを検出した。埋土は灰暗褐色粘質土単一層であり、出土遺物は皆無であった。

ＳＫ－117（第18図）

ＳＫ－117 は調査区東部で検出した。遺構はＳＢ－74を切り、ＳＫ－118 に東端部を掘り込まれていた。平面形は舟形で、長辺2.10ｍ、短辺0.43ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－89°－Ｗで、真北にほぼ直交する。断面形は箱形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がる。埋土は上下２層に分層され、上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土に褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物には、須恵器片２点、土師器片20点があるが、すべて細片で復元できるものはなかった。なお、土師器片の中に回転糸切り底の杯片も含まれる。

ＳＫ－118（第18図）

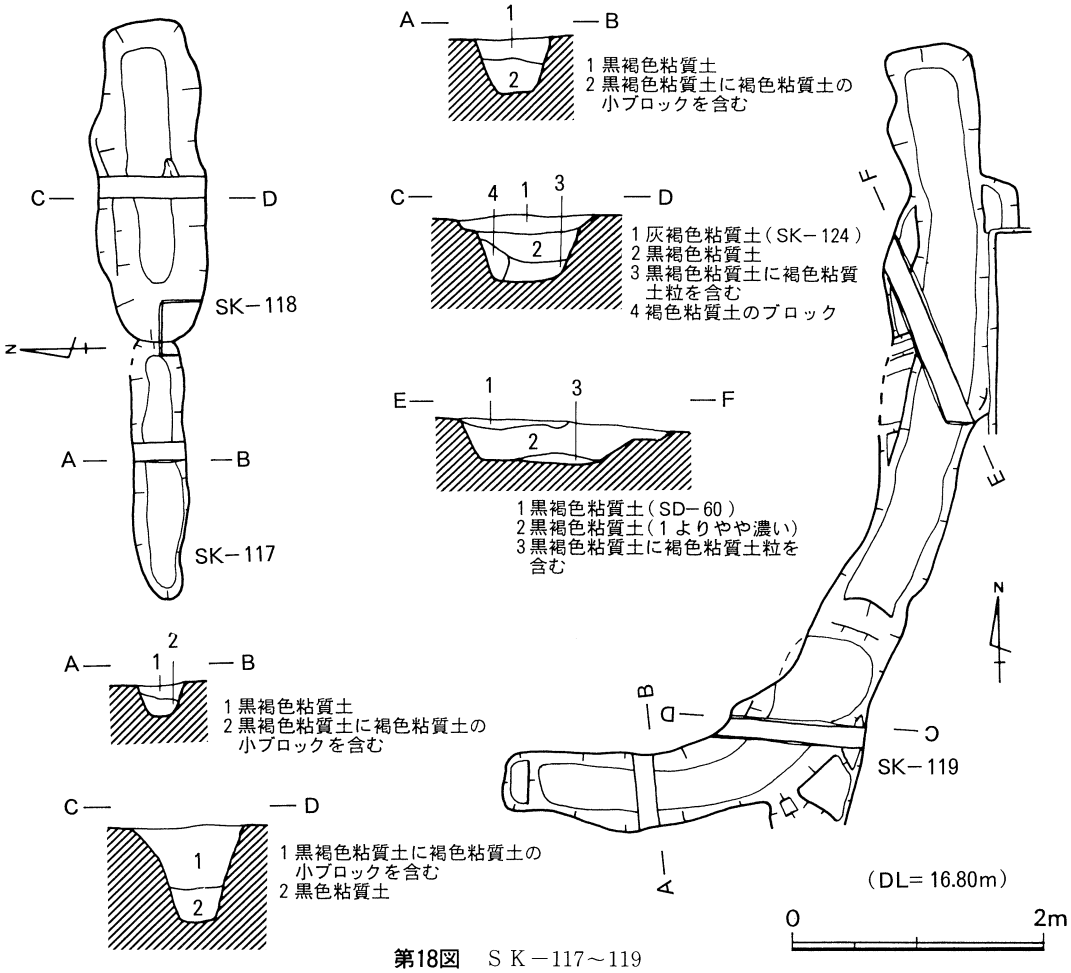
ＳＫ－118 は調査区東部で検出した。遺構はＳＢ－117 を切って掘り込まれていた。平面形は舟形で、長辺2.55ｍ、短辺0.85ｍ、深さ0.76ｍを測る。長軸方向はＮ－89°－Ｅで、真北にほ

ぼ直交する。断面形は逆台形で、壁は底面から急角度でたち上がる。埋土は上下２層に分層され、上層が黒褐色粘質土に褐色粘質土の小ブロックを含むもので、下層が黒色粘質土であった。遺物は、大半が土師器で大量に出土し、県下で初めて鉄製の紡錘も発見された。

出土遺物

土師器（第24・25図37～65）

37～44は杯で、底部外面はすべて回転糸切りである。口縁部の形態により、上外方へ真直ぐ上がるもの（37～42）、内湾気味に上がるもの（43）、外反気味に上がるもの（44）に分けられることができる。また、底部形態によりベタ高台のもの（42～44）とそうでないもの(37～41)に分けることもできる。45～65は小皿で、底部外面はすべて回転糸切りである。口縁部の形態によりａ～ｃの３類に区分される。ａ類は、器厚が薄く仕上げられ、上外方へほぼ真直ぐ上がるものであり、45～51が該当する。ｂ類は、体部を薄く、口縁部を厚く仕上げるものであり、52～56が該当する。Ｃ類は、器厚が厚く仕上げられたもので、端部まで厚く仕上げられたもの（57～62）と端部を撮み細く仕上げたもの（63～65）とに細分される。



第18図　ＳＫ－117～119

瓦器（第25図66・67）

２点とも椀で、内面に暗文が施される。暗文は、口縁部内面が同心円文状で、内底面が平行線状のものである。

青磁（第25図68）

龍泉窯系の青磁で、皿である。内外面ともオリーブ灰色を呈し、貫入がはいる。

鉄製品（第25図69）

紡錘で、円形の紡錘車に鉄の軸が付いている。鉄軸の両端が折損する。表面は銹化が著しい。

ＳＫ－119（第18図）

ＳＫ－119 は調査区東部で検出した。遺構はＳＫ－124 及びＳＤ－60に切られていた。平面形は舟形で、弧を描いた形となり、長辺7.70ｍ、短辺0.74ｍ、深さは0.40ｍを測る。方向はＳＫ－117･118とほぼ同じ方向を呈する部分と直交した部分とがある。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面より垂直に近い角度で上がる部分と急角度で上がる部分とがある。底面は南側が深く、北側が浅くなっている。埋土は基本的に上下２層に分層され、上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土に褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物量はＳＫ－118 よりも少ないが土師器を中心に比較的多く出土している。

出土遺物

土師器（第25・26図70～77）

70～72は椀で、底部外面はすべて回転糸切りである。口縁部の形態は、内湾気味に上がるもの（70)、上外方へ真直ぐ上がるもの（71・72）とがある。73～75は小皿で、73・74がロクロ成形、75が手づくね成形である。73は前述のａ類、74がＣ類に該当する。76・77は皿で、手づくね成形である。76の底部は比較的平らであるのに対し、77の底部は丸底である。双方とも煤が部分的ではあるが付着している。

瓦器（第26図78～80）

78・79は椀で、78の内面にはやや崩れた同心円状の暗文が施される。79は、器面の摩耗が著しく調整不明である。80は小皿で、口縁部は丸味のある底部から短くたち上がる。

瓦質土器（第26図81～84）

すべて羽釜であり、脚は付かない。口縁部は内湾して上がり、口縁下には鍔が付く。鍔は81が上外方を向き、82～84が水平に延びる。また、鍔は83以外口縁下に貼付されているのに対し、83は口縁部と一体に造られている。

青磁（第26図85・86）

２点とも龍泉窯系の青磁で、85が皿、86が椀である。85は、底部外面以外に青磁釉が施釉され、内外面ともオリーブ灰色を呈す。87の口縁部内面及び見込みに片切彫による蓮花文が施される。

ＳＫ－120

ＳＫ－120 は調査区東部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の土坑である。遺構はＳＫ－118 を切って掘り込まれていた。平面形は不整形で、長辺2.65ｍ、短辺1.20ｍ以上、深さ0.03ｍを測る。長軸方向はＮ－86°－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁は平担な底面から短く上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物には、須恵器片２点、土師器片１点、瓦質土器片１点、陶磁器片２点があったが、すべて細片で図示できるものはなかった。

ＳＫ－121

ＳＫ－121は調査区西部で検出した。遺構はＳＢ－70を切り、ＳＤ－61に掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺4.36ｍ、短辺2.69ｍ、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－10°－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は平担な底面から短く上がる。埋土は黒褐色粘質土で褐色粘質土の小ブロックを含むものであった。遺物には、須恵器片８点、土師器片８点があり、土師器片の中には糸切りの底部片も含まれる。図示できたのは87の須恵器１点のみであった。

出土遺物

須恵器（第26図87）

甕で、口頸部は胴部から屈曲し、上外方へ上がった後外傾して延びる。胴部内面には同心円文のタタキ目が残存する。

ＳＫ－122

ＳＫ－122は調査区西部で検出した。遺構は、ＳＢ－70・71、ＳＫ－121を切って掘り込まれていた。平面形は不整楕円形で、長辺1.26ｍ、短辺1.10ｍ以上、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－2°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は平担な底面から短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。遺物には、布目の平瓦片１点があった。

ＳＫ－123

ＳＫ－123は調査区中央部で検出した。遺構は、ＳＤ－58・59を切って掘り込まれていた。平面形は舟形で、長辺2.27ｍ、短辺0.52ｍ、深さ0.05ｍを測る。長軸方向はＮ－7°－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は平担な底面から短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無であった。

ＳＫ－124

ＳＫ－124は調査区東部で検出した。遺構はＳＫ－119を切って掘り込まれていた。平面形は舟形で、長辺2.20ｍ以上、短辺0.62ｍ、深さ0.18ｍを測る。長軸方向はＮ－0°－Ｅである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面より緩やかに上がる。底面中央部には楕円形の浅い落ち込みがある。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無であった。

(4) 溝跡

ＳＤ－58（第19図）

ＳＤ－58は、調査区南部で検出した東西と南北に延びる溝で、それぞれ調査区外へ延びてい

る。南北に延びる溝は、基底面の標高が異なり、また、途中から派生している点等、別の溝の可能性もあるが、埋土的には全く同じであり、かつほぼ同時期に埋っていることから今回は同一の溝として扱った。溝は、幅0.60～1.40m、深さ0.20～0.40m、検出長東西17.80m、南北12.80mを測る。主軸方向は、東西がN－83°56′－W、南北がN－2°39′－Wである。断面形は逆台形ないし箱形を呈し、壁は底面から急角度で上がる。また、東西に延びる溝は、2度ほど拡張されており、基底面は西へ約0.11mの比高差を持って傾斜している。埋土は大きく上下2層に分層され、上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粘質土に褐色・暗黒色粘質土の小ブロックを若干含むものであった。また、上層中からは人頭大から拳大の石及び常滑の大甕等の遺物が投棄された状態で検出された。遺物には、須恵器片、緑釉陶器片、土師器片、青磁片等があり、量的には土師器が多かった。この中で復元できたのは11点であった。

出土遺物

土師器（第26・27図88～94）

88～91は杯で、底部外面はすべて回転糸切りである。口縁部が上外方へ真直ぐ上がるもの（88・89）、外反気味に上がるもの（90）、内湾気味に上がるもの(91)がある。また、90～92はベタ高台となっている。93・94は小皿で、93の底部は高さ1.5cmのベタ高台となっている。94は底部の比較的深いものである。

把手（第27図95）

壺の把手で、外面はオリーブ灰色を呈す。

常滑（第27図96）

甕で、底部が欠損する。口縁部は胴部から大きく外反して延び、端部を細く仕上げる。肩部と胴部やや下に格子目の刻印が施される。また、肩部には灰釉が施釉されている。

青磁（第27図97）

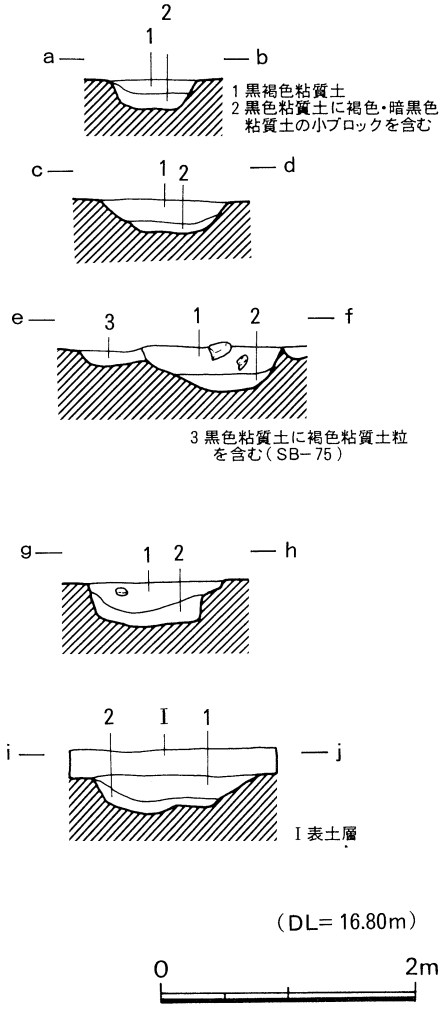
碗で、龍泉窯系のものとみられる。内面には僅かであるが片切彫の痕が残る。

砥石（第27図98）

細粒砂岩の砥石で、両端が折損するが3面に使用痕が残る。

ＳＤ－59

ＳＤ－59は、調査区南部で検出した東西と南北に延びる溝で、南北に延びる溝は調査区外へさらに延びる。



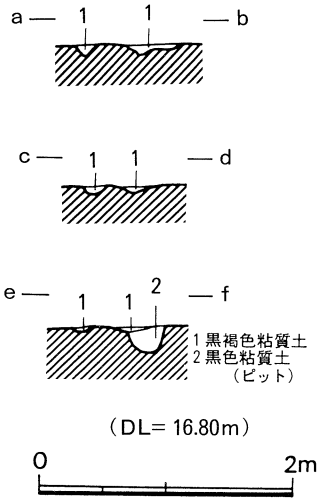
第19図　ＳＤ－58セクション

溝は、ＳＤ－58の南北に延びる溝とほぼ並行に延び、ＳＡ－20・23を切っている。溝は、幅0.70ｍ、深さ0.11ｍ、検出長9.70ｍを測る。主軸方向はＮ－6°5′－Ｗである。断面形は逆台形をなし、壁は底面から短くたち上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。

遺物には、須恵器片10点、土師器片20点があったが、すべて細片で図示できるものはなかった。

ＳＤ－60（第20図）

ＳＤ－60は、調査区中央部で検出した東西に延びる溝で、さらに調査区外に延びている。溝は２条が並行して延び、調査区東端で合流し、１条となる。溝は、幅0.25～0.70ｍ、深さ0.07ｍ、検出長32.0ｍを測る。主軸方向はＮ－86°25′－Ｗ～Ｎ－72°33′－Ｅである。断面形はＵ字形ないし舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。また、溝は比高差４㎝と僅かであるが西から東へ向って傾斜している。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。遺物には、須恵器片、土師器片、瓦器片、青磁片等があるが、出土量は少なく、すべて細片で図示できるものはなかった。



第20図　ＳＤ－60セクション

ＳＤ－61

ＳＤ－61は、調査区北部で検出した東西に延びる溝で、明確な掘り方を持たない。溝はＳＫ－121を切って掘り込まれていた。溝は、幅0.80～1.36ｍ、深さ0.05ｍ、検出長7.50ｍを測る。主軸方向はＮ－87°39′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く上がる。埋土は灰暗褐色粘質土に黒色と褐色粘質土粒及び小ブロックを含むものであった。遺物には、須恵器片４点、土師器片８点があるが、細片で図示できるものはなかった。

ＳＤ－62

ＳＤ－62は、調査区北部で検出した東西に延びる溝で、両側等に細長い溝を多数伴う。溝はさらに調査区外へ延びる。溝は、幅0.80～3.30ｍ、深さ0.18ｍ、検出長45.10ｍを測る。主軸方向はＮ－86°11′－Ｗである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は底面より短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。遺物には、弥生土器片、須恵器片、土師器片があり、出土量は比較的多いが大半が細片で図示できたのは１点のみであった。

出土遺物

土師器（第27図99）

小皿で、底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。口縁部は上外方へ短く上がり、端部を細く仕上げる。

ＳＤ－63

ＳＤ－63は、調査区北端部で検出した東西に延びる溝で、東の調査区外へさらに延びる。溝はＳＢ－75を切って掘り込まれていた。溝は、幅0.93ｍ、深さ0.03ｍ、検出長1.30ｍを測る。

主軸方向はＮ－86°55′－ＷでＳＤ－62とほぼ同一方向を示す。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層で、出土遺物は皆無であった。

ＳＤ－64

ＳＤ－64は、調査区北端部で検出した東西に延びる溝で、東の調査区外へさらに延びる。溝は、幅0.94ｍ、深さ0.02ｍ、検出長2.95ｍを測る。主軸方向はＮ－85°14′－Ｗで、ＳＤ－62とほぼ同一方向を示す。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層で、出土遺物は皆無であった。

(5) その他の遺構と遺物

遺構

遺構の大半はピットであり、その多くは建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられる。掘り方は、ほとんどが円形で一部方形を呈するものもある。円形のピットの埋土は黒褐色粘質土であり、方形のピットの埋土は黒色粘質土に暗黒色と褐色粘質土のブロックや土粒を含むものであった。これは明らかに時期差として捉えることができるものである。遺物には、タタキ目の残る弥生土器、須恵器、土師器、青磁、瓦器等があったが、出土量は少なく、かつ細片が多く復元できたのはＰ１～８から出土した９点であった。

Ｐ－１は調査区東部で検出した一辺65～70cm、深さ28cmを測る方形のピットである。掘り方が確りしており、柱穴である可能性が強い。100の須恵器の杯蓋が出土している。Ｐ－２は調査区南東部、ＳＫ－115 を切って掘り込まれていた径68～85cm、深さ28cmを測る楕円形のピットである。101と102の須恵器が出土している。Ｐ－３は調査区南西部、ＳＢ－69の南西隅の柱穴を切って掘り込まれていた一辺約80cm、深さ約18cmを測る方形のピットである。掘り方が比較的確りしており塀跡等の柱穴ではなかろうか。103の土師器が出土している。Ｐ－４は調査区中央部、ＳＤ－58に切られた形で検出した一辺約65cm、深さ約21cmを測る方形のピットである。104の土師器が出土している。Ｐ－5は調査区南端部、ＳＡ－24の柱穴を切って掘り込まれていた径26～32cm、深さ約20cmを測る円形のピットであり、径約18cmの柱痕が残存していた。105の土師器が出土している。Ｐ－６は調査区南東部で検出した径約65cm、深さ約23cmを測る円形ピットである。106の土師器が出土している。Ｐ－７は調査区南東部で検出した一辺42～45cm、深さ約54cmを測る方形のピットである。107の土師器が出土している。Ｐ－８は調査区南東部で検出した径約45cm、深さ約34cmを測る円形ピットである。108の土師器が出土している。

出土遺物

須恵器（第27図100～102）

100と101は杯蓋で、平らな天井部中央に擬宝珠形のつまみが付く。102は甕で、胴部以下が欠損する。口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。

土師器（第27図103～108）

103は椀で、器面には細いヘラ磨きが施される。口縁部は上外方へ真直ぐたち上がり、端部を

丸く仕上げる。底部は深く、平らで、外端部には高さ５㎜の高台が付く。高台端部は外傾する平面をなす。104～108は杯で、すべて底部外面は回転糸切りである。104と105は口縁部を欠損するが、内湾気味に上がるとみられる。106の口縁部は体部から内湾気味に上がった後外傾して延びる。107の器厚は厚く、口縁部は体部から上外方へ真直ぐ上がった後若干外傾して延びる。108の口縁部は欠損するが、上外方へほぼ真直ぐ上がるとみられる。焼成が極めて良い。

第2表　掘立柱建物跡計測表

遺構番号（建物名）	規模				面積（m²）	棟方向（Nは真北）	備考
	梁×桁（間）（間）	梁間×m×桁行m（尺）（尺）	柱間寸法				
			梁m（尺）	桁m（尺）			
SB－68	2×3	4.20(14)×5.85(19.5)	2.1(7)	1.8(6)～2.25(7.5)	24.57	N－86° 4′－W	
SB－69	1以上×3	2.1(7)以上×5.7(19)	1.8(6)～2.1(7)	1.8(6)～2.1(7)	(11.97)	N－3°50′－W	
SB－70	－×5以上	――×7.8(26)以上	――	1.5(5)～1.8(6)	――	N－0°29′－E	
SB－71	－×1以上	――×1.5(5)以上	――	1.5(5)	――	N－1°26′－E	
SB－72	1以上×－	1.8(6)×――	1.8(6)	――	――	N－1° 9′－E	
SB－73	2×5	3.3(11)×8.4(28)	1.5(5)～1.8(6)	1.35(4.5)～2.1(7)	27.72	N－88° 2′－E	
SB－74	3×4	4.35(14.5)×6.3(21)	1.35(4.5)～1.65(5.5)	1.35(4.5)～1.65(5.5)	27.405	N－59°38′－E	
SB－75	2×3	3.75(12.5)×4.35(14.5)	1.8(6)～1.95(6.5)	1.2(4)～1.65(5.5)	16.3125	N－3°40′－E	

第3表　塀跡計測表

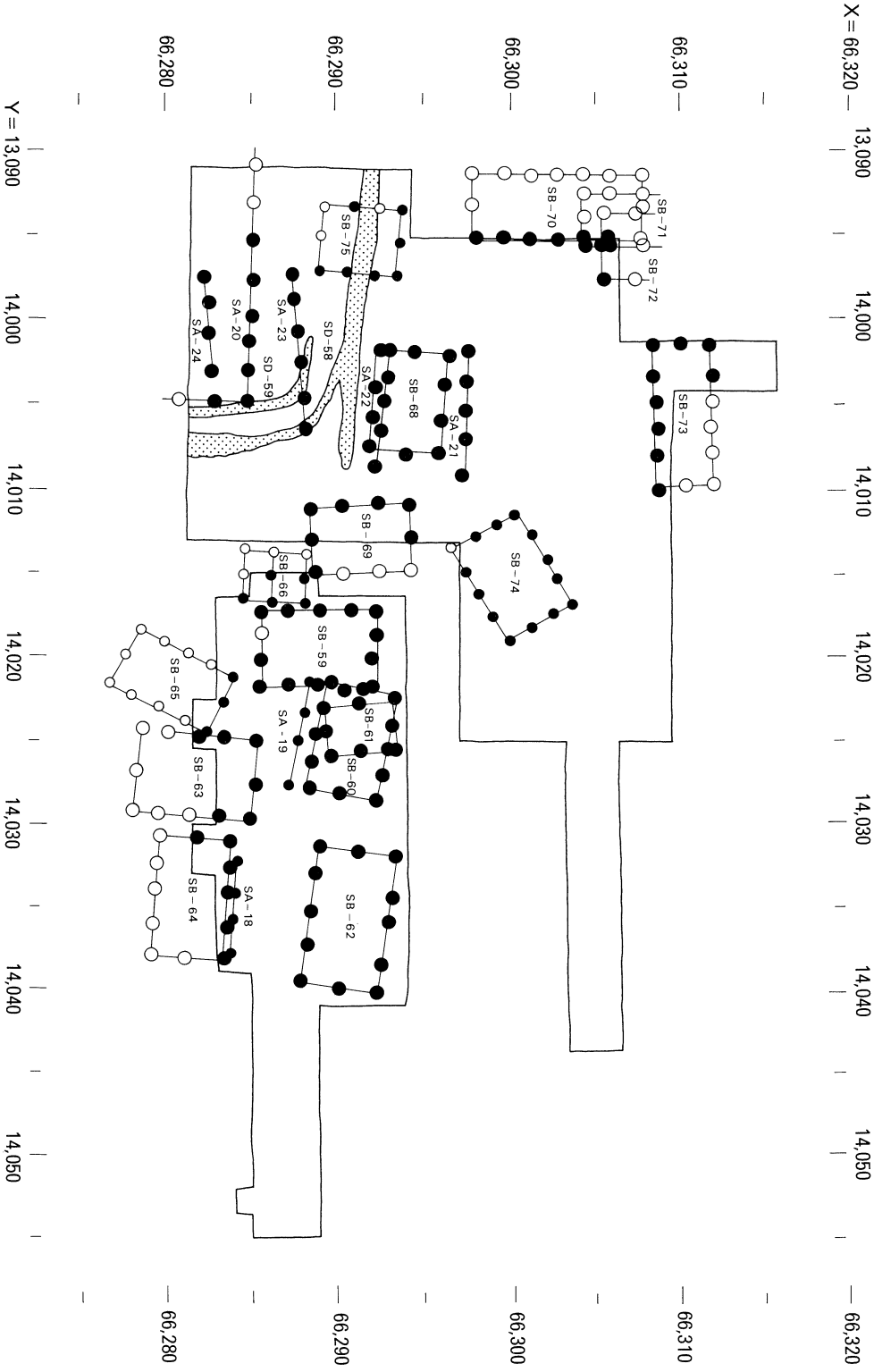
遺構番号	規模			方向（N－真北）	備考
	柱穴数	全長m（尺）	柱間距離m（尺）		
SA－20	7以上	11.7(39)以上	1.5(5)～2.25(7.5)	N－89°18′－W	
SA－21	5	7.2(24)	1.65(5.5)～1.95(8.5)	N－88°19′－W	柱穴1個は未確認
SA－22	5	6.9(23)	1.5(5)～2.1(7)	N－85°23′－W	
SA－23	6	9.3(31)	1.35(4.5)～2.25(7.5)	N－83°45′－E	
SA－24	4	5.4(18)	1.35(4.5)～2.25(7.5)	N－84°54′－E	

第4表 土　坑　計　測　表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向（Nは真北）	備考
		長辺m	短辺m	深さm		
SK－113	方　形	3.60	3.16	0.56	N－ 5°－E	
SK－114	〃	3.23	2.93	0.56	N－34°－E	
SK－115	〃	3.70	3.15	0.25	N－ 1°－E	ほぼ真北に直交
SK－116	不整方形	3.90	2.85	0.06	N－ 2°－E	〃
SK－117	舟　形	2.10	0.43	0.25	N－87°－W	〃
SK－118	〃	2.55	0.85	0.76	N－89°－E	〃
SK－119	〃	7.70	0.74	0.40	―――	弧状を呈す
SK－120	不整形	2.65	(1.20)	0.03	N－86°－E	
SK－121	方　形	4.36	(2.69)	0.13	N－10°－W	
SK－122	不整楕円形	1.26	(1.10)	0.13	N－ 2°－E	
SK－123	舟　形	2.27	0.52	0.05	N－ 7°－W	
SK－124	〃	(2.20)	0.62	0.18	N－ 0°－E	

第5表 溝　跡　計　測　表

遺構番号	規模			断面形	方向（Nは真北）	備考
	幅 m	深さm	検出長m			
SD－58	0.6 ～1.40	0.20～0.40	17.8(東西) 12.8(南北)	箱　形	N－83°56′－W ～ N－ 2°39′－W	
SD－59	0.70	0.11	9.70	逆台形	N－ 6° 5′－W	L字状を呈す
SD－60	0.25～0.70	0.07	32.00	舟底形	N－86°25′－W ～ N－72°33′－E	
SD－61	0.80～1.36	0.05	7.50	逆台形	N－87°39′－W	
SD－62	0.80～3.30	0.18	45.10	〃	N－86°11′－W	多数の細い溝を伴う
SD－63	0.93	0.03	1.30	〃	N－86°55′－W	
SD－64	0.94	0.02	2.95	〃	N－85°14′－W	



第21図　金屋地区遺構配置図（第23・25次）S＝1／400

Ⅲ 総　　括

本年度の調査は、昨年度の調査区に隣接する部分を対象地として実施してきた。敢えて昨年度の調査区の隣接地を調査対象地に選定したかについては簡単に前述したが、ここでやや詳細に述べてみたい。第23次調査区[(1)]では、規模の大きな建物跡が狭い範囲に６棟も確認され、地鎮祭を行ったとみられる建物跡も検出されている。このような建物跡が確認されている地区は、比江地区中央部（東西約80ｍ、南北約120ｍの地区で未調査地区）に隣接する部分[(2)]だけであり、立地的、地名的に有望しされている内裏地区[(3)]などでは期待される結果が未だでていないのが現状である。これら10年に及ぶ調査から政庁の存在し得る地区を想定した場合、比江地区中央部の未調査地区が最有力視されてくる。しかし、その地区はビニールハウスがほぼ全面に建ち、調査を実施できるまでには至っていない。よって、隣接地区の調査で政庁の一角を確認すべく調査対象地の選定並びに地元交渉に当って来た。調査対象地としては金屋のセミヤシキ、神ノ木戸の左が内が考えられたが、耕作物等の関係で本地区を調査対象地に選定したのである。

以下本年度調査地区において検出した遺構、遺物についてその概要を述べ、また今後の展望についても記してみたい。

1　遺構

今次の調査で確認された遺構は、掘立柱建物跡８棟、塀跡５条、土坑12基、溝跡７条であり、この内古代の官衙に関連するとみられるものは掘立柱建物跡と塀跡の大半、土坑２基、溝跡２条である。これら遺構は大きく３期に区分される。

まず、Ⅰ期はＳＡ－20に伴う時期である。ＳＡ－20以外の塀跡は短く、限定されたもので、目穏し塀等建物などに伴うものとみられ、区画等をなすものとは考え難い。一方ＳＡ－20は調査区南西部で検出されたため、その全容については推測の域を出ないが、何らかの区画をなした可能性があるとみられ、その方向はほぼ真北に沿ったものである。棟方向が真北に近いＳＢ－59～73などがこの期に属するものと考えてよかろう。これらは、さらに棟方向により３時期に細分されよう。すなわち、Ⅰ－ａ期として、棟方向が真北に極めて近いものが考えられ、ＳＢ－70～71が該当する。次に、Ⅰ－ｂ期として、棟方向が真北に対して数度西に振るものが考えられ、ＳＢ－69・73が該当する。Ⅰ－ｃ期として、棟方向が真北に対して数度東に振るものが考えられ、ＳＢ－68が該当する。また、ＳＫ－113・114はその出土遺物並びに出土状況などからごみ捨ての穴と考えられ、時期的にこの２基の土坑もこのⅠ期に属するとみられる。

Ⅱ期は、ＳＤ－58・59に伴う時期である。この２条の溝は、ＳＡ－20とＳＫ－115 廃絶後に掘られたものであり、その性格については、その掘り方や方向性から考えて単なる排水の溝とは考え難く、何らかの区画をなすものではなかろうか。また、何度か拡張された痕跡もあり、存続期間は長期間に及んだものであると考えた方が妥当ではなかろうか。建物跡では、ＳＢ－68が近い棟方向を示すが、隣接し過ぎており、同時期に存在したとは考え難く、今次の調査で

同期に属するものは確認できなかった。しかし、隣接した第23次の調査区の遺構をみた場合、ＳＢ－62を始めとして棟方向が真北に対して東に５～10度程度振る建物跡が確認されており、これらがこの期に属するのではなかろうか。これらの建物の変遷については前回の報告[(4)]で触れたとおりである。

Ⅲ期は、ＳＤ－58・59が廃絶し、機能しなくなった時期である。この期の明確な建物跡は確認されていないが、平面形が円形で径30cm程度のピット群がこの期に属するのではなかろうか。また、多量の遺物が投棄されていたＳＫ－117～119もこの期の所産と考えられる。

以上、大きく３期に区分して、遺構をみてきたが、その年代は、Ⅰ期が８世紀後半から９世紀前半、Ⅱ期が９世紀後半から11世紀、Ⅲ期が12世紀から13世紀にそれぞれ当て嵌めることが可能ではなかろうか。なお、明らかに８世紀前半と位置付けられる遺構は確認されるに至っていない。

２　遺物

遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土器、常滑、青磁、白磁、砥石、鉄製品があり、その大半が土師器であった。以下、各器種ごとに概略する。

弥生土器は、すべて後世の遺構に混入したもので、図示できるものはなかったが、時期的には後期後半に属するもので、器面にはタタキ目が明瞭に残っていた。この時代の遺構が確認されている地区は、現在のところ金屋の北部の第22次調査地区[(5)]である。土師器については、すべて８世紀後半以降のものであり、古墳時代に属するものは検出されなかった。遺構の性格上、８～11世紀のものは極めて少なく、その多くはＳＤ－58の廃絶期に投棄されたものであった。前者の中では、16～20、26～28、103などの８世紀後半から９世紀前半にかけての遺物が目立った。後者は、ＳＫ－118・119からまとまって出土しており、注目される。これらの遺物は前述のとおり形態的には数種に分類可能であるが、一括出土でありほぼ同時期とみることができよう。共伴遺物からその時期は、12～13世紀と考えることができ、ＳＫ－119 の遺物の方がやや新相を呈するのではなかろうか。また、手づくね成形の小皿と皿（75～77）が一括遺物として出土しており、土佐での出現時期を遡る資料として注目[(6)]される。須恵器は、ほとんどが８世紀後半から９世紀前半のものであり、古墳時代に属するものは出土していない。緑釉陶器は、例年数点ずつ出土する程度で、本年度もＳＤ－58の下層から細片が２点出土したのみで、産地、時期等は不明といわざるを得ない。瓦器は、ＳＫ－118・119から数点ずつ出土するのみであり時期的に12世紀後半から13世紀にかけてのものとみられる。今次までにも比江地区南部を中心に出土例があるが、すべてほぼ同時期のものである。なお、瓦器の小皿の出土例は稀で、県下では他に中村市アゾノ遺跡[(7)]から数点出土している程度である。瓦質土器は、すべてＳＫ－119から出土しており、三足脚を有さないもので、十万遺跡[(8)]出土のものより形態的には古く、県下では最も古い段階に位置付けられるものとみてよくはなかろうか。常滑は、ＳＤ－58のⅠ層中に散乱していたもので、口縁に成形時の歪みをそのまま残している[(9)]。(96) 出土例はこの１

点のみで、12世紀に属するものとみられ、ＳＤ－58埋没の時期決定の遺物の一つである。青磁は、龍泉窯系の碗と皿がＳＤ－58、ＳＫ－118・119から出土している。白磁は、細片で復元できなかったが玉縁の口縁片が出土している。鉄製品では、刀子の出土が注目される。土佐国衙跡の立地条件からすると金属製品や木製品は腐蝕しほとんど残存しないのであるが、遺構が深く湿度が比較的保たれたため遺存したのであろう。また鉄製の紡錘は県下初出土であった。

３　まとめ

今次の調査でも、政庁跡を確定するには至らなかったが、確認された塀跡と溝跡は何らかの区画をなすものと考えられ、検出された位置からすると政庁跡と何らかの関連を持ったものではなかろうか。塀から溝へと区画する範囲を拡張していったとは考えられないであろうか。確認範囲が狭く、判断資料に乏しいが、この延長を確認することが政庁へのアプローチとなると確信している。逆に、この塀跡と溝跡が政庁跡とは無関係の存在であったならば、政庁跡の存在が最有力視される比江地区中央部の未調査地区に政庁が存在する可能性は極めて少なくなるといわざるを得ないであろう。その場合、この地区周辺は単なる官衙区域ということになるわけであり、東西約220ｍ、南北約250ｍがその範囲となる。これほど広範囲に官衙区域が及ぶ例は他国では確認されておらず、それもまた問題点として残る。兎も角、現状では比江地区中央部が政庁跡存在の可能性が最も高い所であるといえよう。そして、官衙区域は、他国のような北方官衙などという形態をとらず、政庁に隣接して存在したのではなかろうか。また、国府域についても自然地形を利用したもので明確な区画というものは持たなかったのではなかろうか。[10]

４　今後の展望

本調査は開始以来12年が経過し、内11年間を調査に費やしてきた。調査開始は奇しくも田村遺跡群の発掘調査開始と同じ昭和54年（1979年）であった。この間の調査で新たな事実、そして一応政庁跡の候補地を示すことはできたが、実際何も明確にすることはできなかったといわざるを得ない。それぞれの遺構がどこかでは繋がっているのであろうが、その繋がりを見出し得なかったのも事実である。しかし、この１～２年で一つの方向性は見出し得たのではなかろうか。

高知県も遅れ馳せながら、新たに大きな開発の波が押し寄せて来つつある。高知空港の再拡張、各種高規格道路、バイパス工事等々、高知では未だかつて経験したことのないほどの調査面積が想定されている。また、この比江地区並びに国分地区にはまほろば計画なるものが企画されつつある。このような諸々の事業に対応するために、止むを得ず本調査の継続を中断せざるを得なくなった。今後いつ再開されるかについては決まっていない。

かつて紀貫之が国司を務めたといわれる土佐国衙は果して何処にあったのか。将来必ず解明しなければならない高知県の課題である。

註

（１）高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第10集―金屋・神ノ木戸地区の調査―平成２年３月

（２）高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第１・３・４・６～８・10集

（３）高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第２・５・６集

（４）（３）に同じ

（５）高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第９集―金屋地区の調査―平成元年３月

（６）高知県教育委員会『田村遺跡群』第10分冊 1986 では手づくね成形の小皿で最も古いものは15世紀前半～16世紀前半、同皿では14～15世紀初頭に位置付けられており、今回の出土により出現時期をそれぞれ遡って考えなければならなくなった。

（７）高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』　1989.3

（８）香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988 ＳＫ12から出土の瓦質羽釜である。

（９）（６）に同じで、この種の形態は出土しておらず、県下では新たな形態として捉えられかつ、出現段階のものと考えることができよう。

（10）下野国府跡、伯耆国府跡、周防国府跡などでも「国府域」の範囲を区画するものの存在については疑問がでており、土佐国府跡についてもその存在は疑問視される。

第6表　遺物観察表1

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態・文　様	手　法	備　考
22－1	第Ⅰ層	土　錘	全長　(4.5) 全幅　1.4 重量(g)　(7.8) ――	端部が欠損するが、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は5㎜である。	土師質の土錘。	
〃－2	〃	〃	全長　(5.0) 全幅　2.0 重量(g)　(14.2) ――	端部が欠損するが、紡錘形を呈す。 孔径は3㎜である。	〃	
〃－3	〃	〃	全長　4.5 全幅　2.0 重量(g)　15.5	円筒形であり、ほぼ完形。 孔径は6㎜である。	〃	
〃－4	第Ⅲ層	須恵器 杯（蓋）	17.2 (2.4) ―― ――	天井部はほぼ平担で、つまみは欠損する。口縁部は緩やかに下り、端部を下方へ短く屈曲さす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。天井部外面には回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃－5	〃	〃 杯（身）	15.0 3.5 ―― 10.6	底部は平らで、外面端部にはハの字形に開く高台が付く。端部は摩滅し、丸くなる。体部は上外方へ外反気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－6	〃	〃 〃	15.0 4.2 ―― 10.4	底部は平らで、外面端部にはハの字形に開く高台が付く。端部は摩滅するが、外傾する平面をなす。体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。端部は丸く仕上げる。	〃	焼成はやや不良。
〃－7	〃	土師器 杯	17.8 3.5 ―― ――	底部は欠損する。体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。端部は丸く仕上げる。口縁部外面には浅い凹線が回る。	内外面ともほぼ全面に横方向のヘラ磨きを施す。	
〃－8	SB－70	須恵器 甕	17.6 (5.9) ―― ――	口頸部は短く外反し、端部は内傾する面をなす。肩部は口頸部から大きく屈曲する。	口縁部内外面は回転ナデ調整。肩部内面はナデ調整、外面は平行のタタキ目が残存する。	外面は、自然釉が剝離し、ハダ荒れしている。
〃－9	SA－22	〃 皿	17.6 1.6 ―― 15.0	口縁部は短く外反し、端部で内側に小さく折り返す。底部は中窪みになっている。	器面は回転ナデ調整。底部内面のみナデ調整。底部外面は回転ヘラ切り。	火だすきが部分的にかかる。
〃－10	〃	土　錘	全長　(4.7) 全幅　1.4 重量(g)　5.8 ――	両端が欠損するが、ほぼ紡錘形を呈す。 孔径は7㎜である。	土師質の土錘。	
〃－11	SA－23	砥　石	全長　11.5 全幅　8.0 全厚　7.0 重量(g)　1,345	細粒砂岩である。4面に使用痕が残る。	――――	
〃－12	SK－113	須恵器 杯（蓋）	16.3 2.0 ―― ――	口縁部は斜め下方に下り、端部はさらに下外方へ屈曲する。天井部は中央部が窪み、真中に擬宝珠形のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラ削り調整 内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃－13	〃	〃 鉢	20.3 (7.4) ―― ――	底部はやや丸味を有す。体部は上外方へ内湾気味に上がり、口縁部で内反する。口縁端部は外傾する浅い凹面をなす。	器面は回転ナデ調整後、内底面はナデ調整、外底面は回転ヘラ削りをそれぞれ施す。	内外面とも灰黄色を呈す。
〃－14	〃	〃 壺	―― (5.9) 10.8 7.0	胴部最大径は上胴部にあり、中胴部以下内下方へやや丸味を持って下る。底部は平らである。	器面は回転ナデ調整。底部外面は回転ヘラ切り。	焼成はやや不良。
〃－15	〃	〃 〃	13.0 (7.0) ―― ――	口縁部は短く若干外傾し、端部は上方を向く平面をなす。胴部は口縁部から屈曲して下る。	胴部外面は回転カキ目調整、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	

第6表　遺物観察表2

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
22－16	SK－113	土師器 杯（蓋）		19.9 (1.7) —— ——	口縁部は斜め下方へ下り、端部は小さく屈曲する。天井部はほぼ平らである。	器面は摩耗しており、調整不明瞭。	口縁部内面に煤が付着。
〃－17	〃	〃 〃		19.0 (1.3) —— ——	口縁部は水平に延び、端部で下外方に屈曲する。天井部は欠損するが、ほぼ平担とみられる。		
〃－18	〃	〃 壺の把手	全長 全幅 全厚	3.6 4.1 1.3 ——	断面U字形をなす。	ナデ調整。	
23－19	〃	〃 甕		21.2 (4.4) —— ——	口縁部は胴部からくの字形をなして、内湾気味に上がる。端部は内傾する面をなす。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。	
〃－20	〃	〃 〃		26.8 (8.8) (24.8) ——	〃	器面は摩耗しており、調整は不明瞭であるが、口縁部内面と胴部外面にはハケ目が残存する。	
〃－21	SK－114	須恵器 杯（蓋）		12.4 (1.4) —— ——	口縁部は斜め下方へ下り、端部は短く下方へ屈曲する。天井部は平らである。	器面は回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラ削り調整、内面にナデ調整を施す。	ロクロ回転方向は右方向。
〃－22	〃	〃 〃		15.8 2.7 —— ——	口縁部は斜め下方へ下り、端部は短く下方へ屈曲する。天井部は平らで、中央に擬宝珠形のつまみが付く。	〃	〃
〃－23	〃	〃 〃		16.4 (2.1) —— ——	口縁部は斜め下方へ下り、端部は短く下方へ屈曲し、外面に凹線が回る。天井部は平らである。つまみは欠損する。	〃	〃
〃－24	〃	〃 杯（身）		10.6 3.6 —— 7.8	口縁部は体部から上外方に真直ぐたち上がり、端部は丸く仕上げる底部はやや丸味を有する。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整で、内底面のみナデ調整を施す。	
〃－25	〃	〃 〃		11.4 3.5 —— 8.2	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部はやや丸味を有す。	底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。	
〃－26	〃	土師器 杯		15.5 4.4 —— 9.8	口縁部は体部からやや外湾気味に上がり、端部を内側に若干折り返す。底部は欠損するが、ほぼ平らと推測される。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－27	〃	〃 皿		18.0 2.8 —— 13.9	口縁部は体部から短く上外方へたち上がり、端部を内側に若干折り返す。底部は平らである。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－28	〃	〃 鉢		25.0 (6.5) 21.7 ——	口縁部は胴部から大きく屈曲して短く斜め上外方へ延び、端部は丸く仕上げる。胴部は内湾気味に下る。	器面は摩耗が著しく、調整不明。	
〃－29	〃	鉄製品 刀子	全長 全幅 全厚	(9.5) 1.0 0.3	鋒先端が欠損する。棟は平棟で厚さ2mm、刃部最大幅1.0cmである。茎部には木質が残存する。全般に銹化が著しい。	――――	
〃－30	〃	〃	全長 全幅 全厚	(14.0) 1.3 0.4	鋒先端が欠損する。棟は平棟で厚さ1.5cm、刃部最大幅0.9cmである。茎部には木質が残存する。全般に銹化が著しい。	――――	

第6表　遺物観察表3

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
23－31	SK－114	砥　石	全長 (20.3) 全幅 10.3 全厚 7.5 重量(g) 2,090	端部と側面が折損する。中粒砂岩で、2面に使用痕が残存する。	――	
〃－32	SK－115	須恵器 杯（蓋）	14.6 3.3 ―― ――	口縁部は内湾気味に下り、端部を下方へ短く屈曲さす。天井部は中央がやや窪み、そこにボタン形のつまみが付く。	器面は摩耗が著しく、調整不明瞭。	焼成は不良。
〃－33	〃	〃 杯（身）	8.9 3.8 ―― 5.5	口縁部は上外方へほぼ真直ぐたち上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	底部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。他は回転ナデ調整。	
〃－34	〃	〃 〃	14.3 3.9 ―― 9.6	口縁部は体部から上外方へほぼ真直ぐたち上がり、端部で若干外傾する。底部は平らで、底部外面端部にはハの字形に開く高台が付く。高台端部は丸く仕上げられる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整で、底部内面のみ後でナデ調整を施す。	
〃－35	〃	〃 甕	11.4 (5.5) ―― ――	口頸部は肩部からL字形に屈曲し上外方に真直ぐ延びた後外傾して上がる。口縁端部は上方を向く平面をなす。	肩部内面には同心円文のタタキ目が残存する。他は回転ナデ調整。	
24－36	〃	土師器 甕	17.0 (5.7) (14.9) ――	口縁部は胴部からくの字形をなし上外方へ真直ぐ延び、端部は丸く仕上げる。	頸部内面と胴部外面にはハケ調整、口縁部内面にはヨコナデ調整、口縁部外面と胴部内面にはナデ調整をそれぞれ施す。	
〃－37	SK－118	〃 杯	―― (2.1) ―― 8.0	体部は上外方へ延びるが、口縁部は欠損。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。内面は回転ナデ調整。口縁部外面は未調整。	
〃－38	〃	〃 〃	―― (2.5) ―― 7.6	〃	〃	
〃－39	〃	〃 〃	―― (2.5) ―― 6.2	体部は上外方へ内湾気味に延びるが、口縁部は欠損。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－40	〃	〃 〃	14.2 4.0 ―― 7.7	口縁部は上外方へほぼ真直ぐたち上がり、端部は丸く仕上げる。底部はほぼ平担である。	〃	
〃－41	〃	〃 〃	13.7 3.9 ―― 6.6	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ調整。体部外面は未調整。	
〃－42	〃	〃 〃	13.6 3.7 ―― 7.2	〃	〃	
〃－43	〃	〃 〃	13.4 3.6 ―― 6.8	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切りで、若干板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整で、内面は丁寧なナデ調整を施す。	
〃－44	〃	〃 〃	13.5 4.8 ―― 6.4	口縁部は体部から外反した後、上外方へほぼ真直延び、端部は丸く仕上げる。底部は中窪みである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整で、内面は丁寧なナデ調整を施す。	器形に歪みがある。
〃－45	〃	〃 小　皿	8.0 1.4 ―― 4.9	口縁部は短く上外方へ延び、端部は細く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切りで、板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整で、内底面のみ後でナデ調整を施す。	口縁部の器厚は薄い。

第6表　遺物観察表4

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態・文　様	手　法	備　考
24－46	SK－118	土師器 小皿	7.6 1.3 —— 4.6	口縁部は短く上外方へ延び、端部は細く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整で、内底面のみ後でナデ調整を施す。	口縁部の器厚は薄い。
〃－47	〃	〃	7.6 1.4 —— 5.2	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。口縁部外面は未調整。	〃
〃－48	〃	〃 〃	7.4 1.5 —— 5.4	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整で、内底面のみ後でナデ調整を施す。	〃
〃－49	〃	〃 〃	7.8 1.6 —— 5.4	〃	〃	〃
〃－50	〃	〃 〃	8.0 1.5 —— 5.7	〃	〃	〃
25－51	〃	〃 〃	8.4 2.2 —— 4.4	口縁部は体部から内湾気味に延びた後、上外方へほぼ真直ぐ上がり端部は細く仕上げる。底部は比較的深く、平らである。	〃	〃
〃－52	〃	〃 〃	7.8 1.6 —— 3.8	口縁部は体部から上外方へほぼ真直ぐ上がり、端部を細く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	口縁部の器厚に対し、体部の器厚は薄い。
〃－53	〃	〃 〃	7.8 1.6 —— 4.9	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切りで、板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整。	〃
〃－54	〃	〃 〃	8.2 1.5 —— 5.0	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	〃
〃－55	〃	〃 〃	7.6 1.5 —— 4.8	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	〃	〃
〃－56	〃	〃 〃	7.4 1.8 —— 6.0	〃	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。口縁部外面は未調整。	〃
〃－57	〃	〃 〃	7.2 1.4 —— 5.6	口縁部は体部から短く上外方へ延び、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整で、内底面のみ後でナデ調整を加える。	口縁部の器厚は比較的厚い。
〃－58	〃	〃 〃	7.6 1.8 —— 5.6	〃	〃	〃
〃－59	〃	〃 〃	7.2 1.6 —— 5.0	〃	〃	〃
〃－60	〃	〃 〃	7.0 1.7 —— 4.5	口縁部は体部からほぼ真直ぐ上外方へ延び、端部は内傾する面をなす。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	

第6表　遺物観察表5

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
25－61	SK－118	土師器 小皿		7.4 1.7 —— 4.8	口縁部は体部から上外方へ延び、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整で、内底面のみ後でナデ調整を加える。	
〃－62	〃	〃 〃		7.8 1.5 —— 5.2	口縁部は体部から短く上外方へ延び、端部を丸く仕上げる。底部は平らである。	〃	体部から口縁部にかけて器厚が薄くなる。
〃－63	〃	〃 〃		7.8 1.4 —— 6.0	〃	〃	〃
〃－64	〃	〃 〃		8.0 1.5 —— 5.8	〃	〃	〃
〃－65	〃	〃 〃		7.6 1.4 —— 5.0	〃	〃	〃
〃－66	〃	瓦器 椀		14.4 4.2 —— 3.6	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は小さく平らで、断面逆台形の小さな高台が付く。	口縁部外面から口唇部にかけてヨコナデ調整。内面には暗文を施す。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。	
〃－67	〃	〃 〃		14.6 4.1 —— 4.4	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は小さく平らで、断面逆三角形の小さな高台が付く。	〃	
〃－68	〃	青磁 皿		11.0 2.3 —— 4.6	口縁部は体部から屈曲して、上外方へ内湾気味に上がる。底部は平らである。	青磁釉を底部外面以外に施釉する。	貫入あり。龍泉窯のものとみられる。
〃－69	〃	鉄製品 紡錘	全長 径 全厚	(11.2) 5.0 0.5 ——	径5.0cm、厚さ8㎜の紡錘車で、上下に厚さ5㎜の棒が付くが、両端が折損する。	————	
〃－70	SK－119	土師器 杯		—— (2.0) —— 6.1	体部は内湾気味に上がるが、口縁部は欠損する。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。内面は回転ナデ調整で外面は未調整。	
〃－71	〃	〃 〃		13.0 5.1 —— 6.2	口縁部は体部から上外方にほぼ真直ぐ上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－72	〃	〃 〃		12.6 4.0 —— 9.1	〃	〃	口縁部内面に煤が付着する。器厚が全般に厚い。
〃－73	〃	〃 小皿		7.2 1.7 —— 4.8	口縁部は体部から短く上外方へ延び、端部は細く仕上げる。底部は平らである。	器面は摩耗しており、調整不明。	口縁部の器厚は薄い。
〃－74	〃	〃 〃		7.2 1.2 —— 5.5	口縁部は体部から短く斜め上外方へ延び、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。内面中央は器厚が厚く残る。	
〃－75	〃	〃 〃		7.7 1.6 —— ——	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は細く仕上げる。底部は丸味を有す。	手づくね。内面はナデ調整。口唇部から口縁部外面にかけてヨコナデ調整。体部から底部外面にかけて指頭圧痕が残る。	

第6表　遺物観察表6

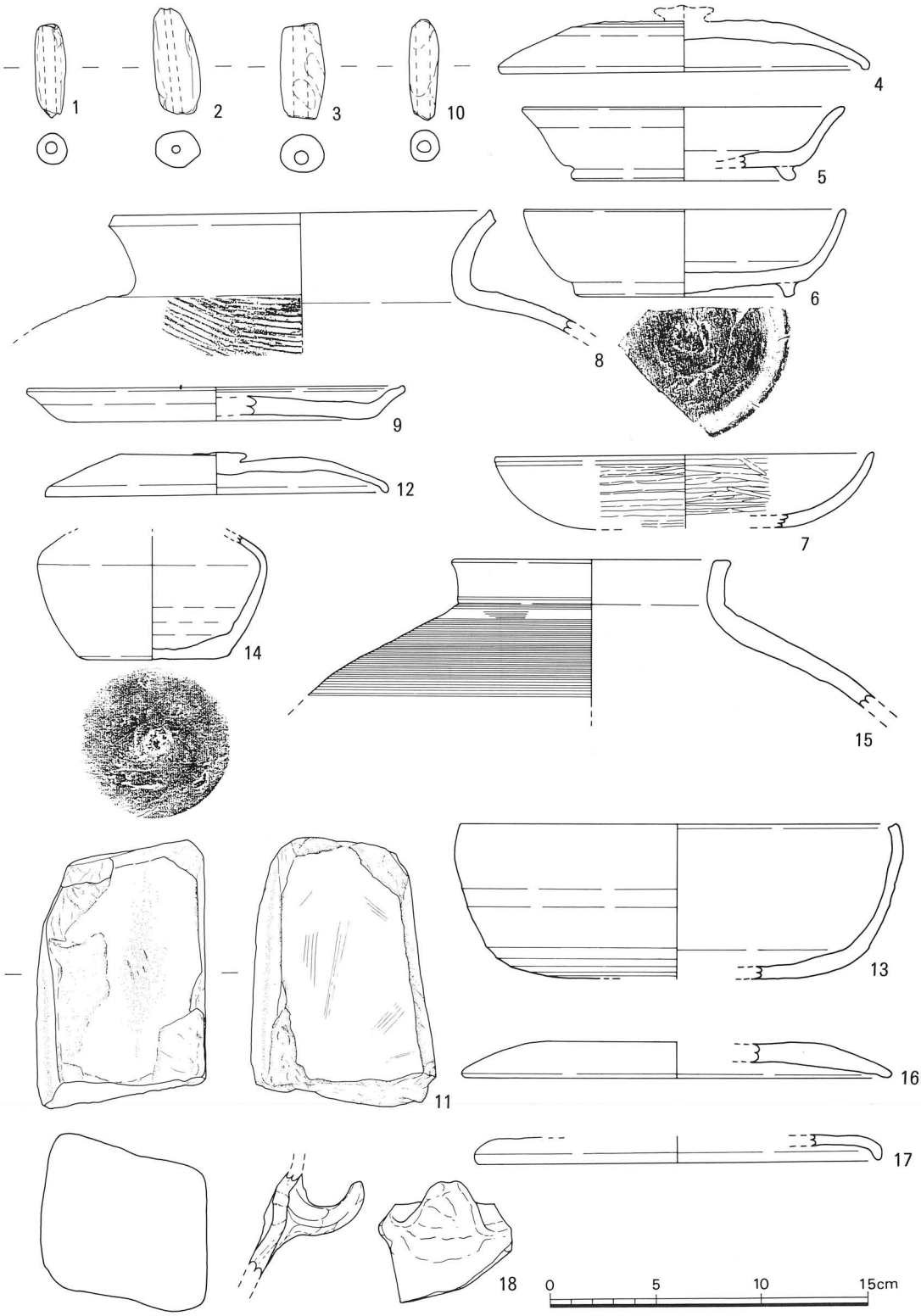
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
26－76	SK－119	土師器 皿	13.6 3.1 —— 10.0	口縁部は体部から上外方に上がり端部は丸く仕上げる。底部はやや丸味を有す。	手づくね。口縁部はヨコナデ調整。内底面はナデ調整。底部外面には指頭圧痕が残る。	口縁部内外面の一部に煤が付着する。
〃－77	〃	〃 〃	13.8 4.1 —— ——	口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は丸い。	〃	外底面に煤が付着する。
〃－78	〃	瓦器 椀	13.3 3.9 —— 4.4	口縁部は体部からやや内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は小さく平らで、断面逆三角形の高台が付く。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。内面に暗文を施す。体部から底部外面にかけて指頭圧痕が残る。	
〃－79	〃	〃 〃	15.4 4.5 —— 4.5	口縁部は体部から内湾して上がり端部は丸く仕上げる。底部は小さく平らで、断面逆三角形の高台が付く。	器面は摩耗しており、調整不明瞭。	
〃－80	〃	〃 小皿	7.6 1.5 —— 6.8	口縁部は短く上外方へ延び、端部は丸く仕上げる。底部は丸味を有す。	〃	
〃－81	〃	瓦質土器 羽釜	19.1 14.2 22.4 ——	口縁部は中胴部から内湾して上がり、端部は外傾する平面をなす。口縁下には上外方を向く鍔が付く。鍔端部は丸く仕上げる。胴部は内湾気味に下だり、丸い底部に至る。	外面には指頭圧痕が残る。他は器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－82	〃	〃 〃	23.0 (6.7) 27.4 ——	口縁部は中胴部から内湾して上がり、端部は外傾する平面をなす。口縁下にはやや上外方を向く鍔が付き、端部は内傾する凹面をなす。	胴部外面には指頭圧痕が残る。他はヨコナデ調整。	
〃－83	〃	〃 〃	18.1 (5.4) 24.0 ——	口縁部は中胴部から内湾して上がり、端部はやや外傾する平面をなす。口縁下には水平に延びる鍔が付き、端部は外傾する平面をなす。	〃	鍔以下には煤が付着する。
〃－84	〃	〃 〃	23.2 (11.5) 25.6 ——	口縁部は中胴部からやや内傾してたち上がる。口縁下には水平に延びる鍔が付く。中胴部以下は内湾して下る。	外面には指頭圧痕が残る。他は器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－85	〃	青磁 皿	10.2 2.0 —— 4.8	口縁部は体部から屈曲して上外方へ内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は中窪みになっている。	底部外面以外に青磁釉は施釉する。	龍泉窯のものとみられる。
〃－86	〃	〃 椀	—— (4.9) —— 6.8	口縁部は体部から若干内湾した後上外方へ真直ぐ延びる。底部には削り出し高台が付く。口縁部内面には片切彫による蓮花文がみられ、見込みにも同様の花文様が施される。他には文様はみられない。	高台内側と畳付以外に青磁釉を施釉する。	〃
〃－87	SK－121	須恵器 甕	13.6 (5.3) —— ——	口頸部は肩部から屈曲し、短く直立した後外傾して延びる。口縁端部は丸く仕上げる。	胴部内面には同心円文のタタキを施す。他は回転ナデ調整を施す。	
〃－88	SD－58	土師器 杯	12.8 3.9 —— 7.0	口縁部は体部から上外方へほぼ真直ぐ上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－89	〃	〃 〃	14.1 3.9 —— 9.2	〃	〃	

第6表　遺物観察表7

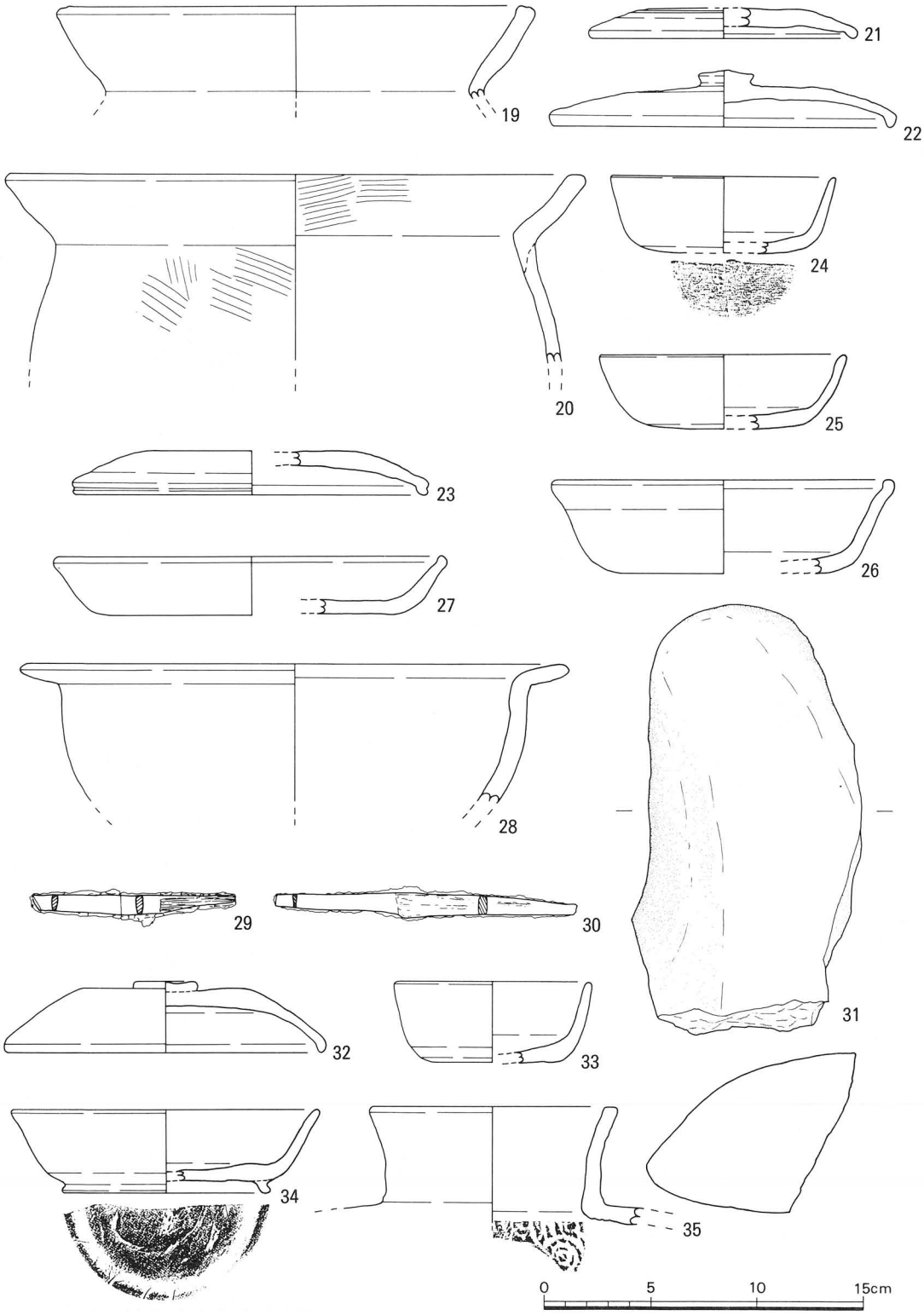
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
26－90	SD－58	土師器 杯	13.2 3.6 —— 6.6	口縁部は体部から外反気味に上がり、端部は丸く仕上げられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	焼成は非常に良い。
27－91	〃	〃 〃	—— (3.0) —— 6.0	口縁部は欠損するが、体部から内湾気味に上がるとみられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－92	〃	〃 〃	—— (2.9) —— 6.3	口縁部は欠損する。底部は平らでベタ高台である。	〃	
〃－93	〃	〃 小皿	—— (2.4) —— 5.2	底部には高さ2cmの高台が付く。	〃	
〃－94	〃	〃 〃	7.4 1.9 —— 4.4	口縁部は体部から上外方へ延び、端部近くで若干外傾する。端部は丸く仕上げられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－95	〃	壺の把手	全幅 4.4 全厚 1.4 —— ——	中央部と両端が盛り上がる。真中に径5～7mmの円孔を穿つ。	外面は釉が剝離し、ハダ荒れがみられる。	
〃－96	〃	常滑 甕	33.2 (43.0) 53.8	口縁部は肩部から大きく外反して上がり、端部は丸く仕上げる。肩は張り、上胴部から下内方へ下る。肩部と中胴部やや下に格子目の刻印が施される。	口縁部内外面は回転ナデ調整。肩部外面には灰釉を施釉する。胴部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。	
〃－97	〃	青磁 碗	15.4 6.7 —— 5.8	口縁部は体部から内湾気味に上がった後上外方を向く。端部は細く仕上げられる。底部は削り出し高台である。	畳付と高台内側以外に青磁釉を施釉する。	龍泉窯のものとみられる。
〃－98	〃	砥石	全長 (10.0) 全幅 8.6 全厚 4.5 重量(g) 600	細粒砂岩である。3面に使用痕が残る。	――――――	
〃－99	SD－62	土師器 小皿	8.0 1.5 —— 5.2	口縁部は体部から短く上外方へ延び、端部は細く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切りで、板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整。	
〃－100	P－1	須恵器 杯(蓋)	13.2 2.3 —— ——	口縁部は内湾気味に下り、端部は小さく下方に屈曲する。天井部は平らで、中央部に擬宝珠形のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整で、天井部内面のみ後でナデ調整を加える。	ロクロ回転方向は右方向。外面はハダ荒れがみられる。
〃－101	P－2	〃 〃	—— (1.3) —— ——	口縁部は欠損する。天井部は平らで中央部に擬宝珠形のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整を施す。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃－102	〃	〃 〃	20.4 (5.0) —— ——	口頸部は緩やかに外反し、端部は肥厚し、丸く仕上げる。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。	焼成はやや不良。
〃－103	P－3	土師器 椀	17.6 6.0 —— 11.8	口縁部は上外方へ真直ぐたち上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らで、高さ5mmの高台が付く。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整を加える。他はヘラ磨きを施す。	口縁部内面及び外底面を中心に斑点状の剝離がみられる。
〃－104	P－4	〃 杯	—— (2.1) —— 6.9	口縁部は欠損するが、体部の形態からして内湾気味に上がるとみられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り、内面は回転ナデ調整で、外面は未調整。	

第6表　遺物観察表8

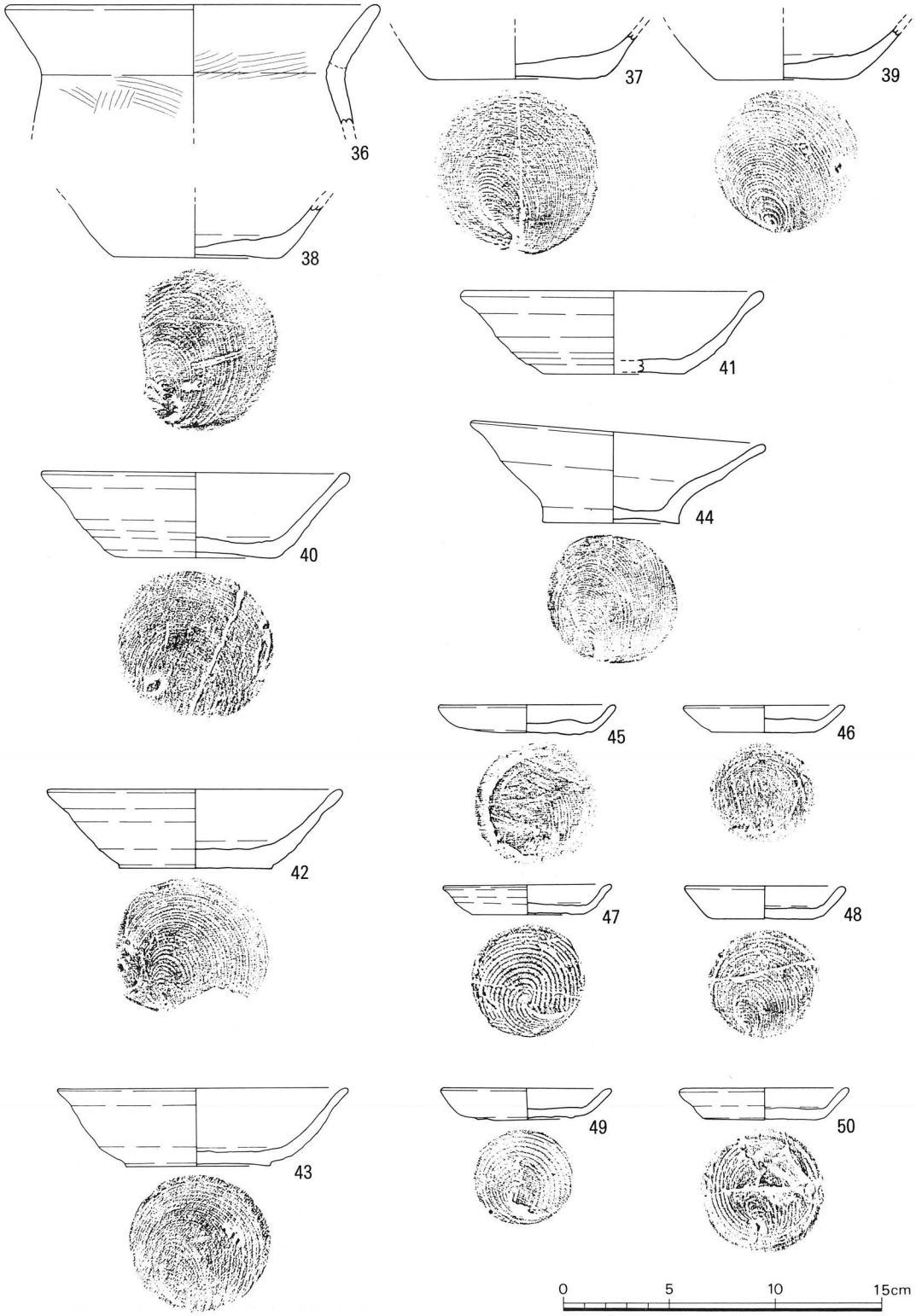
挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態・文　様	手　法	備　考
27－105	P－5	土師器 杯	—— (2.9) —— 7.1	口縁部は欠損するが、体部から内湾気味に上がるとみられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－106	P－6	〃 〃	11.6 4.5 —— 6.4	口縁部は体部から内湾気味に上がった後外傾して延びる。端部は丸く仕上げられる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整。体部外面は未調整。	
〃－107	P－7	〃 〃	13.0 4.3 —— 8.6	口縁部は体部から上外方へたち上がり、端部は丸く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転糸切り。他は回転ナデ調整。	
〃－108	P－8	〃 小　皿	—— (1.7) —— 6.0	口縁部は欠損するが、体部の形態からして短く上外方へ上がるとみられる。底部は平らである。	〃	焼成は非常に良い。



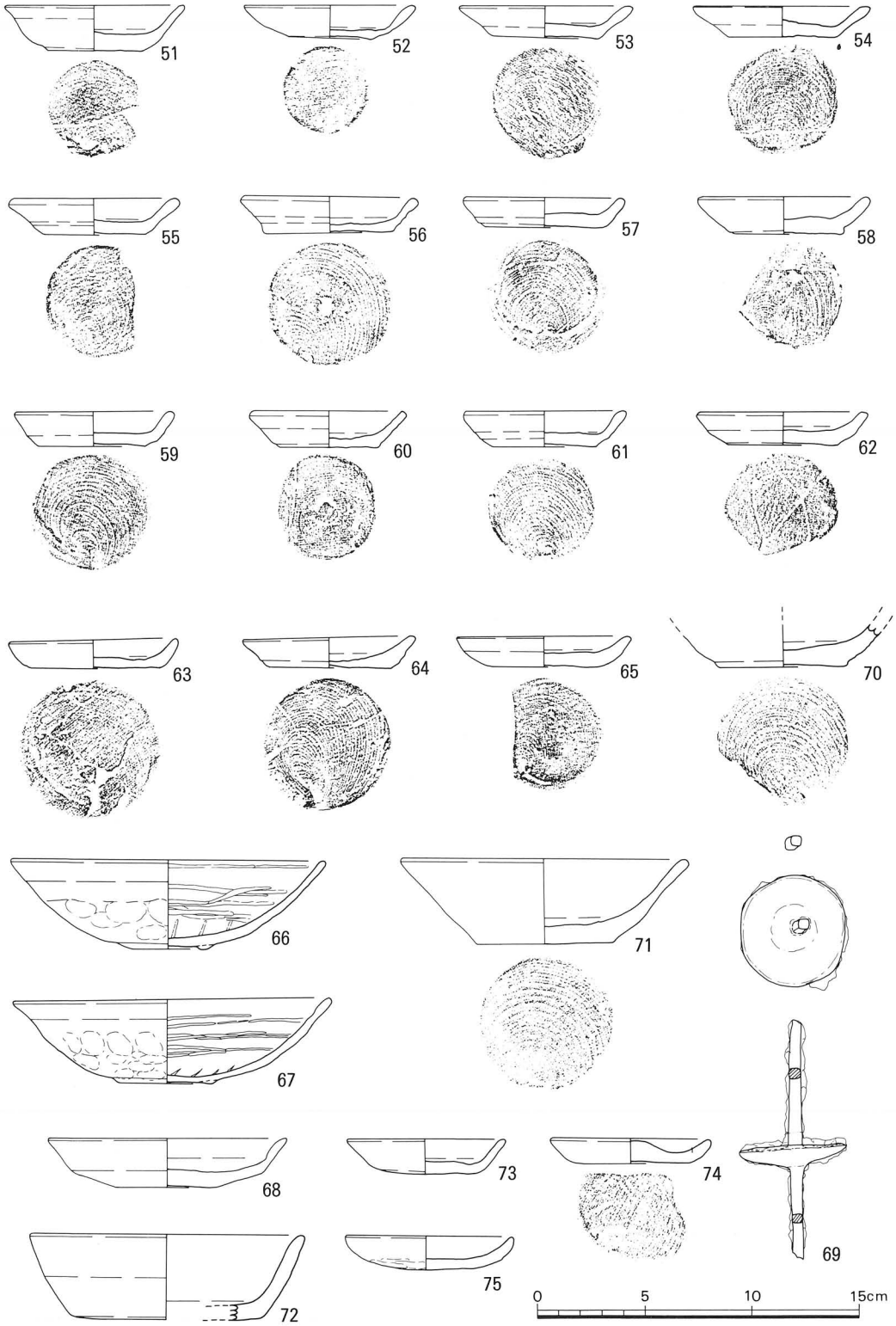
第22図　遺物実測図 1



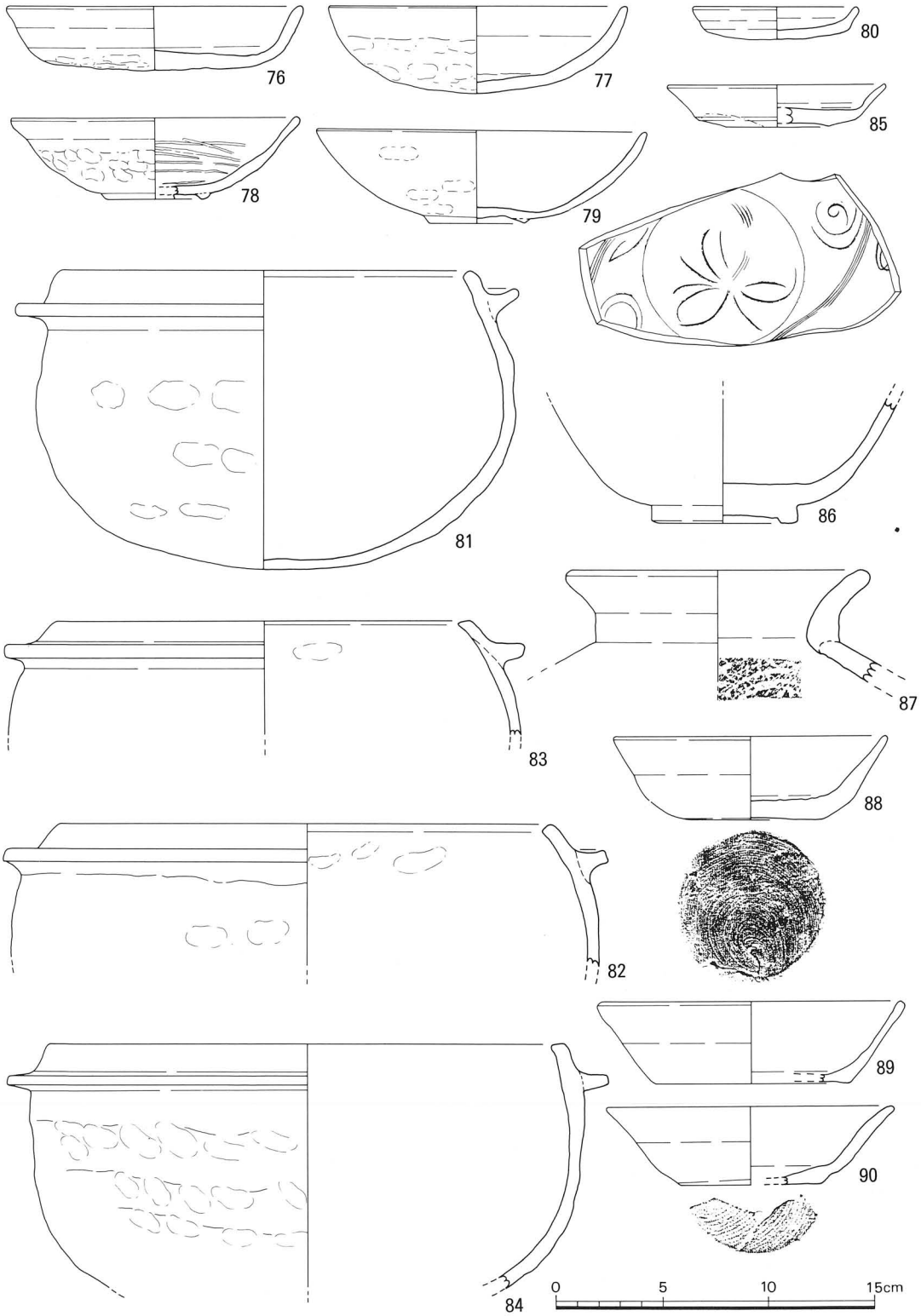
第23図　遺物実測図 2



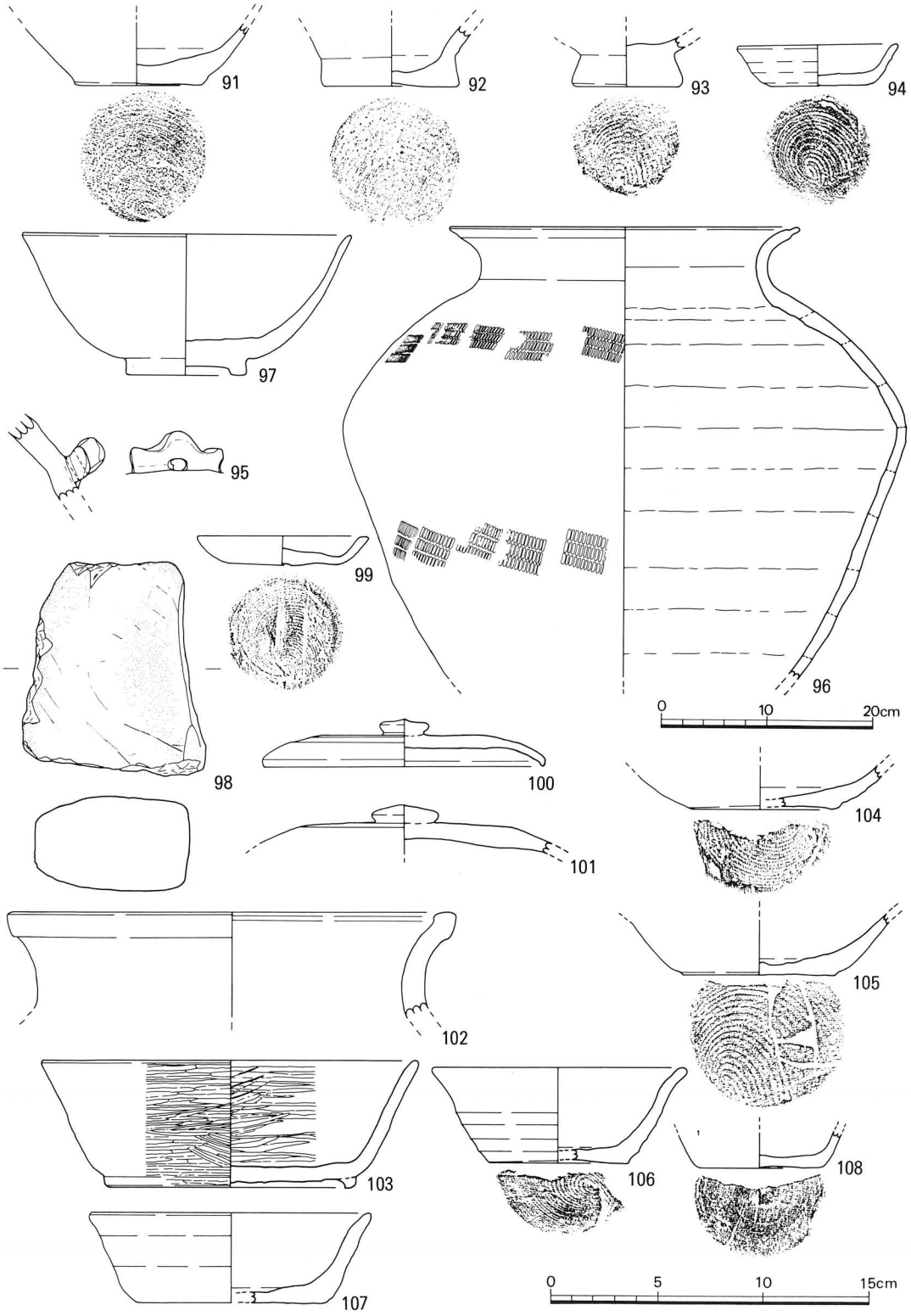
第24図　遺物実測図 3


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
70
66
71
67
68
73
74
69
72
75
0
5
10
15cm

第25図　遺物実測図 4

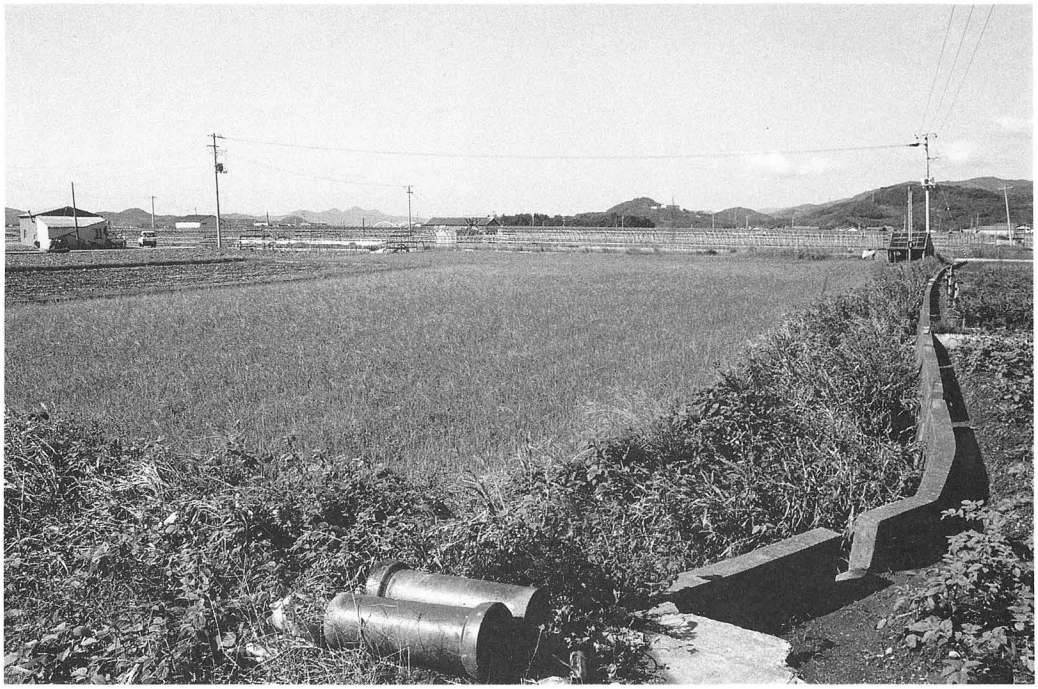


第26図　遺物実測図 5


91
92
93
94
97
95
96
99
98
100
101
104
102
105
103
106
108
107
0
10
20cm
0
5
10
15cm

第27図　遺物実測図 6

図　　版

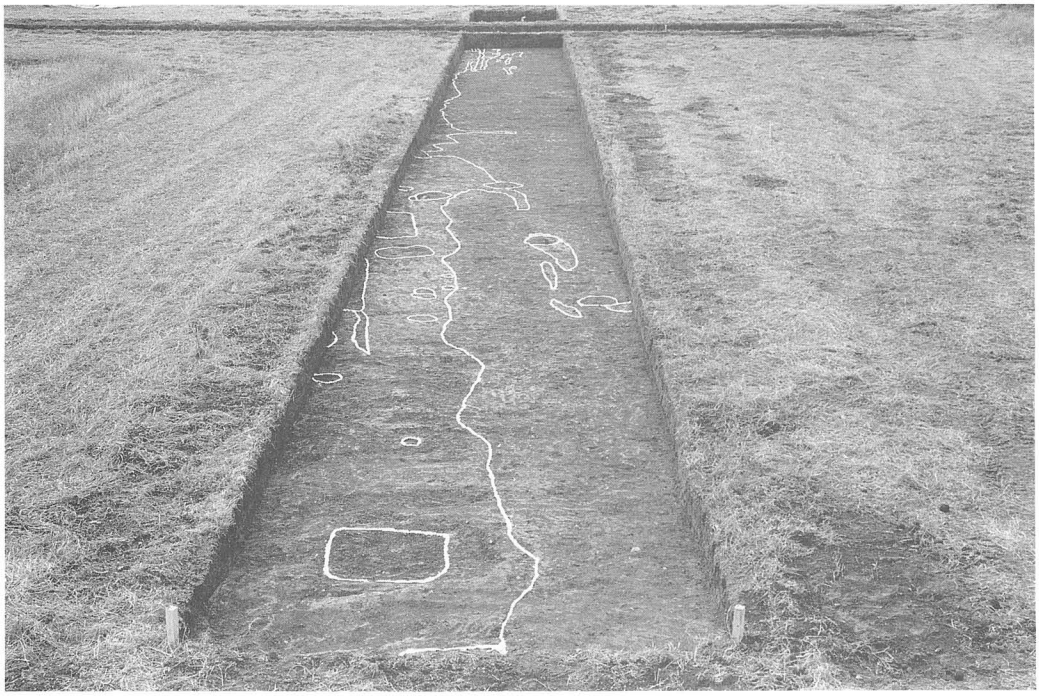


調査前全景（東より）

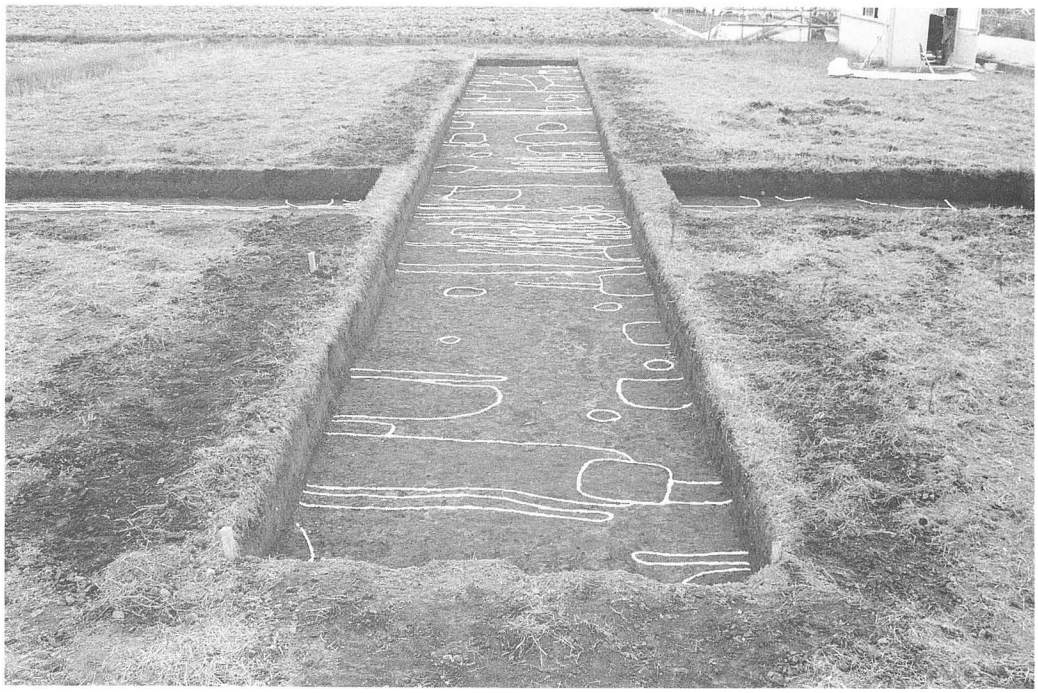
調査前全景（西より）

図版2

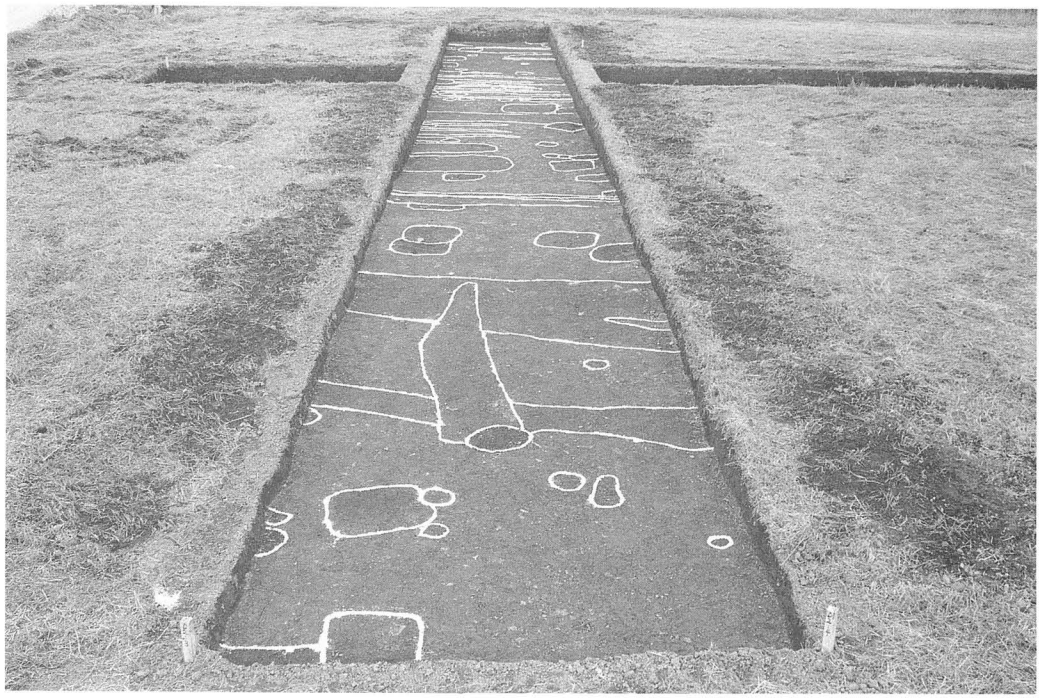
Aトレンチ遺構検出状態（西より）



Aトレンチ遺構検出状態（東より）



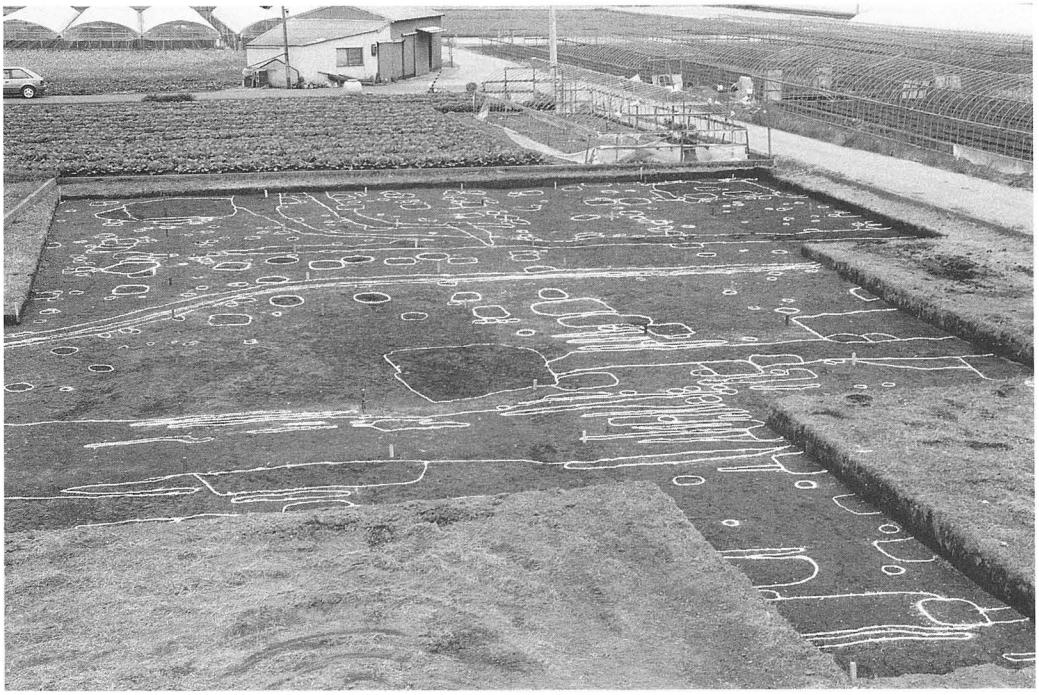
Ｂトレンチ遺構検出状態（北より）



Ｂトレンチ遺構検出状態（南より）

図版4

遺構検出状態（北より）

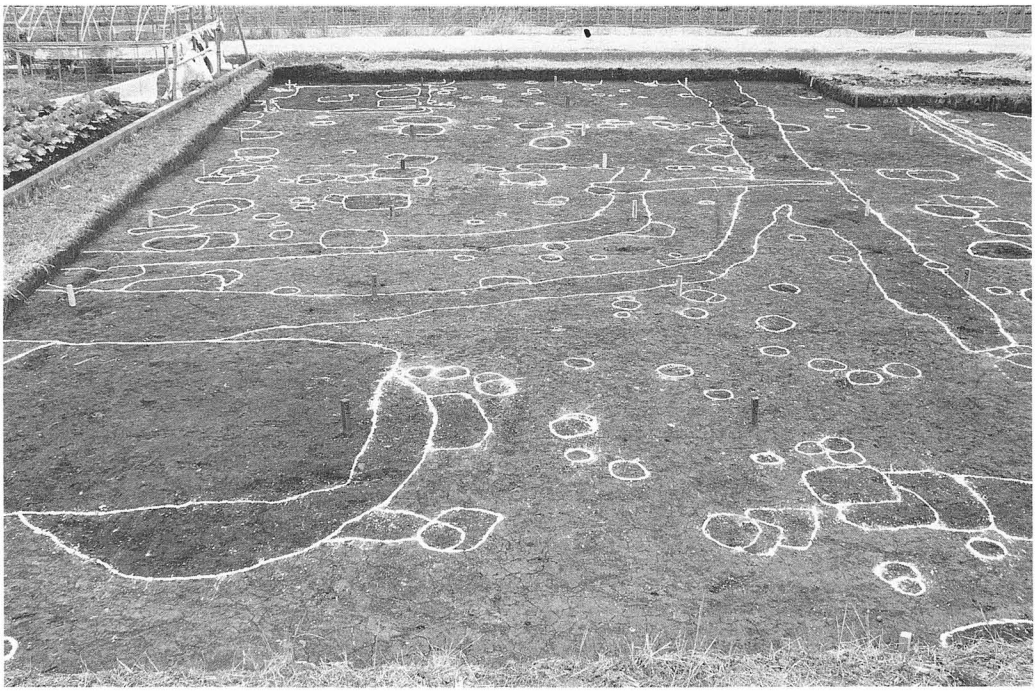


遺構検出状態（北より）

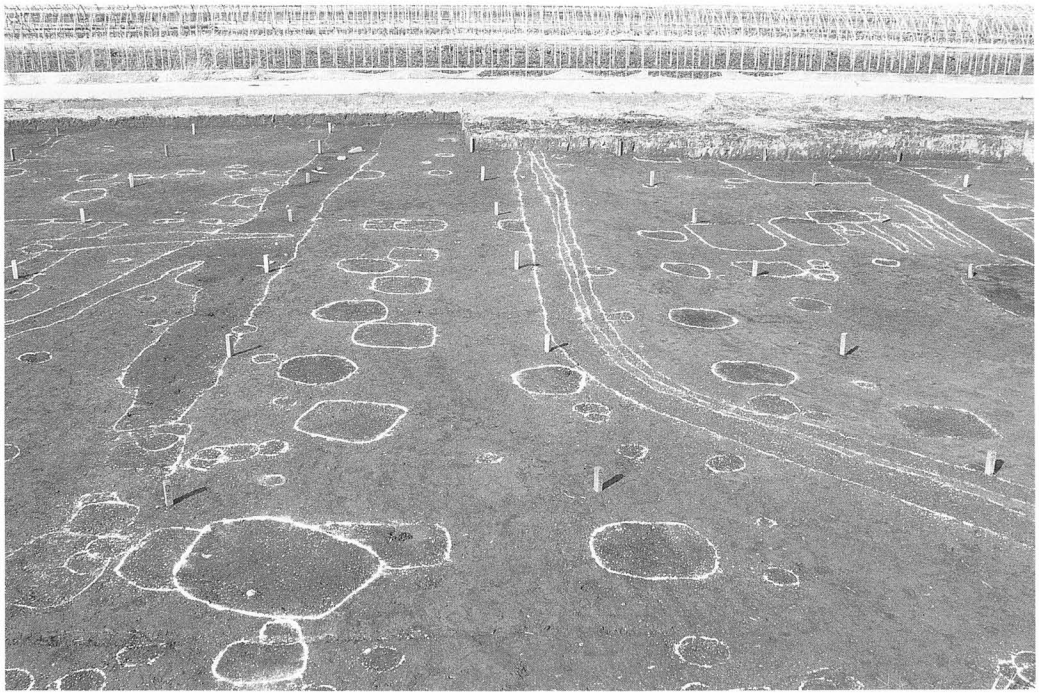
遺構完掘状態（北より）

遺構完掘状態（東より）

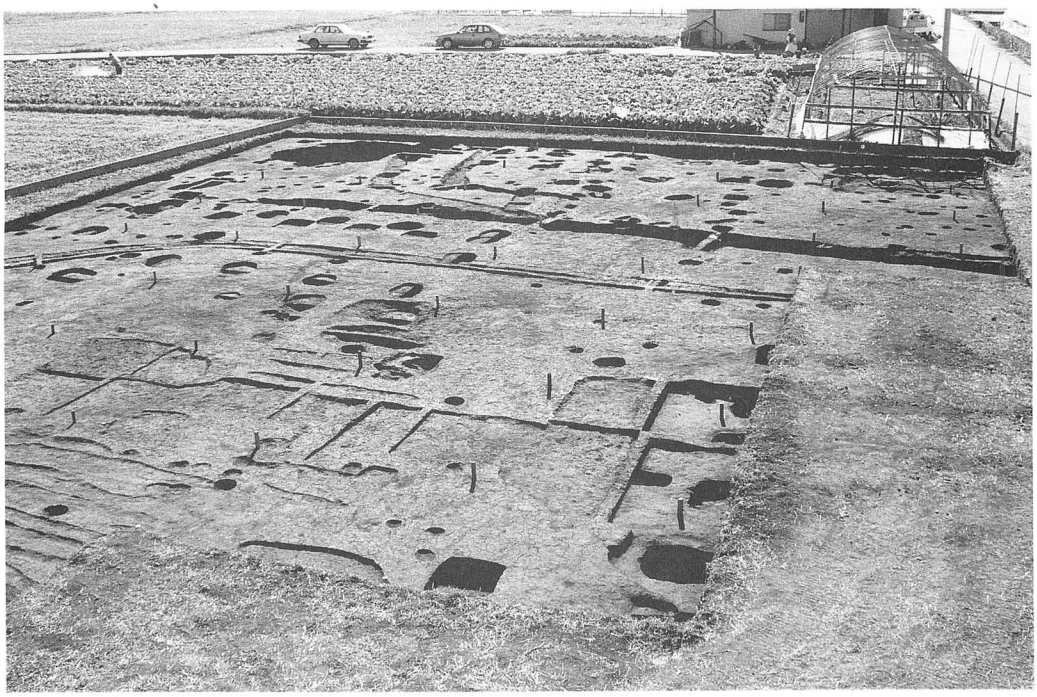
図版6



遺構検出状態（西より）



遺構検出状態（西より）

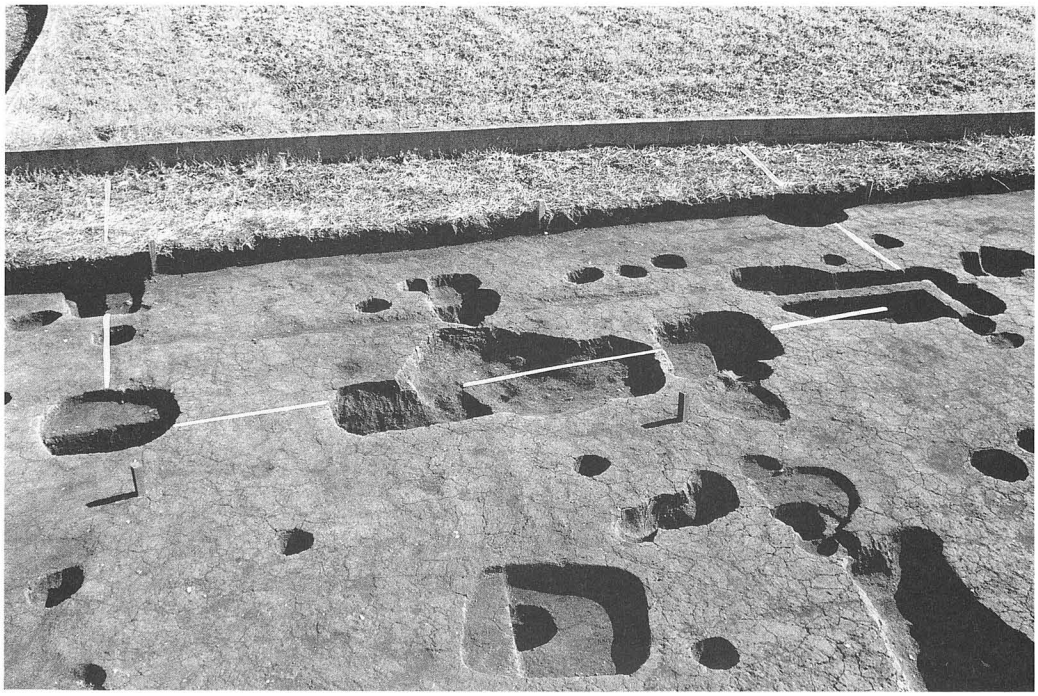


遺構完掘状態（北より）

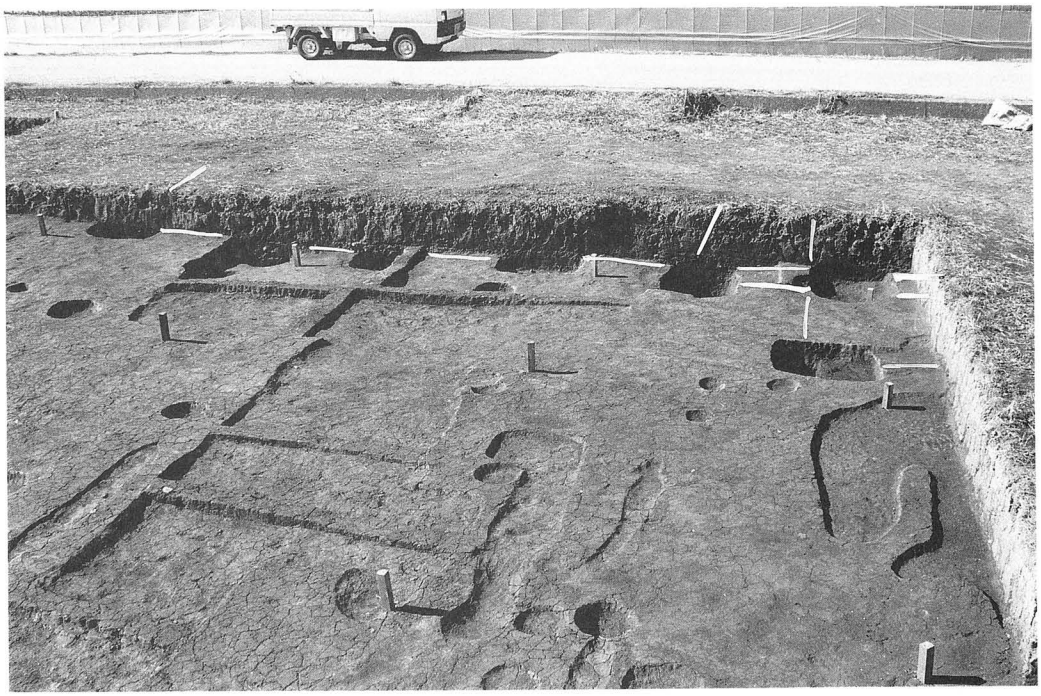
遺構完掘状態（西より）

図版8

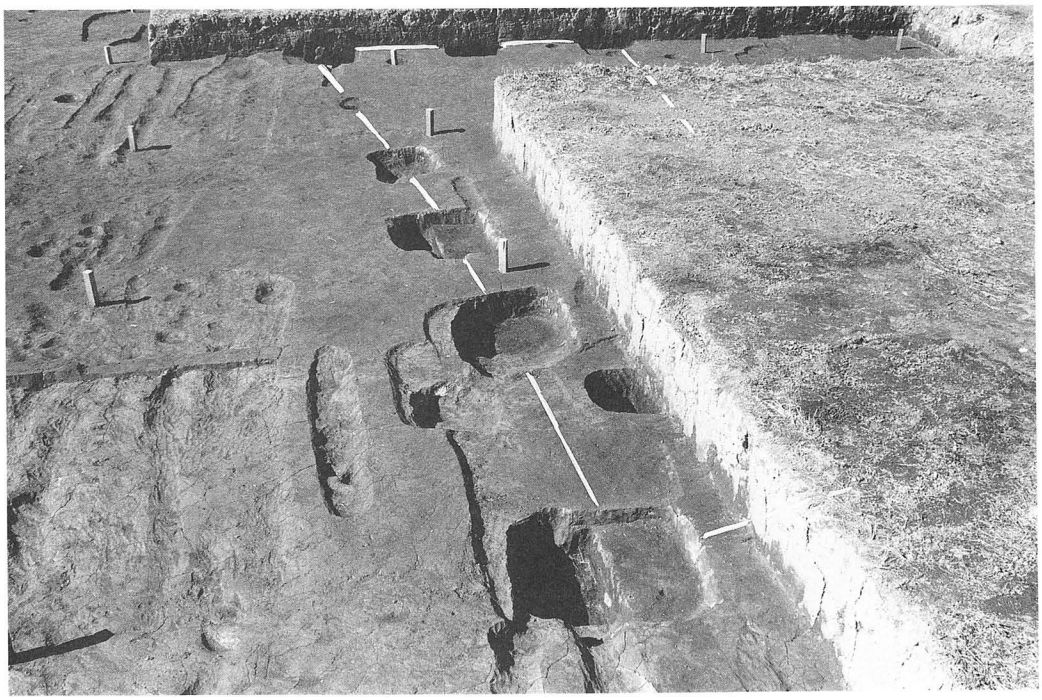
ＳＢ－68（北より）



ＳＢ－69（西より）

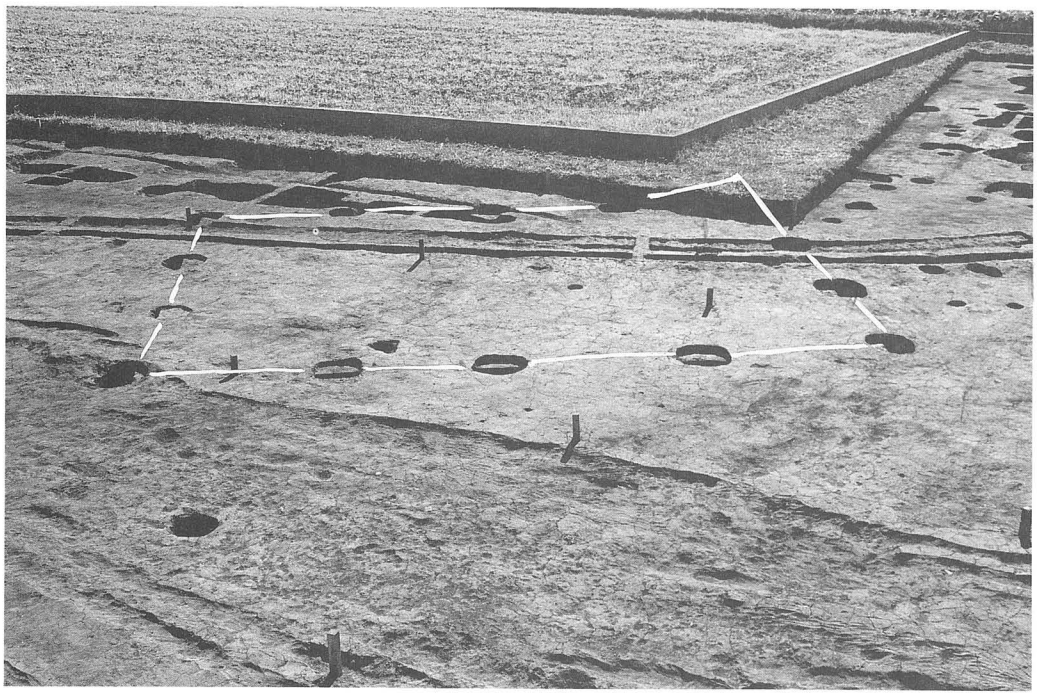


ＳＢ－70～72（東より）

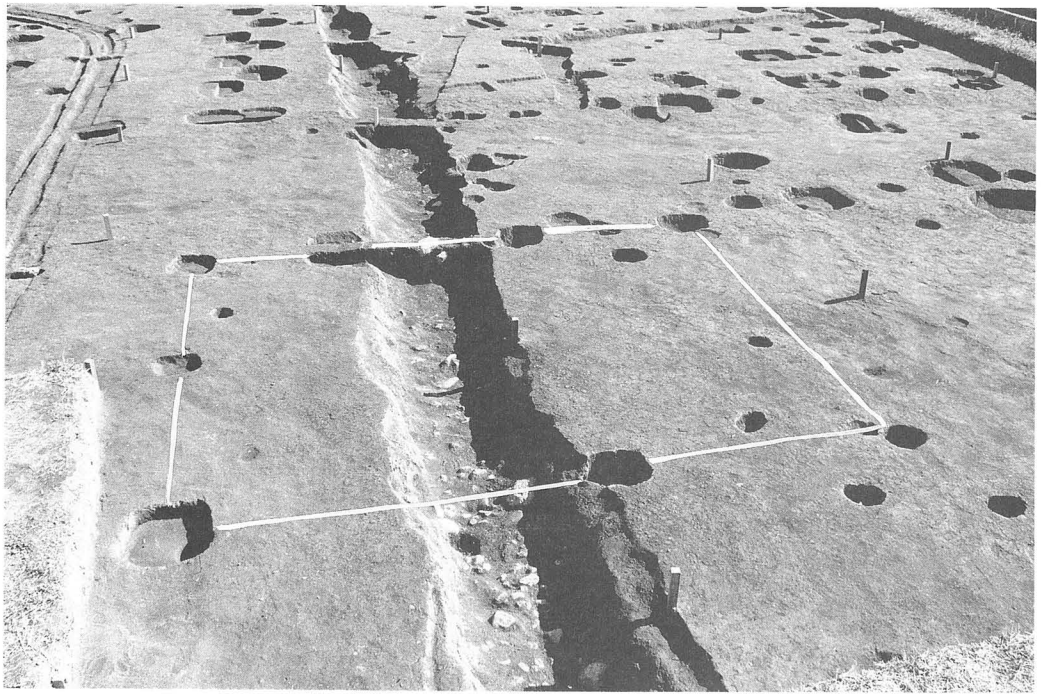


ＳＢ－73（東より）

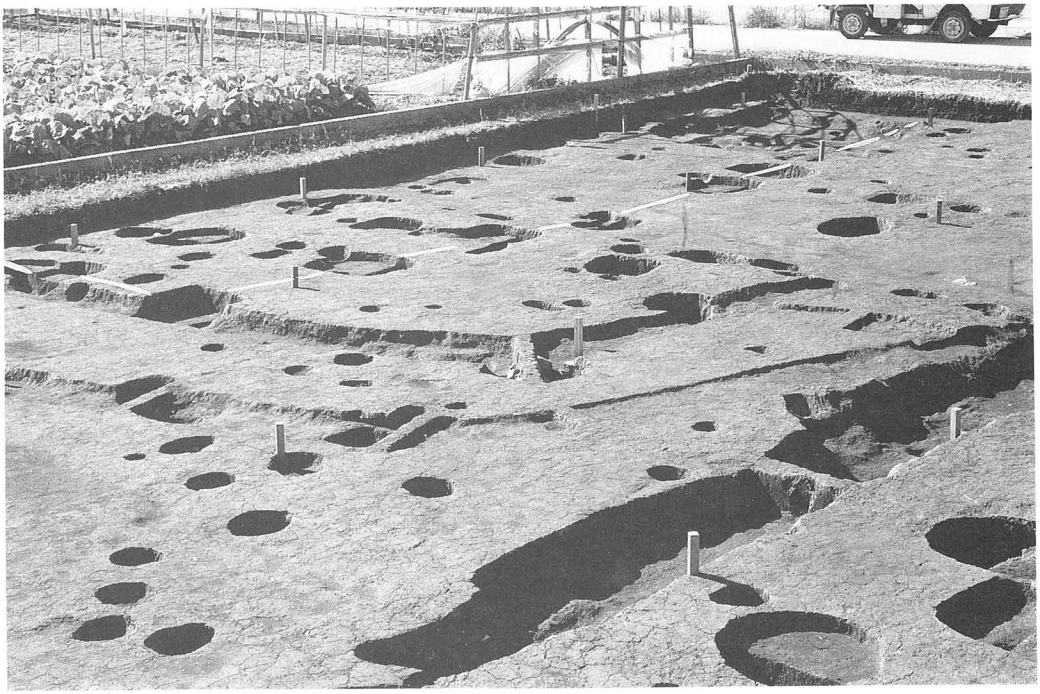
図版10



ＳＢ－74（北より）



ＳＢ－75（西より）

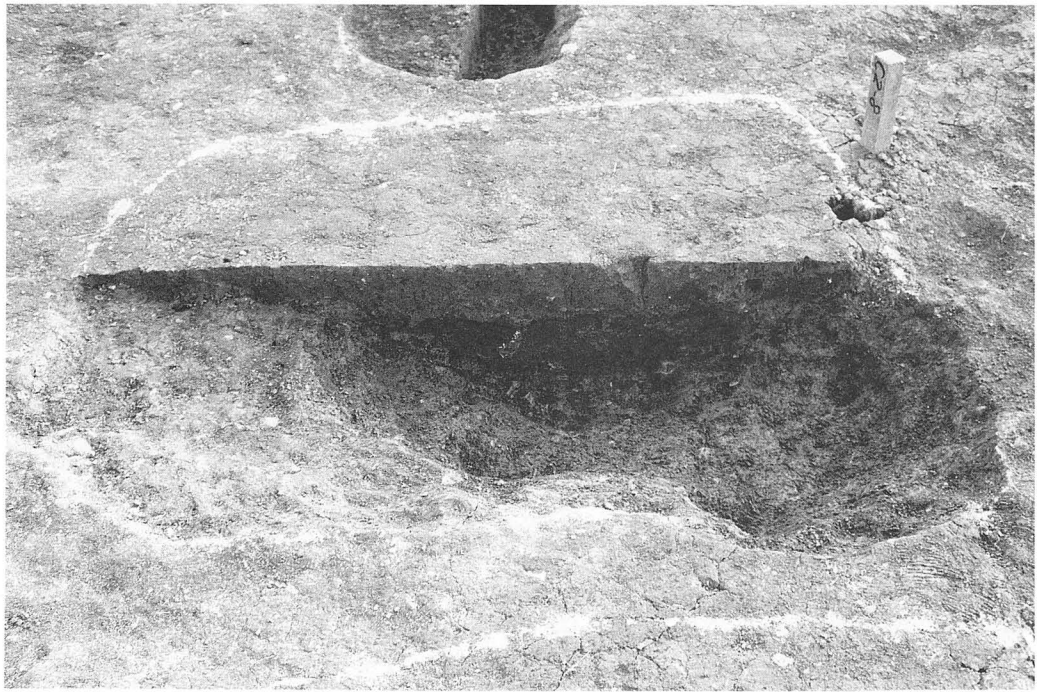


ＳＡ－20（東より）

ＳＡ－20（西より）

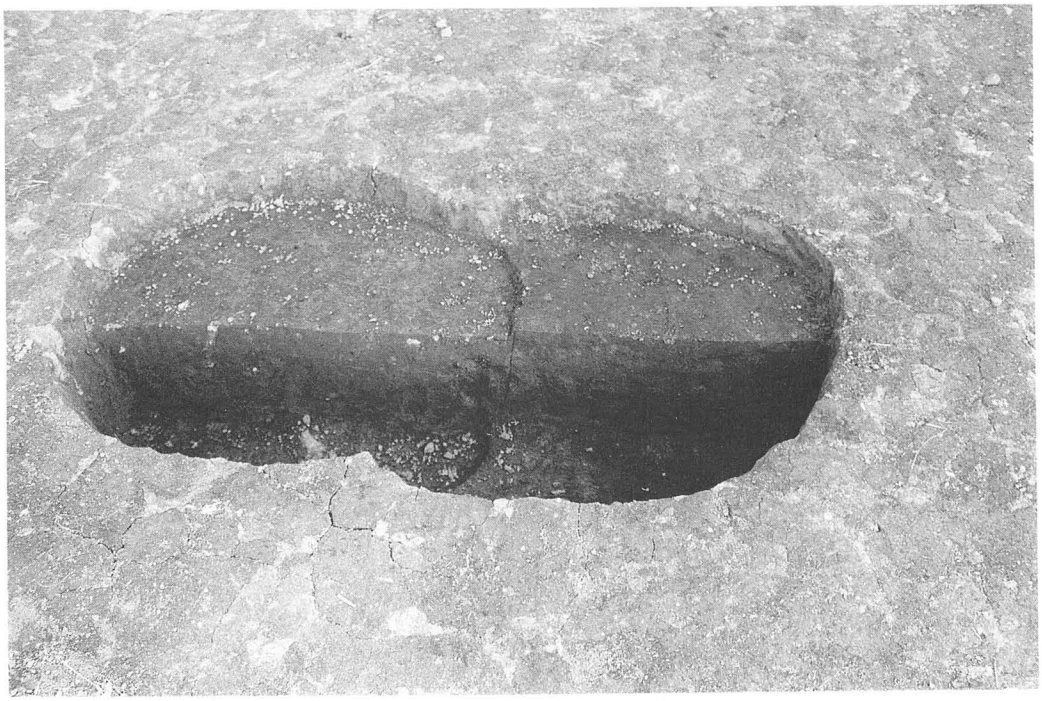
図版12

ＳＡ－21（北より）



ＳＡ－21のＰ－1（北より）

ＳＡ－22（北より）

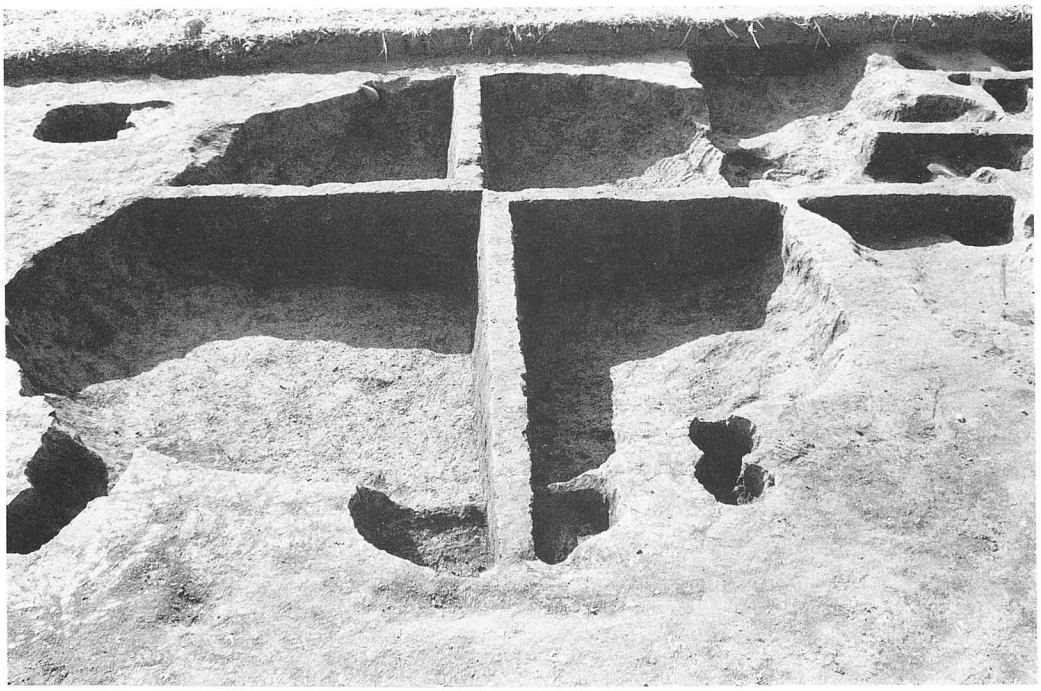


ＳＡ－22のＰ－3（西より）

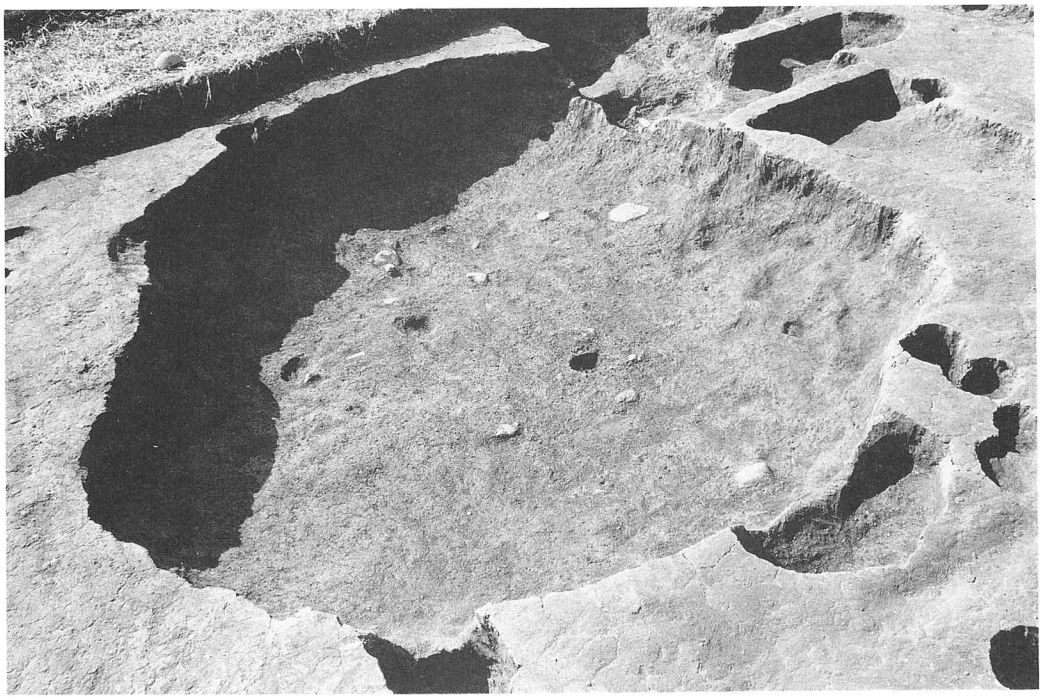
図版14

ＳＡ－23・24（西より）

ＳＡ－23のＰ－1（西より）

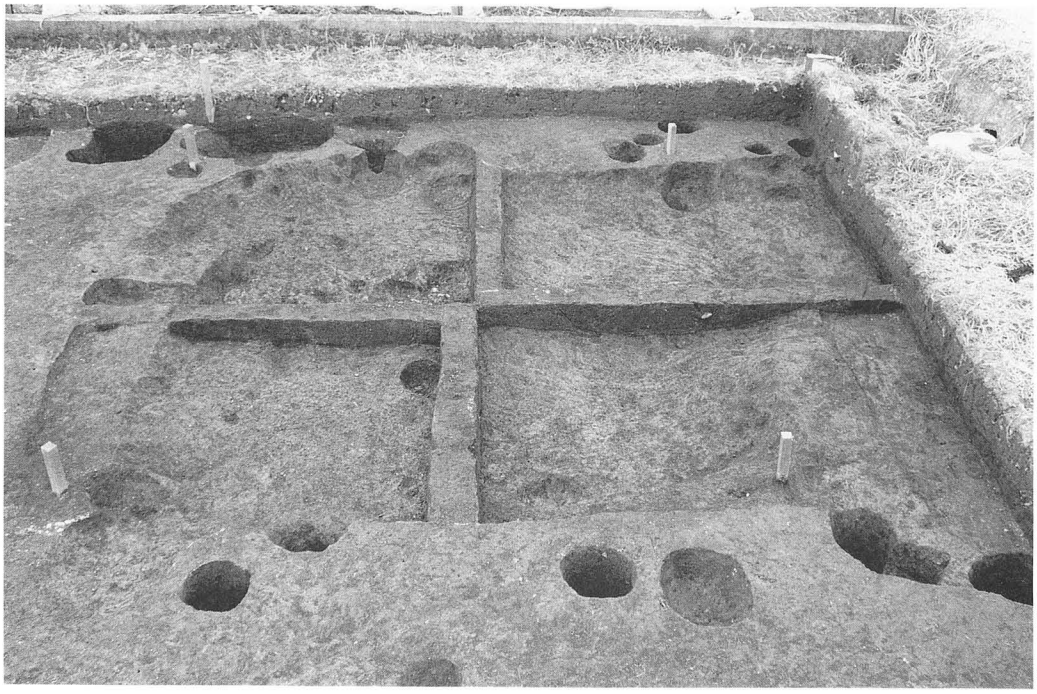


ＳＫ－113・114（北より）

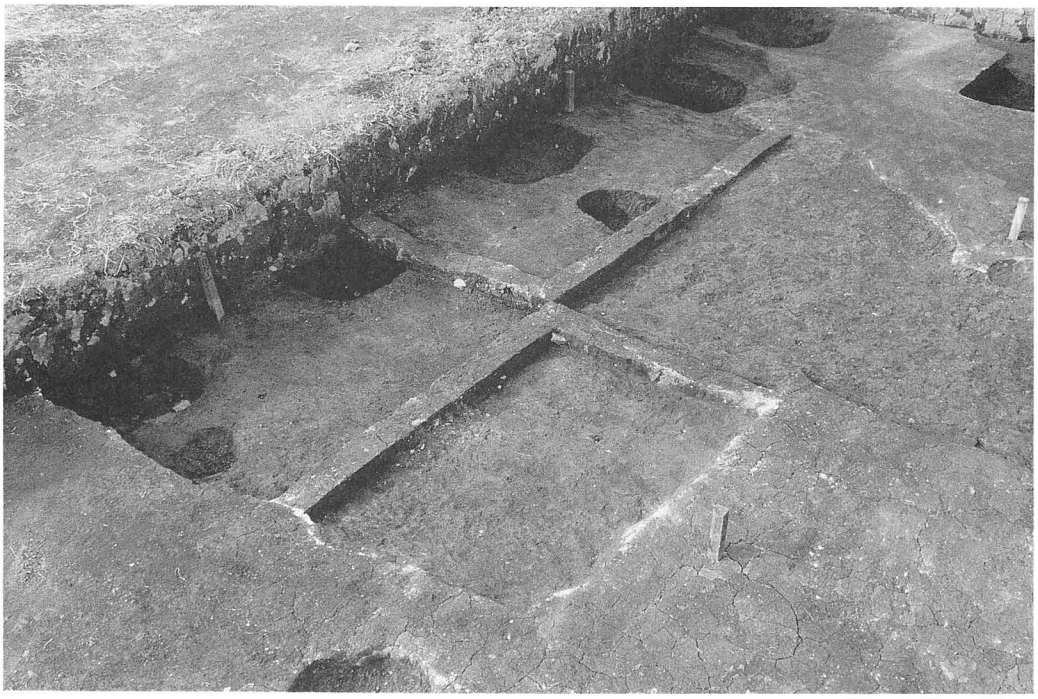


ＳＫ－113・114（北より）

図版16

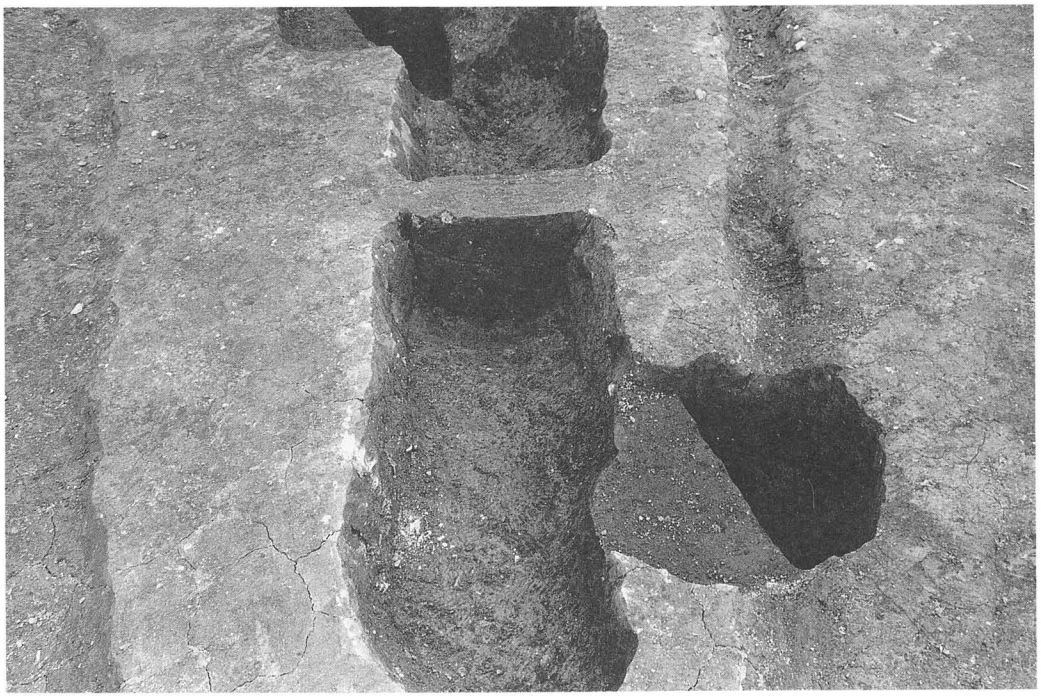


ＳＫ－115（北より）



ＳＫ－121・122（南より）

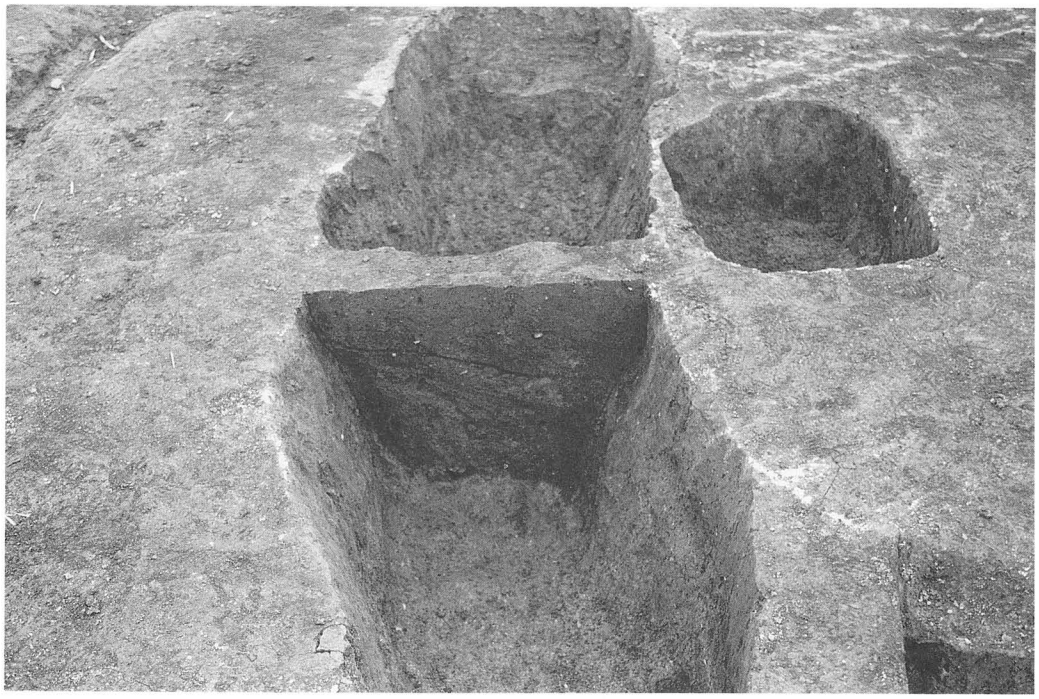
ＳＫ－117～119（東より）



ＳＫ－117（西より）

図版18

ＳＫ－118（西より）

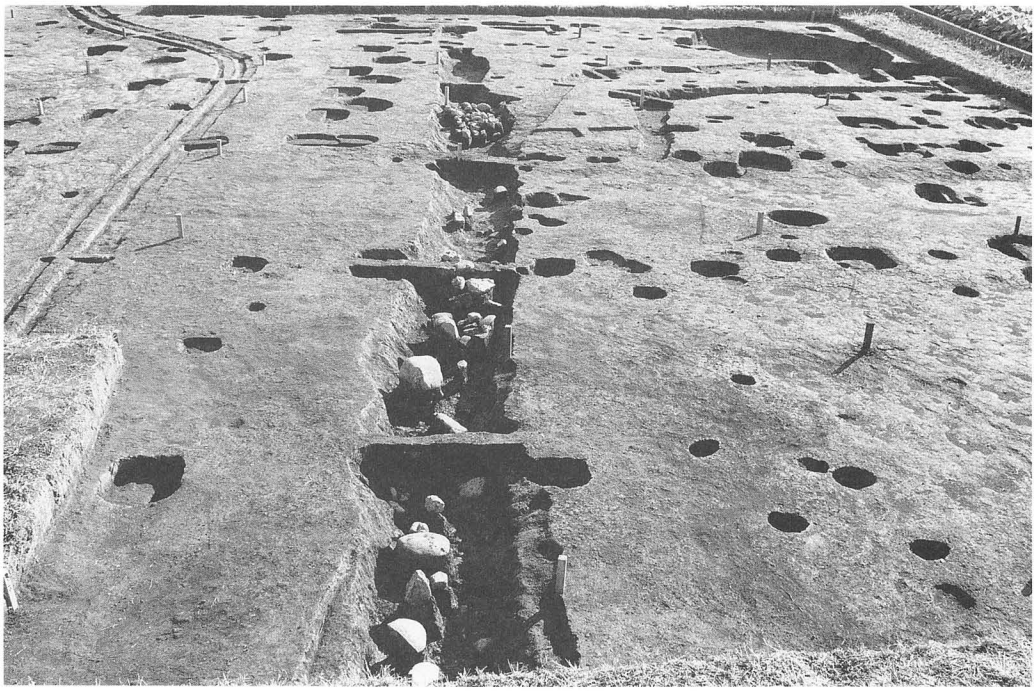


ＳＫ－119（東より）

ＳＫ－119（北より）

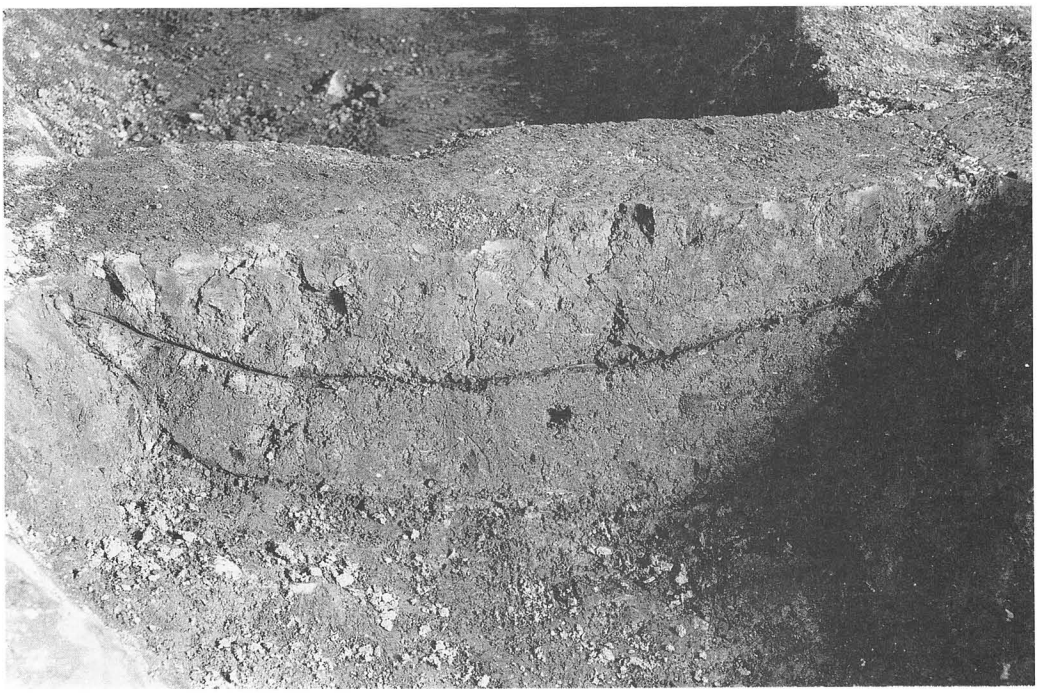
ＳＫ－119（北より）

図版20



ＳＤ－58（西より）

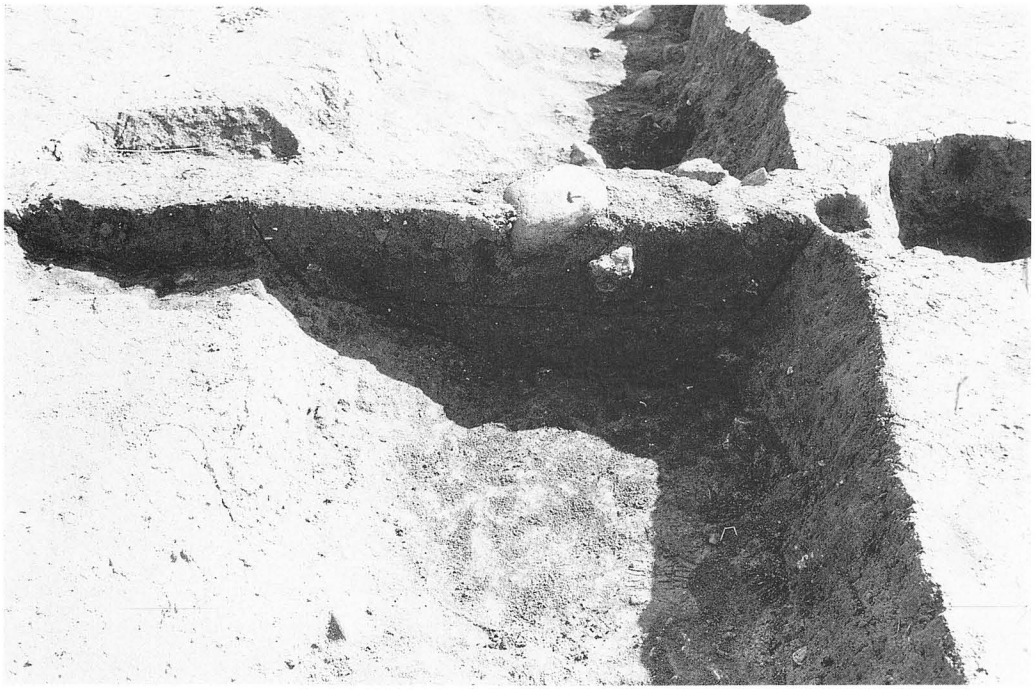
ＳＤ－58（西より）



ＳＤ－58（西より）

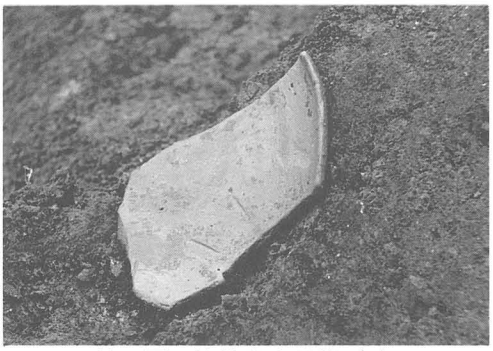
ＳＤ－58（西より）

図版22

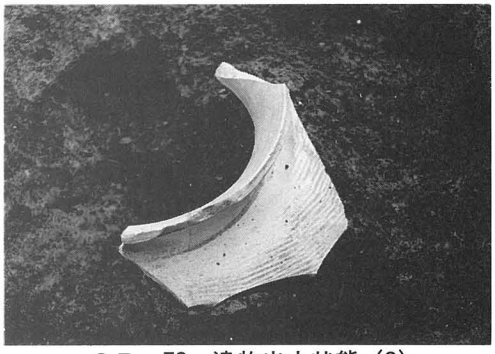


ＳＤ－58（西より）

ＳＤ－58（北より）

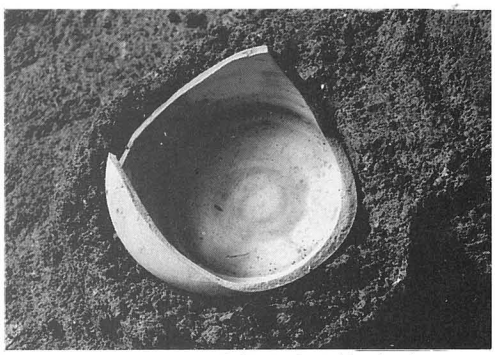


第Ⅲ層　遺物出土状態（7）

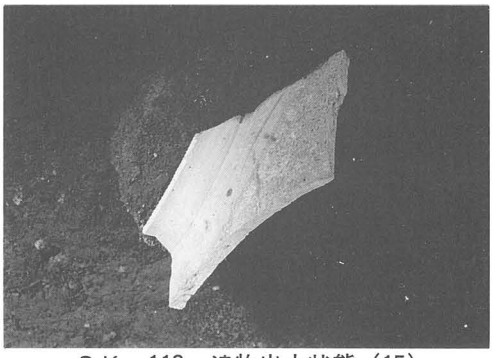


ＳＢ－70　遺物出土状態（8）

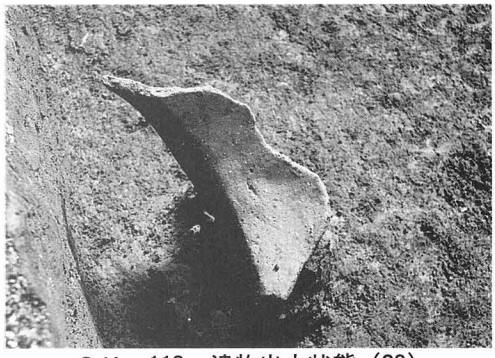
ＳＫ－113　遺物出土状態（12）



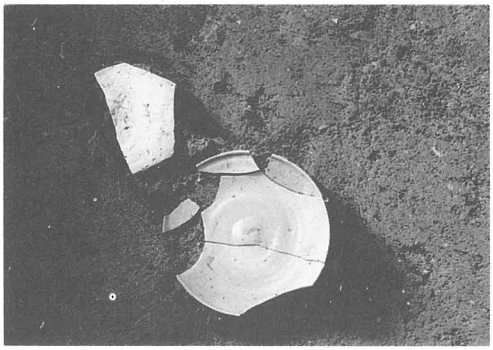
ＳＫ－113　遺物出土状態（14）



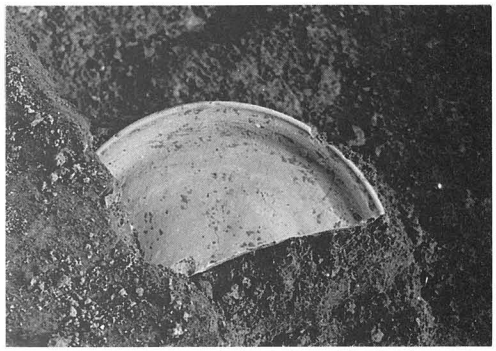
ＳＫ－113　遺物出土状態（15）



ＳＫ－113　遺物出土状態（20）



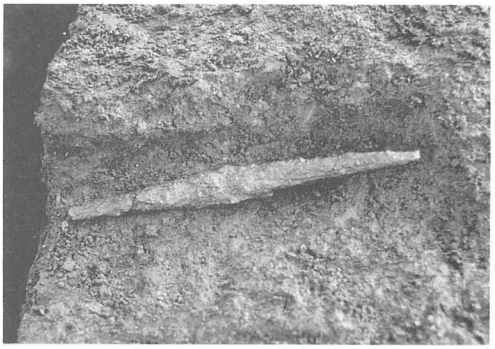
ＳＫ－114　遺物出土状態（22）



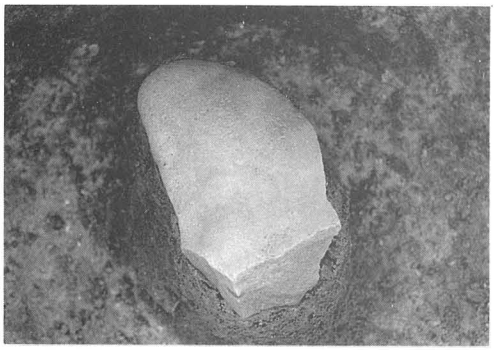
ＳＫ－114　遺物出土状態（27）

図版24

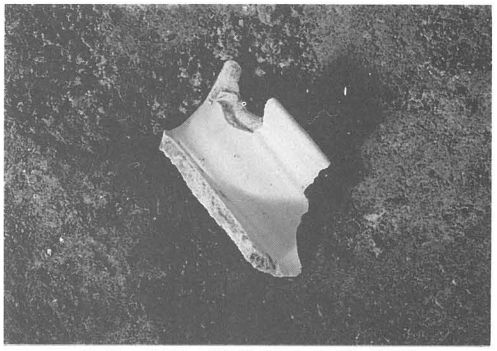
ＳＫ－114　遺物出土状態（28）



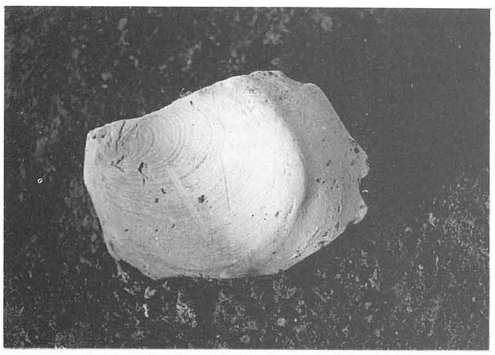
ＳＫ－114　遺物出土状態（30）



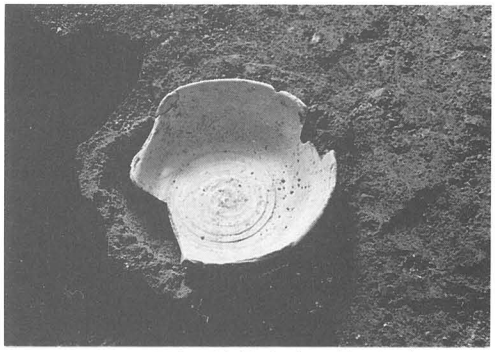
ＳＫ－114　遺物出土状態（31）



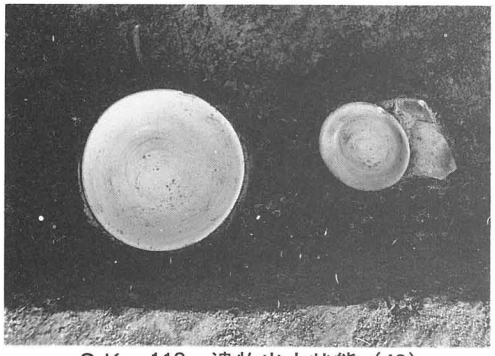
ＳＫ－115　遺物出土状態（35）



ＳＫ－118　遺物出土状態（38）

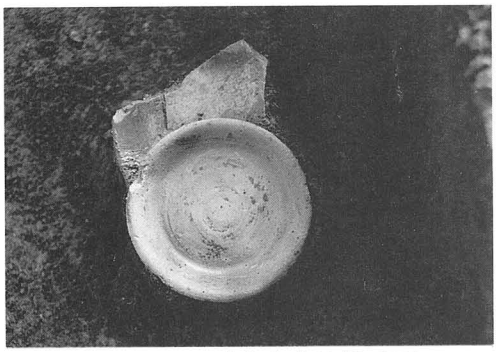


ＳＫ－118　遺物出土状態（42）



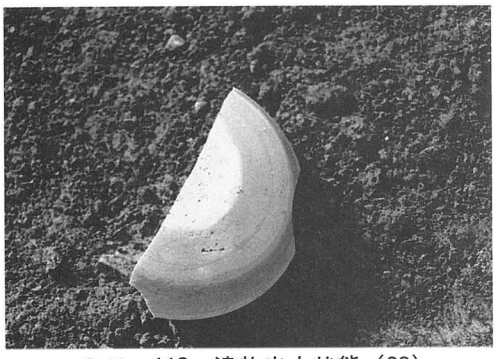
ＳＫ－118　遺物出土状態（43）

ＳＫ－118　遺物出土状態（52）



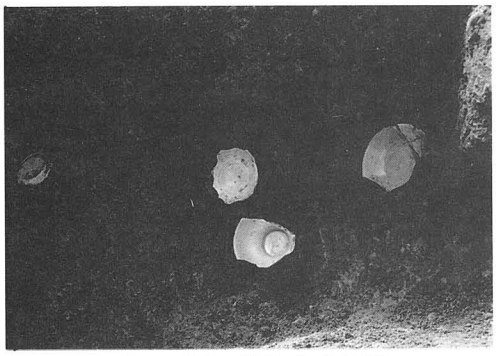
ＳＫ－118　遺物出土状態（59）

ＳＫ－118　遺物出土状態（67）

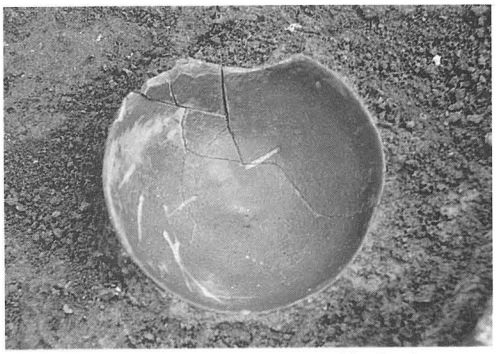


ＳＫ－118　遺物出土状態（68）

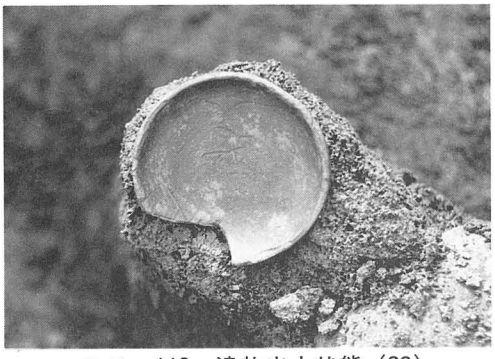
ＳＫ－118　遺物出土状態（69）



ＳＫ－118　遺物出土状態



ＳＫ－119　遺物出土状態（79）



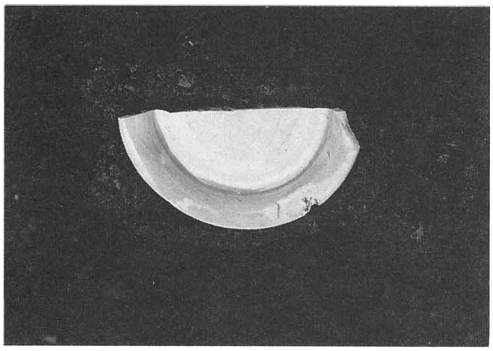
ＳＫ－119　遺物出土状態（80）

ＳＫ－119　遺物出土状態（81・82）

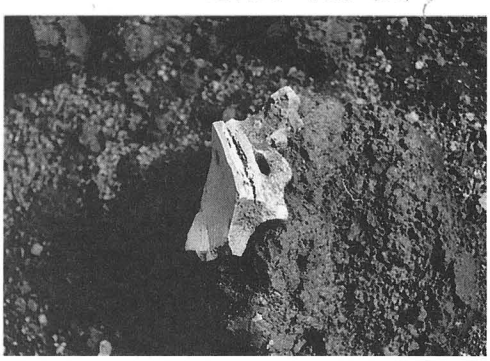
図版26

ＳＫ－119　遺物出土状態（83）

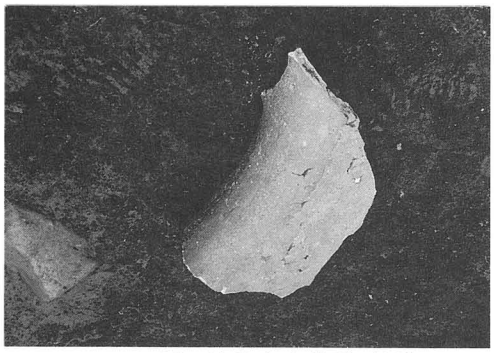
ＳＫ－119　遺物出土状態（84）



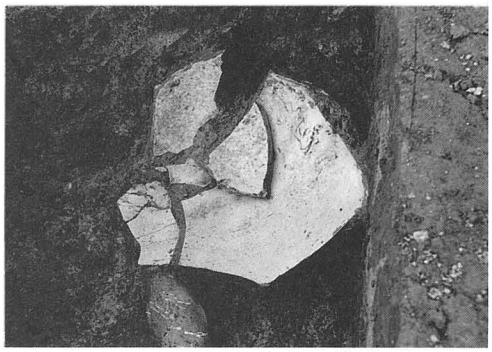
ＳＫ－119　遺物出土状態（85）



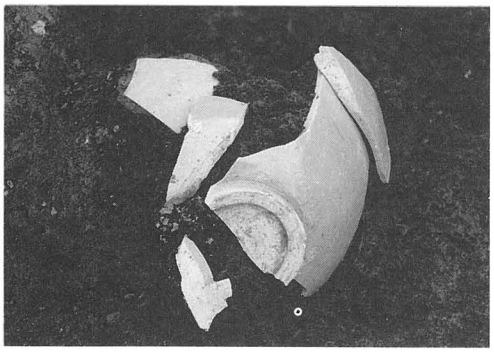
ＳＤ－58　遺物出土状態（95）



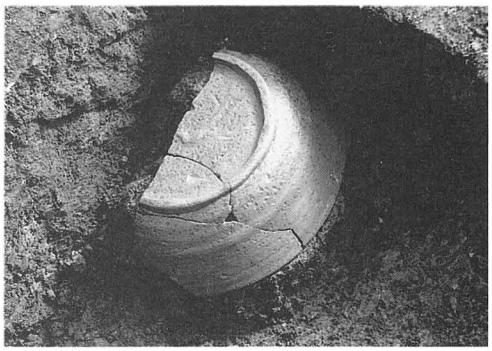
ＳＤ－58　遺物出土状態（96）



ＳＤ－58　遺物出土状態（96）



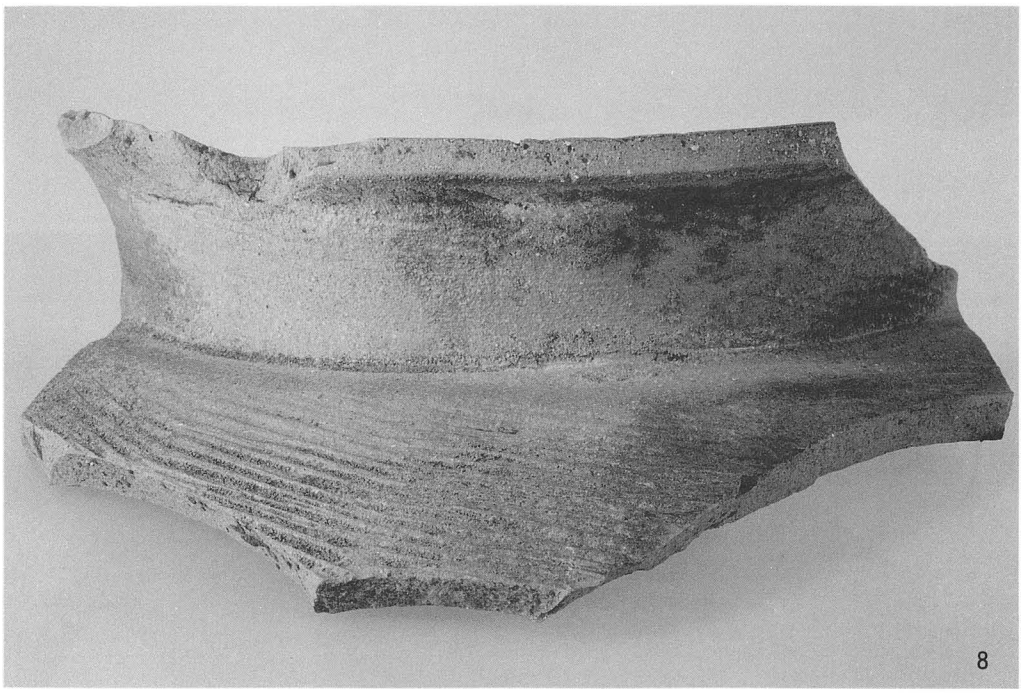
ＳＤ－58　遺物出土状態（97）



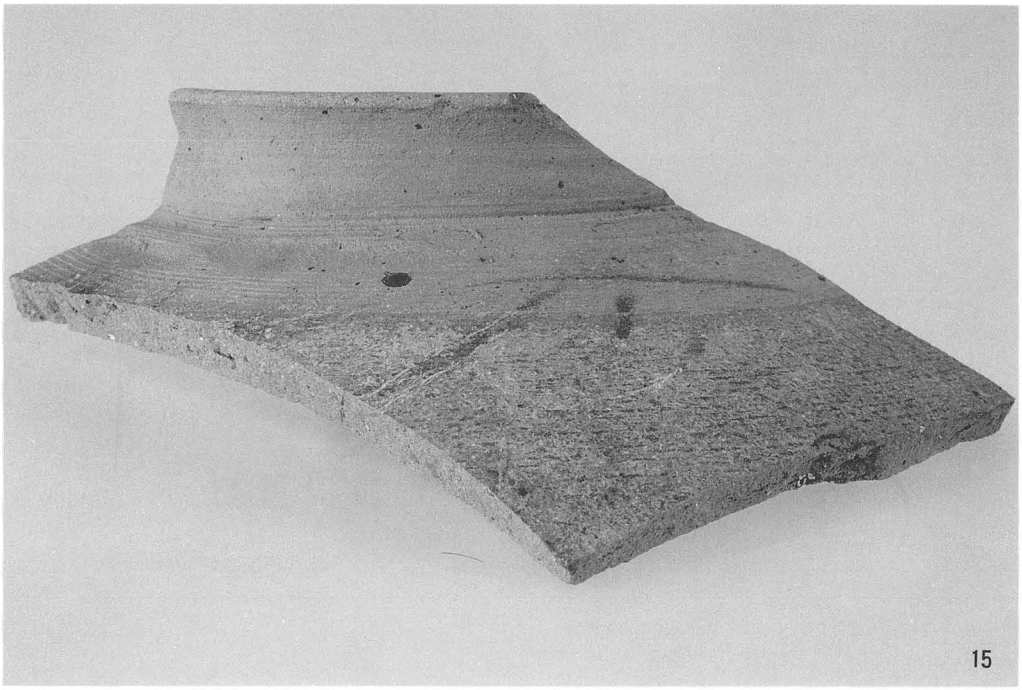
Ｐ－3　遺物出土状態（103）

ＳＤ－58　出土遺物

図版28



ＳＤ－70　出土遺物



ＳＫ－113　出土遺物

ＳＫ－113　出土遺物

ＳＫ－115　出土遺物

図版30

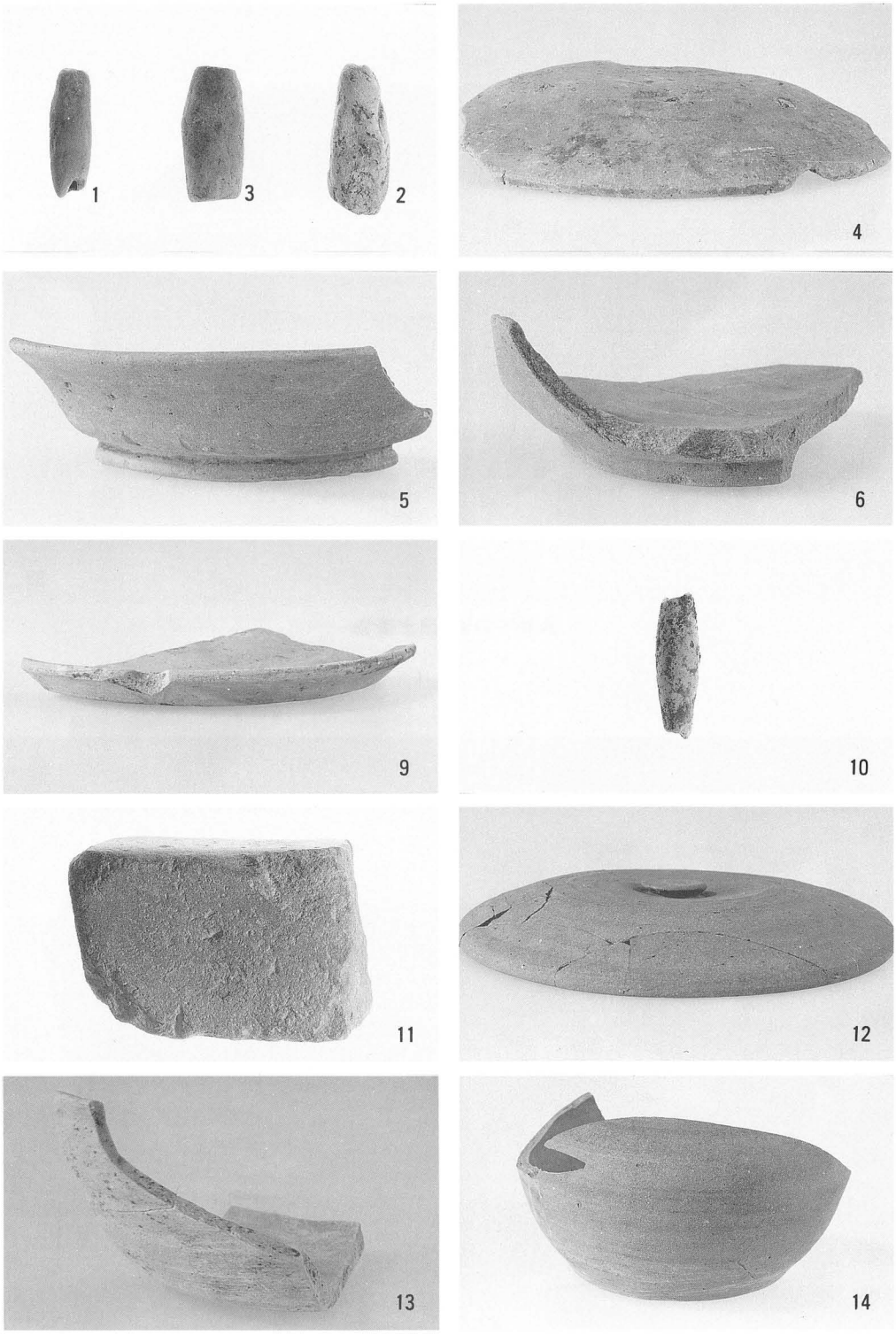
ＳＫ－119　出土遺物

ＳＫ－119　出土遺物

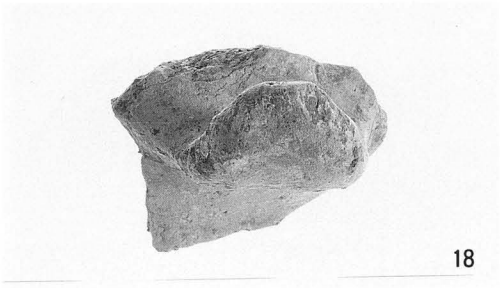
ＳＫ－119　出土遺物

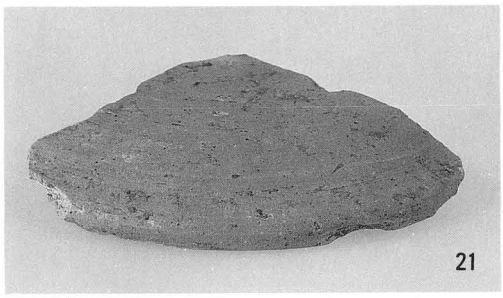
ＳＫ－119　出土遺物

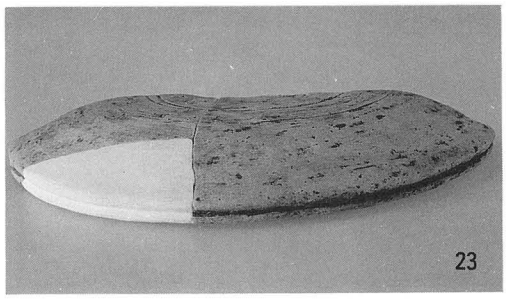
図版32

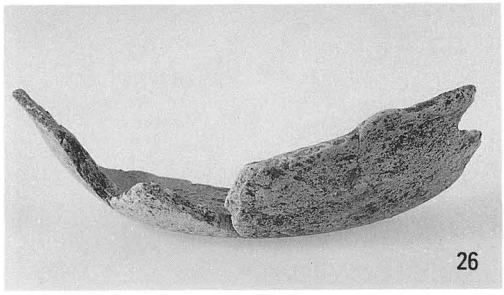


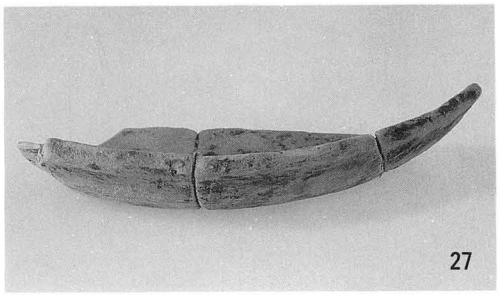
出土遺物 1

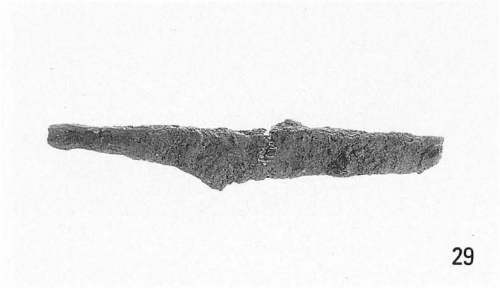


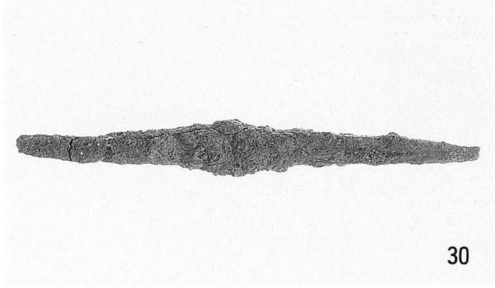




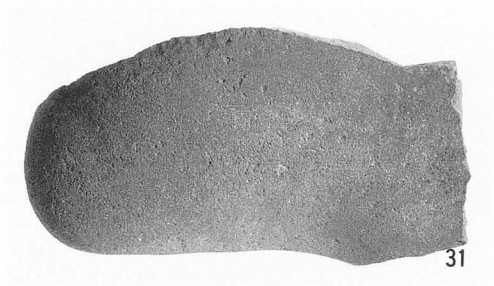


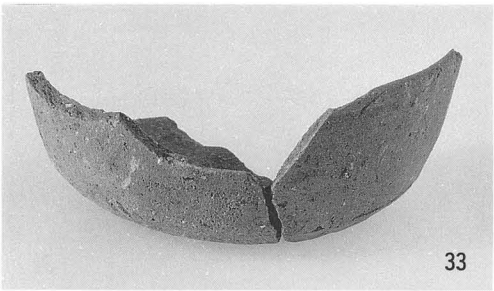


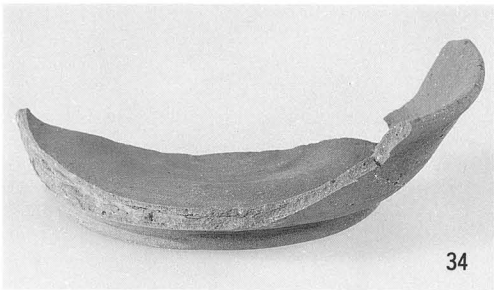


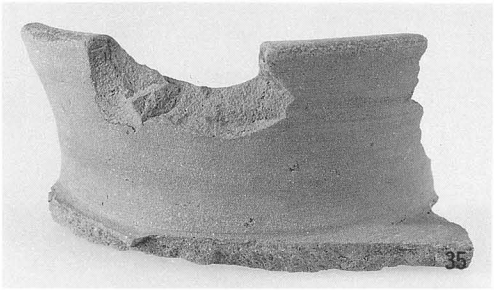


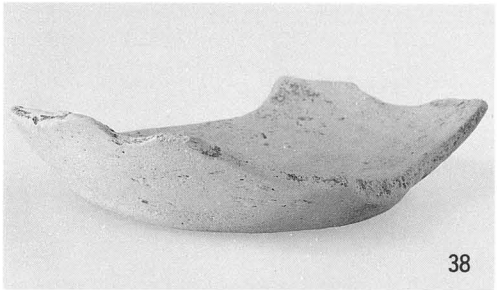
出土遺物 2

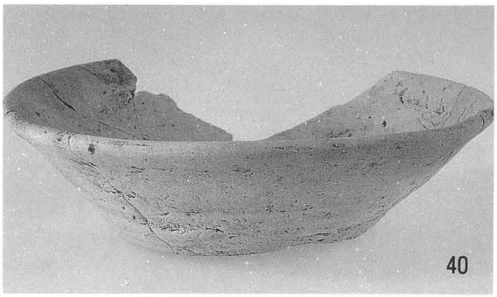


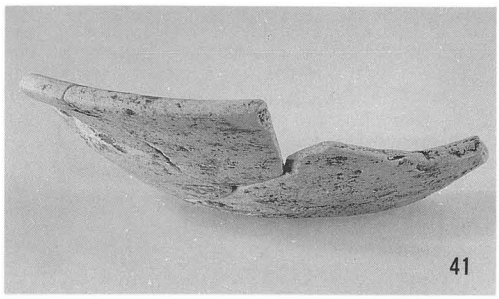






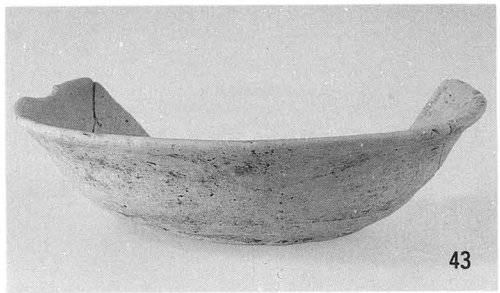




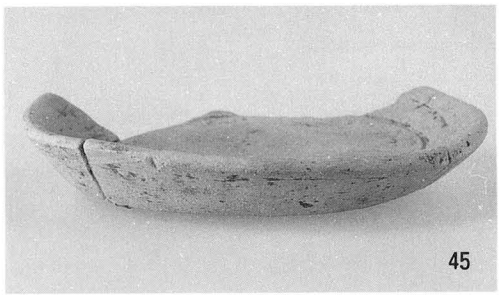


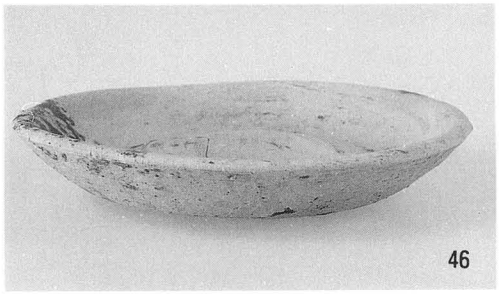
出土遺物 3

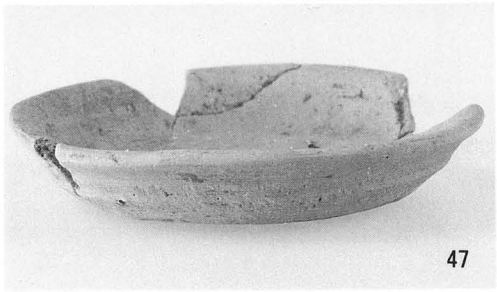
42


43

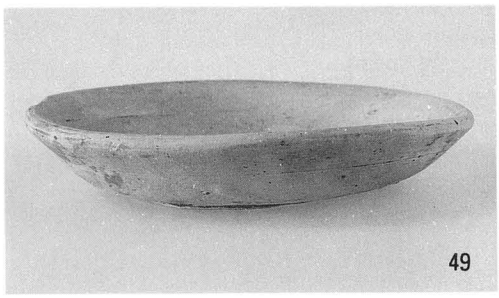
44


45

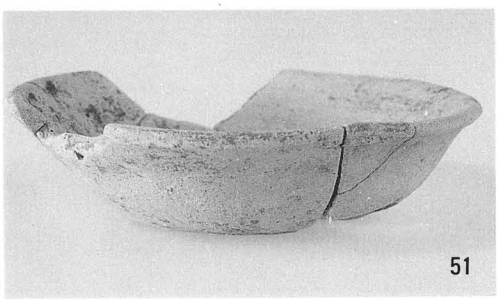

46


47

48


49

50

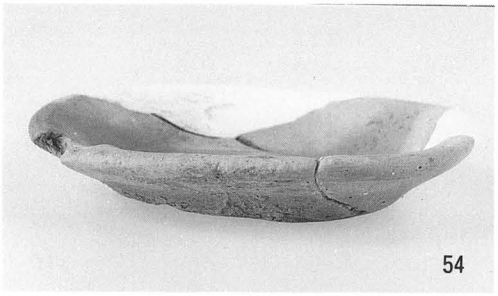

51

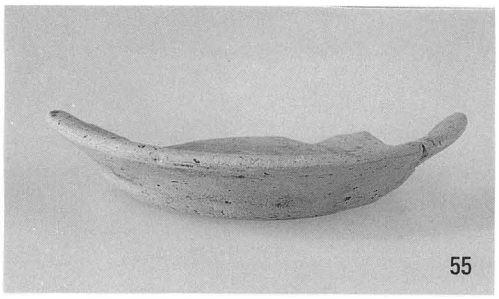
出土遺物 4

図版36

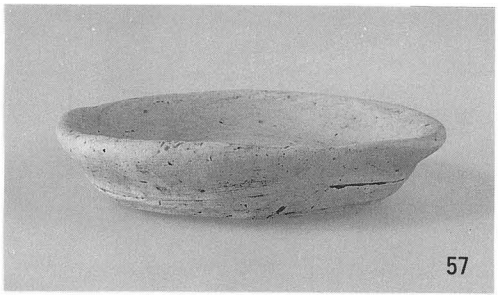
52

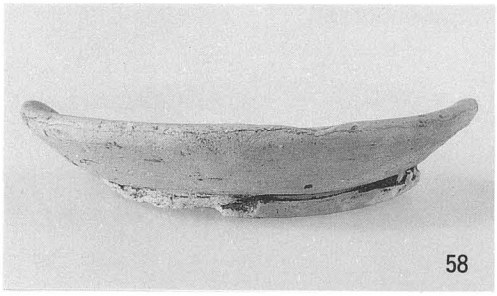
53


54


55

56


57

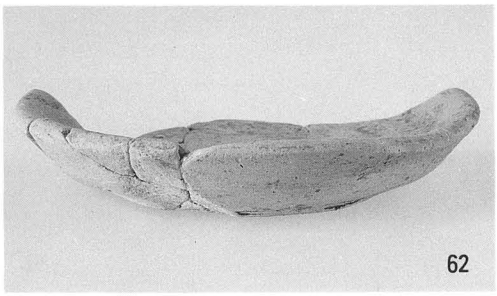

58

59

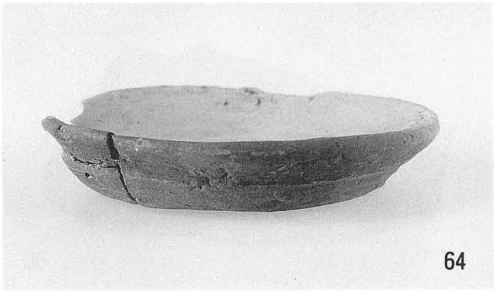
60

61

出土遺物 5


62

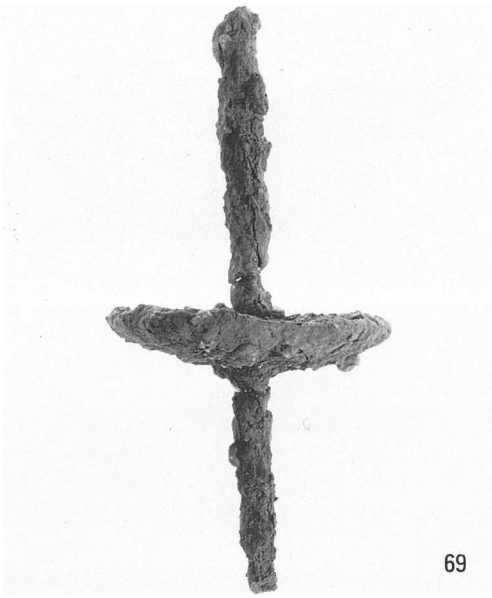
63

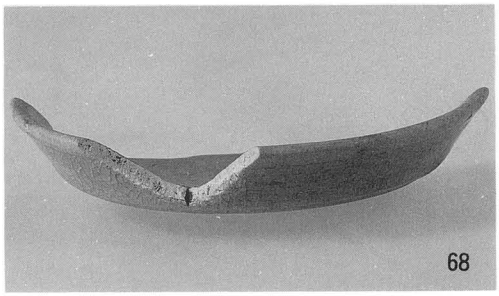

64

65

66

67

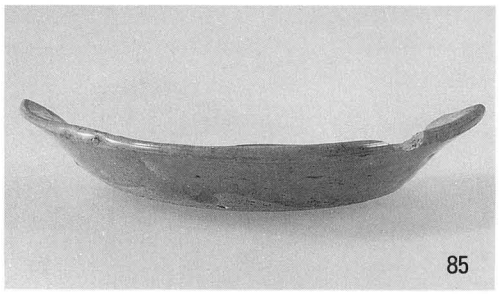

69


68

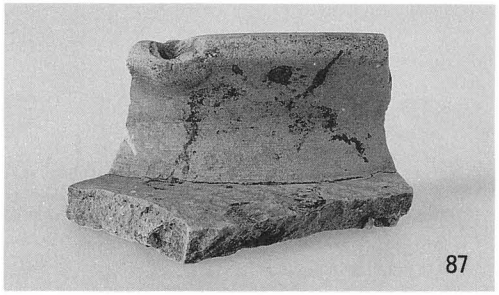
70

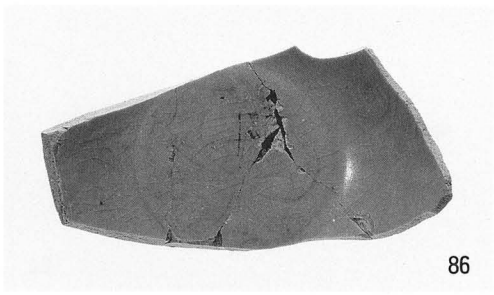
出土遺物 6

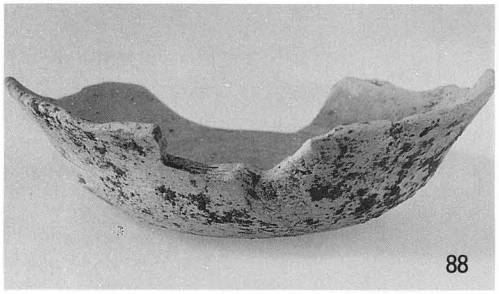
図版38

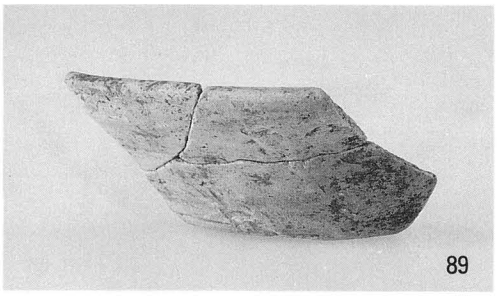

85

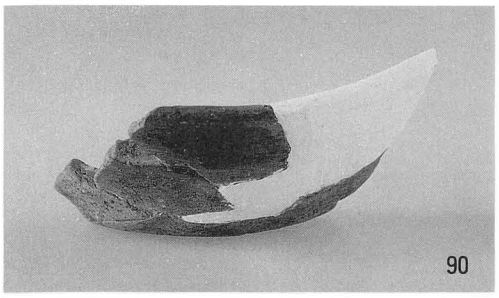
86

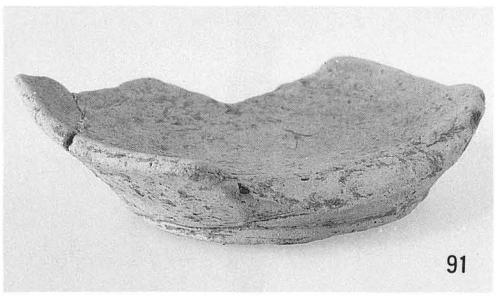

87


86


88


89


90


91

92

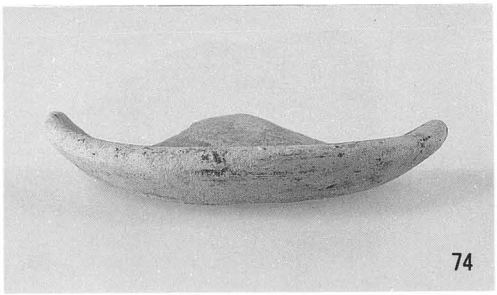
94

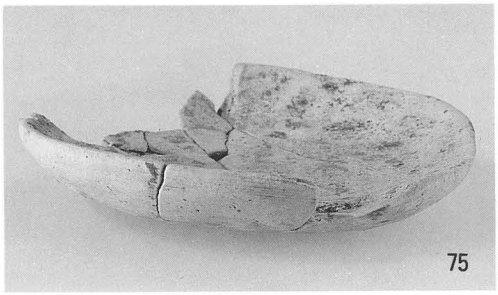
出土遺物 7

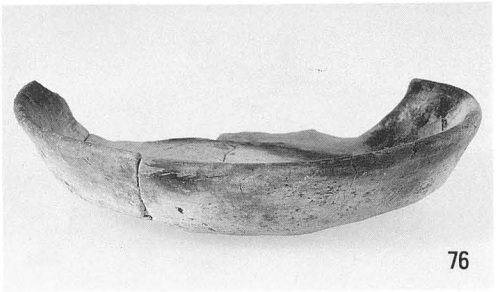
71

72

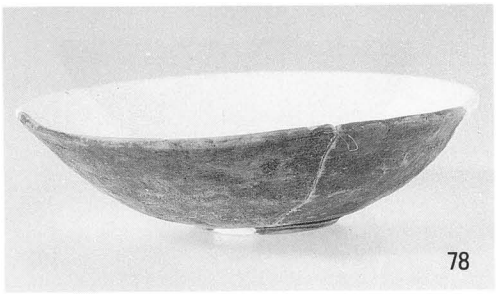
73


74


75


76

77

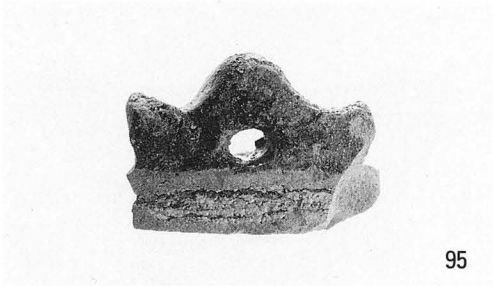

78

79

80

出土遺物 8

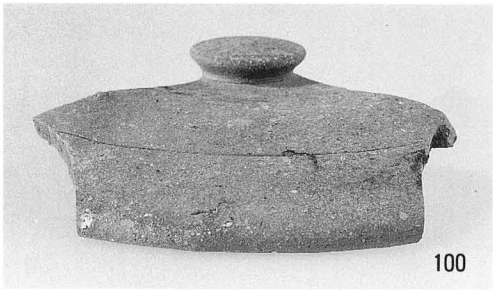
図版40

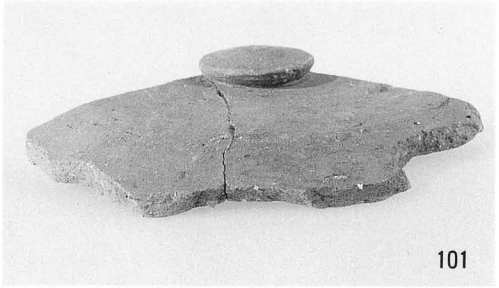

95

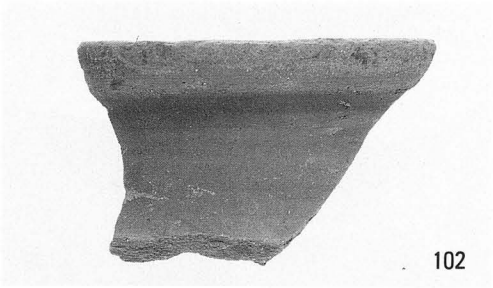
97

98

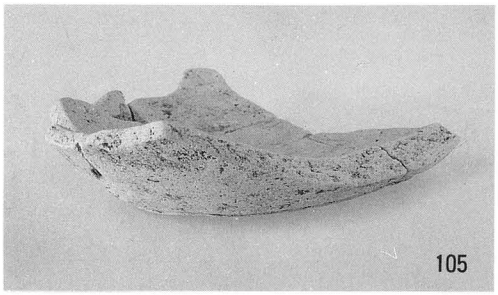
99


100


101


102

103


105

106

出土遺物 9

高知県埋蔵文化財調査報告書 第32集
土佐国衙跡発掘調査報告書
第 11 集
――金屋地区の調査――
平成３年３月31日
編集・発行　高知県教育委員会
（高知市丸の内1－7－52）
印　　刷　弘文印刷株式会社
（高知市与力町５－16）

付図　土佐国府跡官衙関連遺構
配置図（Ｓ＝1／2,000）

付図　土佐国府跡官衙関連遺構配置図（S＝1／2,000）